

AIOS

上智大学外国語学部シリーズ

# 新・地域研究の すすめ

---

英語圏編

2011

改訂版

上智大学外国語学部  
英語学科

# ALPHAS

上智大学外国語学部シリーズ

## 新・地域研究の すすめ

---

英語圏編

2011

改訂版

上智大学外国語学部  
英語学科

# 目 次

## 第1章 英語の世界

英語は世界の共通語.....	吉田 研作 ...	1
----------------	-----------	---

## 第2章 英語研究

### I. 理論言語学

言語学のすすめ.....	石川 彰 ...	12
21世紀の音韻論 .....	篠原 茂子 ...	29

### II. 応用言語学

外国語教授法.....	笠島 準一 ...	34
第二言語習得研究(Second Language Acquisition) ...	和泉 伸一 ...	41
Bilingualism and Bilingual Education .....	Mitsuyo Sakamoto ...	51
CALL: Using Digital Technology to Learn English...	Francis Britto ...	57

### III. 社会言語学

Sociolinguistics (社会言語学) .....	Lisa Fairbrother ...	80
--------------------------------	----------------------	----

## 第3章 アメリカ研究

アメリカ(史)研究との出会い.....	小塩 和人 ...	93
---------------------	-----------	----

## 第4章 英国・英語圏研究

### I. イギリス

シェイクスピア研究のすすめ……………	東郷 公德…	116
イギリス表象文化としての小説……………	小川 公代…	122
Recent UK Cinema ……………	John Williams…	130

### II. 英語文化圏

Australian Studies ……………	Michael G. Jacques…	137
Indian Studies ……………	Francis Britto…	145

あとがき……………		166
-----------	--	-----

## 第1章 英語の世界

### 英語は世界の共通語

吉田研作

世界には英語を話す人はどれぐらいいるだろう。10億人以上と言われている。しかし、英語を母語として話している人の数はそれを母語としていない人より少ない。つまり、英語の母語話者ではないが、自国内で英語を使って生活をしたり仕事をしたりしているか、自国内では使っていないくても、外国人とのコミュニケーションに英語を使っている人の数が、いわゆる英語のnative speakerより多いのである (Kachru(1990), Smith & Forman (1997), Crystal(2003)ら参照)。このように、母語話者よりも、非母語話者の方が多い言語は英語以外にない。日本語を話す人は圧倒的に日本人。外国人で日本語を第2言語、外国語として話す人の数は日本人で母語として日本語を話している人たちに比べてわずかしかない。ヨーロッパのあらゆる言語も同じ。フランス語も、ドイツ語も、スペイン語も。つまり、英語はそれだけ国際語・世界語になっているということなのである。そういう意味で英語は非常に特殊な言語だと言えるだろう。

世界の人口の3分の1ぐらいがモノリンガル。でも、3分の2の人たちは2つ以上の言語を話す、と言われている。パプアニューギニアでは数百の言語が話されているといわれているが、隣の村に行ったら違う言葉話していることさえあり、国民はみんな最低3つ4つの言語を話すという。EUでも最低3言語を学ぶことが原則。自分の母語と、もう1つ近隣諸国で話されている別のヨーロッパの言語、そして3つ目が国際語としての英語。フランスは昔からイギリスとは犬猿の仲で、比較的最近までフランスを旅行していて英語で道を尋ねても答えてくれなかったことがあった。ところが、そのフランスが2007年から小学校で英語を必修化した。世界中が多言語、多文化を当たり前とする時代になってきているのである。

世界は、1つしか言語を話さない人種が減っていく時代に突入している。2つ以上の言語ができることが当たり前で、3つ4つという人も少なくない。ルクセンブルグというヨーロッパの小さな公国では、生まれたときはルクセンブルグ語を話し、小学校に入ると授業はすべてドイツ語で行われる。さらに、中学校に入ると授業はすべてフランス語で行われる。しかし、ルクセンブルグには最近まで大学がなかったので、大学に行きたければイギリス、フランスそしてドイツなど、他の国に行くことが多かった。だから、ルクセンブルグ人も4つの言語を－4つ目は国際語としての英語－ほぼ全員が身につけている。中には、実に6つの言語を操ることが出来る人さえいるという。

そんなことができるのだろうか、と思うかもしれない。でも、それが当たり前という理論を展開する学者がいる。Cookはmulti-competenceという言葉を使っているが、人間は生まれがならにして複数の言語を学ぶ能力を持っている、と言うのである。

私は京都生まれだが、関西弁もしゃべるし東京弁もしゃべる。学者の集まりの学会では理論的な話ができるし、小さい子どもと話す時は子どもことばを使って、会話することもできる。人間は誰でも状況に応じていろんな言葉を話すことができる。そういう能力をみんな持っている。スペイン語とポルトガル語を話す人は、互いに大体わかるという。でも、別々の言語である。東京生まれの東京育ちは鹿児島弁や東北弁はわからないだろう。同じ言語と言いながら方言が違ったらわからない。言語と方言の違いは、科学的なものではなく、むしろ政治的なものなのである。だから、複数の方言や違うジャンルの言語が理解でき話せることと、複数の「言語」が理解でき話せることとは、基本的に同じことを意味する。これは、人間がだれでもいろんな言葉を身につける先天的な能力を持っていることの証であり、英語を学ぶこと、外国語を学ぶということは特別なことでなく、人間にとって当たり前のことだということなのである。

では、英語に目を転じてみよう。英語は多様化している。これは英語圏以外の国で英語が使われているということだけでなく、アメリカやイギリスなどの英語圏に見られる現象からも言えることである。例えば、アメリカには2億5000万人以上の人住んでいるが、その中の4000万人弱が、

英語を母語としない人たち。マクドナルドへ行ったらハンバーガーを注文したら、とてもアメリカ英語とは思えないアクセントで返ってくることがある。タクシーの運転手の英語もしかりである。イギリスでBBCのアナウンサーが使っているはずの「一番いい英語」と言われているRP (Received Pronunciation) を、現在英国中で使っている人が何%いるかという問に対して Jennifer Jenkins はわずか3.5%という。後の人は様々な英語を使っている、ということなのである。

### どんな英語を学べばよいか

英語が母語のはずの国で上記のような状況だとすると、我々外国人は、どこの英語を学ぶべきかわからなくなってくる。アメリカに行っても、イギリスに行っても、それこそ、どの英語圏の国に行っても、色々な種類の英語が話されている。英語を母語とする国でさえそうなら、英語を母語としないまでも、日常的に高等教育や社会生活で使っている国では、その国の人たちの母語の影響を受けた英語が話されている。インド英語、香港英語、シンガポール英語、タンザニア英語等々。それに加えて、我々日本人のように、英語を外国語として学んでいる人の英語は、さらに、日本語、中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語等の影響を受けている。つまり、同じ「英語」にも、実は「色々な英語」が含まれているのである。図1からわかるように、英語には、母語としての英語と非母語としての英語があり、更に、非母語英語には、国内で使われている環境 (intranational) と国内では基本的に使う必要がない環境 (non-intranational) がある。また、これらの英語とは別に、いわゆる国際英語 (International English) というのがあるが、Strevensによると、これは、理論的には、どの英語からも「等距離」にある英語なのである。つまり、国際英語は、母語話者の英語でもなければ、どこの国で使われている英語とも違う独自の英語なのである。

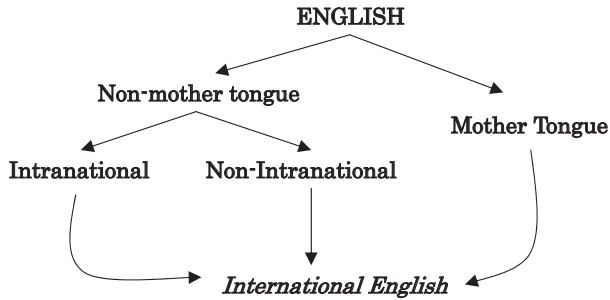


図 1. 『英語』の種類と勢力範囲

だとしたら、問題は、これら様々な英語に何か共通の構造的特徴があるかどうかだろう。McKayは文法構造に関する限り、Intranationalな状況で良しとされている英語と母語英語の間であまり大きな違いはない、という。また、Jenkinsは国際語の最も大切な要因は発音にある、という。そして、全ての非英語母語話者の誰にでも教えられる中核的な音声特徴が存在する、とも言っている。

しかし、国際英語に、そのような構造的共通性、というものが本当にあるのだろうか。

## 国際語としての英語の特徴

言語はコミュニケーションの道具であり、単なる構造の体系ではない。言語は、具体的なコミュニケーション・コンテキストがあって初めて成り立つ。This is a watch.という文は、それだけでは、何の意味もない。この文は、例えば、変った形のものを腕につけている人が、What's that? と聞かれた時の答えとして、This is a watch.と言った時に初めて意味を持つのであり、更には、What's that? と「質問」されたことに対してThis is a watch.という「情報を与える」という言語機能を表しているのである。つまり、言語は次のような要素からなっているのである。



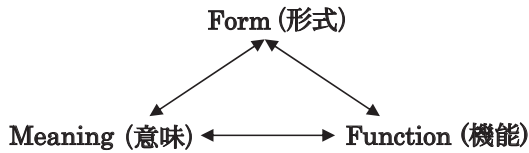


図2. 言語の主要素 (和泉, 2009)

そこで、国際英語というものがいつ、どのような状況で使われるかについて考えると、次のようになるだろう。

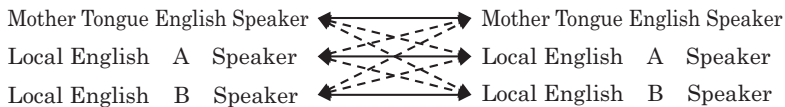


図3. 国際英語の領域

ここで矢印の両側にあるMother Tongue English Speakerは同じ国の人。Local English A Speakerも、Local English B Speakerも同様である。例えば、アメリカ人が同じアメリカ人と話していたとしたら、それは国際英語ではなくAmerican Englishになる。また、フィリピン人が同じフィリピン人と英語で話していたとしても、それは国際英語ではなくFilipino Englishである。更に、日本人が同じ日本人と英語で話したとしても（例えば、英語の授業等で）、それは国際英語ではない（日本英語である）。では、国際英語は、というと、図3の点線で表した部分がそうだ。アメリカ人がフィリピン人と、あるいは、日本人と英語で話したとしたら、そこに「国際英語」が生まれる。フィリピン人がアメリカ人、あるいは、日本人と話したとしたら、そこに「国際英語」が生まれるのである。

私たちは、例えば、ハリウッド映画を見ていて、英語がなかなかわからないことが良くある。普段、英語でコミュニケーション出来るのに、どうして、アメリカの映画がわからないのだろうか。それは、アメリカの映画は、アメリカ人が観ることを前提としており、アメリカ人なら分るであろうスラングや歴史的、社会的、文化的知識を前提に、アメリカ人同士なら問題なく理解

できるスピードで話されているからである。日本語を外国語として学んでいる人が日本人同士の話についていけないのと同じことである。

さて、私たちがアメリカ人と英語で話す場合、両者が共通に知っている表現、社会的知識、文化的知識を共通のスキーマ（前提知識）として話す。アメリカや日本の映画、音楽、政治、社会等について、また、共通に知っている英語の慣用表現や語彙などを使って話す。しかし、韓国人と英語で話す場合は、韓国人と通じ合える話題（韓国や日本の芸能人等）や表現を使って話す。つまり、相手が変われば、国際英語は変わるのである。それも単に国の違いだけでなく、相手の英語力によっても話すスピード、語彙、文型等が変わる。

図3の点線で示した国際英語は、従って、実際のコミュニケーションの状況の中で「作りだされる」もので、個々のコミュニケーション状況によって（相手によって）変わるものなのである。つまり、コミュニケーションなくして国際英語はありえない、と言っても過言ではない。

このことは、Krashenが提唱し、Longらが発展させた「適切インプット」「インタラクション仮説」によって説明できる。私たちは、人と話す時、必ず、相手と「調整」しながら、互いに理解できる最も良いレベルの言語を使う。つまり、ネイティブ同士が話している英語が難しいのは、外国人と話す時の話し方と違うからである。国際英語の最も大切な基準は、客観的で世界共通の英語の構造の存在の有無ではなく、communicability、つまり、特定のコミュニケーション状況において、どれだけコミュニケーションができるか、というプラクティカルな基準なのである。

## 国際英語と文化の問題

言語について考える際に必ず考慮しなければならないのが「文化」。言語は文化の最も顕著な産物だということを考えると、言語と文化は切り離すことはできない。しかし、ここで言う国際英語、というものが、様々な文化的背景を持った人が互いに話す時に使われるものとしたら、文化は一体どうなってしまうのだろう。図3の実線で示したように、同じ国の人

同士が話をするのであれば、当然、両者の共通している文化が前提となって話が進む。笑い話などは、まさにその典型で、アメリカ人同士なら笑えるジョークも、外国人には何がおかしいのかさっぱり分からないことがよくある。しかし、図3の点線で結ばれている部分はどのようなのだろう。互いに違った文化的背景を持ったもの同士だと、共通の文化的背景を前提にすることができなくなる。

ここで大切なのは、社会言語学者（McDermott、Schegloffら）がいう、いわゆるミクロ文化、という考え方だろう。これは、二人の人間がコミュニケーションをする時、当事者間に何らかの小さな個別「文化」が生まれ、それが共通の土台となって話が形作られる、という考え方である。国際的なコミュニケーションを考えた場合、「日本」という文化が「アメリカ」という文化と話をするのではなく、一人の「日本人」が一人の「アメリカ人」と話をする。そして、その際に大切なのは、生まれ育った文化的背景が違ふことが前提となるので、互いによりよく理解しあうためのコミュニケーション・ストラテジーの活用なのである。相手が言っていることがわからない時に、I don't understand. Could you explain that for me? Is this what you mean? と言って意味の確認を行う。自分が言っていることが相手にわかっているかどうかを確認するために、Do you see what I'm saying? For example.....という。つまり、「意味の交渉」をするための技術を身に付ける必要があるのである。

それと同時に、自分の国や文化について相手にわかるように説明できる言語能力が不可欠となる。日本人なら、日本のことをしっかり相手に伝えられるようにしなければならない。国際コミュニケーションを成功させるためには、まず自分のことを知り、自分について明確に相手に伝えられるだけの知識と発信能力を身につけなければならないのである。国際英語を使うためには、まず、自らの国や文化についてしっかり学ぶようにしなければならない。

## 国際英語と個別言としての英語

このように、国際英語を使う場合は、必ずしも個別言語としての英語（アメリカ英語、イギリス英語等）の背景知識を全て理解している必要はない。国際英語は、様々な国や文化を背景に持った人と話をする時に使われる英語であり、話す相手が違えば、文化的背景も違ってくる。つまり、国際英語には、特定の文化はない。実際に特定の人とコミュニケーションをしている時に、その人と自分との間に生まれるミクロ文化こそが大切なのである。

では、アメリカ英語やイギリス英語のような個別言語としての母語英語は必要ないのだろうか。そうではない、例えば、英文学に興味があるとか、アメリカやイギリスの地域や社会に興味がある。音楽や文化に興味がある、という人は、当然、個別言語としての母語英語を学ぶ必要がある。でないと、英文学はわからない。アメリカ社会はわからない。図4を見てみよう。

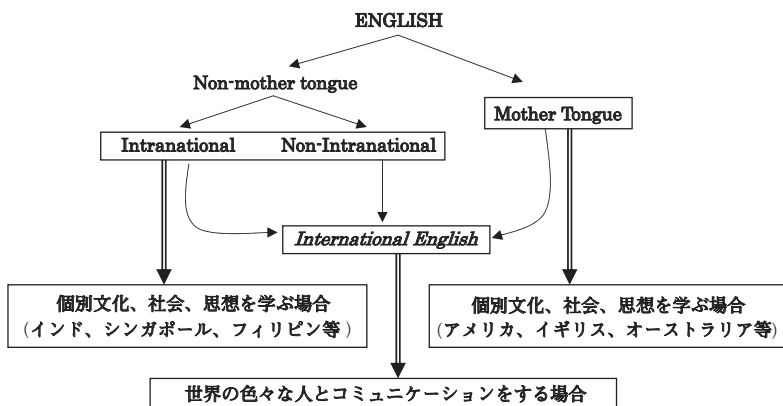


図4. どの英語？

最後に：モデルとしての英語、目標としての英語力

最後に、自らに問いかけて欲しい。「自分はだれの英語をモデルにすれ

ば良いのだろう」。ネイティブの英語？日本人の英語？インド人の英語？ここで間違ってはならないのは、「目標」とする英語と「モデル」にする英語の違いである（Jenkins）。モデルにする英語は、その通りにならなくても、自分が学んでいく過程で一つの規範として使う英語であり、「目標」としての英語は、自分が実際に到達したい、身につけたい英語力ということが出来るだろう。

よく聞く話だが、長い間日本で英語を教えているネイティブ・スピーカーが、時々本国に帰り、家族と会った時に、What happened to your English? と聞かれることがある、という。ゆっくり話す。丁寧に話す。極端なスラングを使わなくなるなど。なぜか。日本のような外国に長い間住んで、そこで英語を教えていると、日本人にわかりやすい英語に段々変わっていく。つまり、ネイティブ・スピーカーが日本人との間でコミュニケーションが出来る「国際英語」を身につけるからである。更に、アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語等が、それぞれの国で話されていると、その国の英語の特長をもろに反映していて、わかりにくいことが良くあるが、彼らが日本の語学学校などで教えていると、その独特のアクセントなどが薄れていき、わかりやすくなっていくことがわかる。また、国際英語といえども、元を正せばネイティブの英語がその原型なのだから、文法規則や発音等も、ネイティブの英語が元になっていることに違いはない。つまり、国際英語のモデルは、「国際的なコミュニケーション」の場でネイティブ・スピーカーが使っている英語、とするのが最も正しいだろう。

しかし、彼らの英語がモデルだからといって、私たち日本人の中で、アメリカ人になりたい人、イギリス人になりたい人、というのはめったにない。彼らの英語はモデルにはなっても、必ずしも私たちが身につけたい英語の目標にはならないのである。例えば、「誰のように英語ができるようになりたいか」という問に対して、Obama大統領とか、Hilary Clintonさんという答は返ってこない。逆に、歌手の宇多田ヒカルさん、アカデミー賞助演女優賞候補になった菊池凛子さん、サッカーで有名は中田英寿さん、英語の達人松本道弘先生、スケートの村主章江さんなど、日本人で英語が

できる人の名前が出てくるだろう。つまり、ほとんどの日本人は、「日本人として英語ができる」人を目標にしているのである。

英語の世界は広い。私たちが英語を学ぶ目的は何か。それによってどのような英語を学ばばよいか。誰をモデルにし、誰を目標にするかが決まってくるのである。

### 参考文献

- Cook, V.J.(1995). Multi-competence and the learning of many languages. *Language, Culture and Curriculum*, 8, 2, 93-98
- Crystal,D.(2001). *Language Death*. Cambridge. New York: Cambridge University Press
- Crystal, D.(2003). *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*, 2nd Edition. New York: Cambridge University Press
- 和泉伸一 (2009).『フォーカス・オン・フォーム』を取り入れた新しい英語教育」大修館
- Jenkins, J.(2000). *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press
- Kachru, B(1990). *The Alchemy of English: The Spread, Functions and Models of Non-Native Englishes*. Urbana: IL. University of Illinois Press.
- Krashen,S.D(1982). *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford: Pergamon Press
- Long, M(1985). Input and second language acquisition theory. In S. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in Second Language Acquisition*. Rowley, MA: Newbury, 377-393
- McDermott R., & Tylbor H.(1986). On the necessity of collusion in conversation. In S. Fisher & A. Todd (Eds.), *Discourse and Institutional Authority: Medicine, Education and Law*. Norwood, NJ: Ablex, 123-139
- McKay, S.(2002). *Teaching English as an International Language*. New York:Oxford
- Schegloff, E. A.(1987). Between micro and macro: context and other connections. In Alexander, Giesen, Munch & Smelser (eds.) *The Macro-micro Link*. Berkeley: University of California Press, 107-134.

- Smith, L. E., and Forman, M.L. (1997). *World Englishes 2000*. Manoa: University of Hawaii Press
- Stevens, P. (1980). *Teaching English As an International Language: From Practice to Principle*. Oxford: Pergamon Press
- Tanaka, S. (1997). Eigo gakushu to sinrifutan-My English ron (Learning English and psychological burden-theory of My English) in Suzuki, Y., Yoshida, K., Shimozaki, M. & Tanaka, S. *Komyunike-shon tositeno Eigo kyoikuron*. Tokyo: ALC
- Yoshida, K. (2007). International English as performance-based phenomenon. In *Selected Papers from the Sixteenth international Symposium on English Teaching. English Teachers' Association, ROC: Taipei*. pp. 172-179
- Yoshida, K. (2005). The Fish Bowl, Open Seas, and International English. *KOTESOL Proceedings 2004: Expanding Horizons: Techniques and Technology in ELT*. KOTESOL, 11-20
- Yoshida, K. (2002). Fish Bowl, Open Seas and the teaching of English in Japan. In Baker (ed.) *Language Policy: Lessons from Global Models*. Monterey: Monterey Institute of International Studies, 194-205.

## 第2章 英語研究

### I. 理論言語学

#### 言語学のすすめ

石川 彰

#### 1. 言語を通じて世界を見る

大学生として勉強を始めるにあたって、多くの学生諸君が言語に興味を持つ。それは外国語への興味であったり、言語の成り立ちや歴史への興味のような言語の姿をはっきりと把握したいという気持ちであったりする。言語は人間と他の動物を区別するもっとも明白な特徴であるから、人間とはなにかという問いかけは必ず言語の探求へとつながっていくと言えるだろう。

##### 1. 1 物理的世界

我々が日々暮らしている世界について考えてみよう。「世界」という言葉は政治や経済、外交などの分野で使われる「さまざまな国からなる集合体」という意味とは別に、個人を取り巻く「生活の場」という意味で使われる。この意味の世界には大きく3つの種類がある。一つは個人を取り巻く物理的な世界で、これは文化や国を超えて人類普遍の原理で動いていると考えられている。近代の自然科学は物理的世界を貫く原理を明らかにするため数学や論理学をはじめとするさまざまな概念的な道具を開発してきた。これらの道具は数学で代表されるように、自然界に起こる現象を数式という文で記述することで、理解、分析、操作を可能にする一種の言語である。我々が自然に習い覚える言葉とは違って、これらの言語は人類が意図的に構築してきたものであるから、人工言語と呼ばれる。



数式に頼るだけでなく、日本語や英語などの自然言語を使って物理的世界を記述して、説明することも日常的に行われている。学校教育では現代の科学で受け入れられている物理的世界の理解の仕方を広めることを目的にしている。ここでは物質や生物の成り立ち、宇宙の構成を理解するためのモデルを学ぶのであるが、それぞれのモデルに特有の語彙が存在し、それらの多くは「細胞」、「原子」、「X線」、「地殻変動」などのように日常的な文脈でも流通するようになっている。

物理世界の記述に用いられる言語は自然界に関するさまざまなモデルとともに発達しているので、物理、化学、生物のそれぞれの分野が多数の専門分野に細分化され、それぞれの分野で多年の教育と訓練を通じて習得される。したがって、教育や経験の度合いに応じて、物理的世界の記述や説明で生み出すことのできるテキストの種類に明瞭な差が生じる。マニュアルに従って操作をするだけの言語活動では物理的世界の理解に新たな貢献はないが、研究によって新しい現象を発見し、その現象を説明するモデルを提案するような高度な言語活動では、物理的世界の記述のための言語を直接的に創造することになる。

## 1. 2 社会的世界

自然界の法則が支配する物理的世界に対して、我々が帰属意識を持つのは社会的世界である。社会的世界は家族からはじまり、私的あるいは公的なさまざまな大きさのグループから出来ている。個人はいくつものグループに同時にその成員として帰属しているのが普通で、家族の一員で、いくつかの友達のグループや同好会のような集まりのメンバーで、特定の会社勤め、出身地と現在または過去の居住地にいくつかの地縁があり、国籍によって日本人あるいはイギリス人であるという具合に、同時に複数のアイデンティティを持っている。それぞれのアイデンティティを代表するグループには、グループ独自の言語がある。

地域的な差を示す方言はよく知られた現象で、方言が独自の言語体系であることは多くの人がすぐ認めるであろう。ところが、保守層と革新層というようなグループの間では一見どちらも同じ言葉を使っているようだ

が、「自由」、「民主的」、「平和」など要となる単語の理解が全く相容れないという事態もよくある。これは社会的なグループには、グループを支える行動規範の台本のようなものがあるからで、グループにとってもっとも重要な行動規範を支える概念に注目すれば、そのグループの特徴が分かると考えられている。例えば、日本社会というグループにとって、「恩、和、義理、遠慮、甘え」などの概念がそのようなものであるという指摘は多くの人によってなされてきた。日本人にとっては当たり前の概念であるというばかりでなく、これらの概念は我々が自分や他人の行動を判断するときに暗黙の前提となっているので、そのような前提を共有しないグループの人たちとの間に意志の疎通の思わぬ障害になっている可能性もある。

このように社会的なグループというのは、同じ言語を使う人の間にも、さまざまな程度の差はあれ言葉遣いの異同があり、ある種の言語的な障壁を作る可能性がある。しかも一人の個人が多数の社会的なグループに同時に属するのが普通であるから、さまざまなアイデンティティが要求する互いに異なる行動規範から生じる概念理解の食い違いに我々は日常的に取り組んでいると言える。

社会におけるマジョリティとマイノリティという問題も同様の言語理解の食い違いを生じさせるものであり、法律的な身分の違いという視点からだけでなく、帰属するアイデンティティ社会の違いという観点からの理解も必要である。それぞれのグループの行動規範は明示的に示されたものでなく、例えば文化人類学者や文化研究者の永年の研究を俟って初めて明らかにされるという性質のものであるから、恐らくはグループの成員にも明示的に示されることはなく、暗黙的に了解されているだけである。したがって、それぞれのグループの行動規範を支える台本とその台本にもとづくグループ独自の言語行動の研究が必要となる。

同じ言語内でも帰属グループによる言語障壁の問題が生じるので、異なる言語間では言語障壁は更に大きなものとなることは容易に想像がつく。国際化の波の中で、外国との交流もますます盛んになることが予想されるが、言葉を通じて互いに理解をすることは決して容易なことではない。日本も明治以来諸外国とくに西洋の文物を招来するために、外国の文献と取

り組むことによって、異文化のあり方を少しずつ理解してきた。何年もの研鑽を積んで外国語に習熟し、実務的な経験を踏まえて、意志の疎通を確実なものにして行くという方策で対処してきたわけだが、技術の革新とともにコミュニケーションのあり方が変わり、外国語の専門家でなくても、外国にいる人たちと対面しながら会話ができる状況が日常化したり、移民や留学で外国語の社会にマイノリティとして生活することも珍しいことではなくなったりするという変化が起きている。ここで問題となるのは、外国語が理解できないということではなく、母国語と外国語の間の概念理解の食い違いに気が付かないということである。たとえば、日本語の「公平」と英語の fair は同じ概念を表していると考えてよいのだろうか。日本語独自の概念である恩や義理や甘えなどと同様に英語には英語文化独自の概念があり、それぞれの言葉には同様に独自の概念がある。グローバル化の中で見失いがちなのはこの事実で、それぞれの文化の独自性を理解することなしには、外国との相互理解はありえない。英語を国際共通語として相互理解を図りましょうという方策は、英語の持つ文化的独自性を十分に理解した上でないと、英語概念の理解が不十分であったため、大きな誤解につながる危険がある。この辺の事情は Anna Wierzbicka の数多い著作に詳しく論じられている。

このように我々を取り巻く社会的世界では国内的にも国際的にも言語を通じて個人が帰属する社会で暗黙に行われている行動規範を研究することが非常に重要である。

また、インターネットの発達により、地域や社会的な階層の境界を超えた人のつながりが生まれ、今まで存在していなかった社会的なアイデンティティが誕生しつつある。閉塞的な政治・社会状況を変革する原動力としてソーシャル・ネットワークキングによる連帯がイスラム世界だけでなく、世界中で威力を発揮した。従来はコミュニケーションのほとんどありえなかった異なる社会的言説が伝統的な政治プロセスを介在させずに直接的に交渉を行う状況で社会的世界を規定する台本自体も徐々に変化をしていくことが予想される。この辺の事情は多くの分野で論じられているが、黒崎政男によるメディア論が参考になる。Amartya Sen のアイデンティティ関

係の著作も示唆に富む。

### 1. 3 感情世界

それでは、個人にとってもっとも密接な感情や価値判断が生じる場である内面的な世界において言語はどのように位置づけられるのだろうか。人は感情や価値判断を自分で理解するだけでなく、ほかの人にも理解してもらうことを望む。言葉によって喜怒哀楽の感情や理非曲直の価値判断を描写して、相手に伝えることができるというのが、たしかに言語の効用であるが、それだけでは十分でない。感情や価値判断の世界を感情世界と呼ぶならば、感情世界におけるコミュニケーションはある人が経験した感情や価値判断を他の人が追体験したときに初めてなりたつ。詩や小説のような言語芸術だけでなく、日常的な会話にも見られる物語のような言語行為は感情世界における追体験を目的とするものである。つまり、言語は共感という高次の理解をもたらすコミュニケーションの手段となる。

翻訳された小説でも、我々は登場人物の境遇や経験に共感できる。これは文化を超えた普遍的な概念によって感情や価値判断の語彙が支えられているということを示唆するのではないだろうか。このような仮説のもとに感情世界における語彙の文化横断的な研究を進めている研究者もいる。真の国際的相互理解を社会的世界だけでなく感情世界でも成り立たせるために、この分野での言語研究の果たせる役割は大きい。

感情世界の言説は詩や小説に代表される文学で主に取り扱われるが、我々の日常生活の中でもテレビ・ドラマや映画、演劇を通じてさまざまな物語が我々に届けられ、それらを通じて喜怒哀楽の感情や倫理的な判断を共有することができる。友人との雑談の中でも自分が経験した興味深い出来事を相手に上手に伝えることができ、期待通りの反応があったときの満足感は何にもものにも代えがたい。このように物語には多くの種類があり、物語を通して感情世界のコミュニケーションは成り立っているといっても言い過ぎではない。物語がどのように構成されているのかを言語学的に研究するアプローチとしては、テキスト分析やジャンル分析などがある。この問題では、Martin and Rose による Genre Relations がもっとも優れた概説

書である。

以上、我々が暮らす世界と言語の関係を考えてが、次に言語の成り立ちを考えてみたい。

## 2. 言語の成り立ち

### 2. 1 テキストと言語

我々が読んだり、書いたり、聞いたり、話したりする言語、すなわち直接に触れる言語をテキストと呼ぼう。テキストを言語の現れと考えると、言語そのものは我々の頭の中にあるテキストを生み出す力のようなものということになる。言語はその生み出し手である個人抜きでは存在しえないが、特定の個人がある言語をすべて代表するというのではなく、どの個人をとっても語彙や文法などに相対的な不足や偏りがあるので、言語は共同体や社会という時間的にも空間的にも広がりがある個人の集合体が全体で代表するものと考えられる。

### 2. 2 言語の構成要素

社会における個人がなんらかの考えを人に伝えるため言表するという状況を考えてみる。伝えたい考えはその社会における文化的・社会的な文脈の中で生じたものなので、その文脈による制約を受けた意味を持っている。例えば、甘えが許容されたり、場合によっては推奨されたりする文脈の中で、信頼する個人への甘えを含むような考えはそのまま言表につながるが、甘えが許されない社会では、甘え部分を極力そぎ落とした表現に変えられるであろう。したがって、伝えたい意味は語彙・文法という資源を使って、文脈の制約を受けながら形作られると考えられる。それぞれの社会には挨拶や、感謝、謝罪、依頼などの慣習化された言語行為が数多く存在し、それらの言表には同様に慣習化された言い回しのパターンが存在する。つまり、言語の習得と同時に習得する慣習化された意味のパターンが言語の構成要素であると考えられるのである。

## 2. 2. 1 語彙と文法

言語学では研究上、語彙と文法を区別することがよく行われるが、実際には両者は緊密に一体化している。ところが、伝統的には、文法において、小さな単位から組み合わせによって大きな単位が生じるという説明をするために、単文は句からなり、句は単語からなり、単語は形態素からなりという段階別を設けることが多い。形態素は意味を持つと考えられる最も小さな単位で、英語の接頭辞や接尾辞、語幹というような抽象的な単位である。形態素から単語を形成する過程を研究する分野を形態素論と呼んでいる。単語を組み合わせ、句や節や文を作る際の規則性を研究する分野を統語論（または構文論）と呼んでいる。節や文などが持つ複雑な構造を単位からの構成という観点で分析するときは、このように文法だけを単独に取り上げることもありうるが、意味を伝達するための表現を構成するという立場から見ると、単語の組み合わせは伝達の目的に応じた複数の機能的な意味の選択というプロセスに相当するので、語彙は文法と有機的に結びついて一体化された体系をなしている。たとえば、中程度の可能性の判断を表す表現の選択肢に *possibly*, *may*, *it is possible* などがあるが、判断の主観性、客観性の区別、テーマ性、ムードなどの意味を組み合わせ、いずれかの表現を選択する。これらの意味のうち、テーマ性とムードは構文上の位置として定義されているので、単語の選択は文法の一部である。

## 2. 2. 2 音韻と具体音

意味が文の形に実現されると、言表のプロセスに回される。言語の音韻体系に従って、単語が音素の列に置き換えられ、言語音声実現の法則に従って、具体的な言語音として表現される。このようにして言表された言語音が話し言葉のテキストである。

言語の音を音素と具体的な言語音とに区別する必要性を理解することは、言語の持つ分類機能を理解することに通じる。具体例で考えると、日本語の / ん / 音は日本語の音韻体系における一つの音素であるが、これが具体音になると環境に応じて [n] (サンタ)、[m] (キンピラ)、[ŋ] (マンガ)、[ɲ] (ホン) と変化する。母音に挟まった / ん / 音は子音でなく鼻母音と

して実現される。このようにさまざまな音をすべて一つの音にまとめあげて同一の音として認識させるのが音素の持つ力である。すなわち、日本語話者は具体的な言語音でなく、それを適宜にグループ分けした音素のレベルで言語音を認識しているのである。これはどの言語でも同じで、それぞれの言語ごとにその言語の音韻体系があり、具体的な言語音は音韻体系の中の音素としてしか認知されない。言い換えれば、物理的な空気の波である言語音は音韻体系というフィルターを通して音素として認識されることで、単語を構成する音の資格をえることができる。

### 2. 3 言語フィルター

物理的世界が言語のフィルターを通して認識されるというのが、言語を通じて行われる世界認識やコミュニケーションで通常起こっていることである。この言語フィルターによる分類は、言語表現のレベルだけでなく、意味を組み立てたり、語彙・文法で文に変換する際にも絶えず起こっている。サピア・ウォーフ仮説として知られている立場は、我々の世界認識は言語によって規定されるという趣旨で、もっとも極端な立場では認識の可能性のすべてが言語に依存すると言っている。つまり、異なる言語間では認識できる現実には翻訳不可能な差が存在する可能性があることになる。このような個別言語の独自性の観点からすれば、言語研究の目的の一つは、言語フィルターの姿を解明することであるとも言える。

### 2. 4 品詞

単語を品詞と呼ばれるグループに分けることは、文法を説明するときに必要な手続きであるが、これはその目的のために人間が人工的に用意したのではなく、言語そのものに備わっている分類機能の一つの現れである。典型的な場合に限れば、名詞は事物の名前であり、形容詞は事物の性質を表す。動詞は状態や過程を表現して、名詞が表す事物との組み合わせで事態の描写の中心となる。副詞や前置詞は、時間、場所、方法、条件など付随的に事態を構成する状況要素を示す。つまり品詞は言語の持つ経験描写の機能の実現に際して、事態をどのように構成要素に分解するかという問



いに対する言語による解答である。

さらに事態の分類を行うために、過程や状態は物質過程、心的過程、関係過程、言表過程、行動過程、存在過程などに分類され、それぞれの過程や状態に参加する人間・事物もそれぞれの特徴的な役割によって、行動者、目的、認識者、現象などと分類される。言語による経験分類は適切な分析によれば、興味深い多くの、かつ意味深い規則性を反映していることが解明される。認知意味論などのアプローチはそのような興味を持つ研究である。言語の規則性の中に言語に託した存在論が反映されているという多くの人が興味を抱く言語の特性である。

## 2. 5 文法機能とムード

文を主語、動詞、目的語などの単位に分析することも、言語の果たす機能の一つに対応している。すなわち、言語による人との相互的な働きかけ、言い換えると言語行為の実現を目的とする機能である。言語行為は情報あるいは事物・サービスの提供と要求という観点から、言明、質問、申し出、命令・依頼に分類され、これらが基本となる発話行為を形成すると考えられる。発話行為を実現するための言語形式の分類として法（ムード）が存在する。平叙文、疑問文、命令文、感嘆文が単文の形によるムード分類であるが、それぞれは主語と定動詞の配置によって定義されている。平叙文は典型的には言明を実現し、疑問文は典型的には質問を実現する。発話行為は基本的な4行為の他に、社会的に認知された膨大な数の発話行為が存在するが、それらは4つのムード・タイプといくつかの付加的なムード・タイプのいずれかに対応付けられる。ここにも言語の持つ分類作用の興味深い特徴が現れている。すなわち、多数の潜在的なカテゴリーを少数の顕在的なカテゴリーで実現するという特徴である。多数の名詞クラスを単数・複数という顕在的な標識で区別するのも同様の現象である。時間と時制の関係も同様である。

以上の解説はHallidayの選択体系機能文法をもとにしているが、多くのアプローチでほぼ共通の理解をもつと言える。



### 3. 言語研究の形

#### 3. 1 構造主義

言語研究のアプローチは研究者の興味によってさまざまである。言語の持つ法則性が強く意識されたのは 19 世紀後半の史的言語学において、音の変化の法則が明らかにされて以来である。これは、同じ環境にある同じ種類の音は同じ変化を受けるという事実を実証的に確立したもので、言語の時間的な変遷における体系性という考えが浮上した。言語音の変化に見られる厳密な法則が明らかになるにつれて、言語そのものの持つ体系性へと人々の興味が移った。

古来、言語の研究は文法の記述が主眼であったため、言語が数多くの体系からなる複合体であることは早くから意識されていた。西洋ではギリシア語、ラテン語の文法記述から、東洋でもサンスクリット語の学習から、活用表が生まれ、品詞、屈折、曲用、派生などの概念と操作によって抽象的な語根から具体的な語形へと変化する過程がとらえられるようになっていた。しかし、1870 年以降に史的言語学の方法論が確立され、その最重要な命題として「音法則に例外はない」が掲げられるにいたって、研究の興味は言語の史的変化の法則性、言語そのものの体系性へと移ったのである。

言語の体系性を理論化したのは 1901 年から 1913 年までジュネーヴ大学教授であったソシュールである。没後 1916 年に彼の学生達によって発表された講義ノートによって、言語を時間的変化の観点から研究する通時的言語学と、言語を 1 つの時点に限って研究する共時的言語学を峻別するという言語研究の方法が提唱された。特に、共時的言語学は、言語を 1 つの安定した構造と見るという考えに基づき、言語は具体的な語形や表現でなく、それらの要素が構成する構造に実体性があるという革新的な見解を示した。この構造の概念は、有限の証拠から無限と思われる言語そのものを一つの全体として把握することを可能にしたため、構造主義という思想運動として、言語学を超えたさまざまな分野の人たちに支持され、推進された。構造主義は 20 世紀を通じて言語学の根幹をなす考え方であった。

全体像をつかむには、ピアジェによる「構造主義」がクセジュ文庫にあるのでそれに当たられたい。

1926年に創設されたプラハ学派では、ヤコブソンらが音韻論と形態素論で構造主義的な言語研究を実践した。他方、アメリカでは「未開言語」の文法記述をテーマとする構造主義が発達した。1933年にブルームフィールドが著した「言語」に代表されるようなデータからの帰納による文法の発見という実証的な言語研究が行われた。アメリカ構造主義では統語論の研究が発達し、構成素構造と呼ばれるグラフ表示で文の構造を分析する手法が発展した。

### 3. 2 意味研究

意味の研究は19世紀末から始まった分析哲学によるところが大きい。分析哲学は形而上学と対立する哲学研究のアプローチで、論理実証主義、日常言語学派などに代表される。特に論理実証主義はカルナップ、タルスキー、モンタギュー、クワインなどによって、論理学にもとづく厳密な意味の分析手法を生み出した。論理学の発展はモデル理論の発展に助けられて、言語の意味を外延的な対象として数学的に取り扱う意味論を生み出した。このような形式的な意味研究は、20世紀末にはゲーム理論を取り入れた言語行動の研究へと発展した。意味研究の論理化を図った論理実証主義に対して、日常言語学派のオースティンはさまざまな言語行為を分類し、言語の意味を言語が果たす対人的な機能の面から分析することを提唱した。同じく、ストローソンは論理学による形式的な意味表示の限界を指摘し、日常言語の複雑な意味は論理学では解明できないと主張した。特に、断定された意味と前提された意味の違いを指摘し、外延的なモデルではとらえきれない意味のレベルを明らかにした。オースティンの弟子のグライスでは会話において言表された命題をもとに推論によって得られる意味について研究した。日常言語学派の研究はその後、言語の使用に関する研究である語用論へとつながって行った。金水・今仁「意味と文脈」(岩波)には歴史的な記述は少ないが、意味論の概要が手際よくまとめられている。

### 3. 3 生成文法

20 世紀の後半は生成文法という言語学の新しいパラダイムが登場した。生成文法はハリスの弟子のチョムスキーが形式言語理論という数学の手法を自然言語の文の間に見られる構造的な変換関係の記述に応用したものである。生成文法は統語論の厳密かつ数学的な形式化を実現するだけでなく、音韻論や形態素論、意味論までも含む総合的な文法記述へと発展し、いくつもの競合的な理論を生み出した。チョムスキーの生成文法は言語の生得性を仮定しており、人間の認知的な能力の中で言語能力の占める位置を明らかにすることが究極的な目的とされた。これに対して、そのような哲学的な立場とは無縁に言語を数学的に記述する LFG、HPSG などの生成文法もあり、自然言語処理に携わる工学者などにも利用されている。生成文法の出発点となったチョムスキー理論では、計算機械の動作を捨象して、テープ状の記号列の変化に注目して、記号列の集合を生み出すチュー・システムを採用して、記号列を生み出すチョムスキー階層と呼ばれる句構造規則の分類を行い、規則の生成能力を特定することを可能にした。これにより、人間の言語で許される文の集合を生み出す規則の種類を特定するという研究が進んだ。生成文法の解説書はたくさんあるので、特に一つを取り上げる必要はないと思われる。

### 3. 4 認知言語学

言語を特別の生得的な言語能力と考える立場と対立する考えをもつ人たちがゲシュタルト心理学などの影響を受けて認知言語学と呼ばれる言語研究を 1980 年代から展開する。彼らは言語を人間の一般的な認知能力から帰結できるものと考えている。

フィルモアは深層格という考えで、文が描写する事態を構成する抽象的な参加者要素のレベルから表層の文に至る過程を示すことで、認知的なカテゴリーによる文法記述の可能性を示した。レイコフは比喩的な表現に含まれる基本的な意味の図式により、言語表現を支える空間的、社会的関係のパターン化された認知様式を明らかにした。

タルミーは運動に関するナイーヴ物理学的な理解の図式が比喩的にさま

ざまな事態描写に適用されて、様相のような概念にまで及んでいることを発見した。彼の研究は認知意味論と呼ばれているが、認知的な意味理解が統語上どのように実現されるかという問題に取り組むので、他の認知言語学と同様意味と統語の対応関係を射程に入れている。

認知科学はコンピュータの計算過程を人間の認知的理解のモデルとして採用し、人間の言語処理のさまざまな側面を計算処理のモデルという比喻で説明してみせる。このことにより、生成文法では射程に入らなかった言語運用が持つ言語表現上の制約を考察できるようになった。チョムスキーの生成文法も同様の目標を設定してスタートしたはずであったが、言語能力と言語運用を峻別することで、形式言語理論的な数学を重視したことで、言語全体を統一的に扱うという認知的方法を遠ざけてしまった。認知言語学ではいわゆる概念的意味以外にも新情報・旧情報のような注意の焦点や文節の句切れのような音韻上の単位認識などの現象も言語処理過程の方策という比喻で取り扱えるため、意味とエンコーディング（記号化）の問題に新しい知見をもたらしつつある。

ラネカーは認知的な構造制約を言語の実体であると主張する認知文法を提唱した。これはソシュールの記号論的一般言語学を人間の認知作用という視点からとらえ直した新構造主義と言えるかもしれない。言語獲得に関しても、認知言語学は生成文法とは対立する立場をとる。

生成文法では生得的な言語能力が年齢とともに成熟するという言語システム観をもっているが、トマセロは言語能力の獲得について一般的な認知能力から社会的な状況の中で漸進的に段階を踏んで単純な文法システムから複雑なものへと獲得が進むと説明している。

認知言語学も多数の解説書がある。定延利之「認知言語論」（大修館）は少し専門的だが、このアプローチの哲学を知るためには格好の本である。

### 3. 5 言語類型論

生成文法が登場したのと同じ頃、世界中の言語を限なく調査して対比を行い、言語の持つ普遍的な特徴を探ろうという研究が始められた。グリーンバークが始めたこの研究は言語類型論と呼ばれる。言語類型論は 19 世

紀来の歴史比較言語学（史的言語学）の一つの発展形と考えることができる。史的言語学では祖語から分かれた言語の系譜を再構するという目的のため言語間の類縁関係を立証することが主な目的であった。しかしながら、史的言語学で蓄積された言語間の異同に関する知見は類縁関係のない言語間の類似性という問題も招来した。類縁関係がなくても地域的に近接した言語間では共通の言語特徴が見られることはよくある。さらに、比較を行う際に使われるカテゴリーの抽象度によって、類縁関係も地域的な近接関係もない言語間でも、共有される特徴を見出すことができる。レーマンは動詞と目的語と修飾語という単位を用いて、文における語順の可能性を定義した。これにより語順を言語の示す普遍的特徴の一つとして取り扱うことが可能になり、語順による言語の分類ができるようになった。音韻、語構成、統語におけるさまざまなカテゴリーが比較の基準になりうる。たとえば、名詞句や動詞句などは中心となる名詞、動詞を主要部としてその周りに修飾語がならんでいるが、主要部と修飾語の位置関係も言語比較の基準として興味深い結果をもたらすことが分かっている。

言語類型論のもう一つの系譜は、言語年代学に見られるような統計的な視点である。グリーンバークは語彙の類似性という基準でアフリカの語族分類を行った。ここでは、語の対応関係を個別に検討するのではなく、類似の意味を持つ語の形に注目して、類似の語形を共有する程度によって量的な観点から言語のグループ分けを行うという方法をとった。このような方法では結論は絶対的なものでなく、ある確率で有効であると解釈される。したがって、言語類型論では言語の特徴間の含意関係という従来取り扱うすべのなかった問題にも記述の方法を提供するようになった。これは、「ある言語が性というカテゴリーを持つなら、それは必ず数のカテゴリーを持つ（言語普遍 36 番）」というように、言語カテゴリーのような特徴間に見られる相関関係という形で、言語特徴の体系性を扱うことを可能にした。確率的な含意関係の例としては、「数と格の形態素が両方とも存在して、両方とも名詞語幹に後続または先行するとき、数表現はほとんどいつも格表現と語幹の間に位置する（言語普遍 39）」

言語類型論の研究によって、言語カテゴリーのカatalog化が進み、同

一カテゴリーに属する要素間の順序などに普遍性が存在することも明らかにされた。この辺の事情はショーペン編 *Language Typology And Syntactic Description* (Cambridge) に詳しい。角田太作「世界の言語と日本語」(くろしお) も優れた概説書である。

### 3. 6 機能言語学

言語をコミュニケーションの立場から理解しようとする試みを機能言語学と呼ぶ。機能は言語が果たす伝達上の役割ということである。物語、歴史、科学的説明、機械のマニュアルなど様々な種類のテキストが存在するが、これらの種類はジャンルと呼ばれ、社会的に意味づけられた役割を持つと考えられるので、機能言語学の一つの大きな研究テーマである。語彙の意味についても、変化を表す動詞がどのような側面の変化をあらわすかという問題は意味の拡充という現象として、言語全体に共通するメカニズムという観点から研究される。これは言語の持つ論理的意味の役割で、文と文を接続詞で結びつけるときに起きる意味的な拡張と同様の現象と考えられている。このように機能言語学がとりあげる言語機能にはテキストの構成から単語の構成まで言語全体に及ぶと考えられている。

さらに、機能言語学では話し手と聞き手の位置づけが大きなテーマとなる。これは対話者と言語を取り巻く文脈として一般的にとらえることができる。発話行為を取り巻く直接的な会話状況だけでなく、社会や文化なども発話行為を制約する重要な要素として考慮される。語用論でも文脈が説明において重要な役割を果たすが、機能言語学では文脈と語彙・文法の関係を体系的にとらえようとする。したがって、文脈は文法の問題として直接的に取り扱われる。これに対して語用論では意味を超えた推論の問題として文脈が取り扱われるという事情と違いが顕著である。

機能言語学では文の持つ伝達役割をいくつかの種類に分け、世界の描写、対話相手との相互働きかけ、話し手を取り巻く文脈との結びつけという3つの側面に分けて分析する。それぞれの側面は独自の体系を持っている。これらの3種類の機能に属する様々な体系が言語表現には同時に実現されているという仮定のもとに、言語の姿を多角的にとらえようとしてい

る。以上の説明は主に Halliday 流の機能言語学に拠っているが、他の機能言語学にも共通点が多い。龍城正明ほか「ことばは生きている」(くろしお)は Halliday 文法の入門書である。

#### 4. 結語

言語学は人間生活を支える言語の研究を行う学問であるが、以上に紹介したようなアプローチ以外にもたくさんのアプローチがある。社会的な言語研究である社会言語学、人間の心の仕組みを解明しようとする心理言語学など近年実験技術、データ処理技術の進歩とともに急速に発展しつつある分野が多々存在するが、触れることができなかった。情報技術の発展と自然言語処理は切っても切れない関係にあり、最近では機械学習という強力なパラダイムのもとに情報科学としての言語学が生まれつつある。また言語治療や言語教育などもますます盛んになりつつある言語研究の分野であろう。言語の興味深いテーマを見つけて、幅広い見地からその問題を考えられるような研究者が多く育つことで、日本の言語学を盛んにして欲しい。

#### 参考文献

- Austin, J.L. (1975) *How to Do Things with Words*. Harvard Univ. Press.
- Bloomfield, L. (1984) *Language* (reprint). Univ. of Chicago.
- Chomsky, N. (1975) *Logical Structure of Linguistic Theory*. Plenum pub. Corp.
- Chomsky, N. (2006) *Language and Mind*. Cambridge Univ. Press.
- Gleason, H.A. (1961) *Introduction to Descriptive Linguistics*. Holt, Rinehart & Winston of Canada Ltd.
- グリーン、ジョージア (1990) 「プラグマティックスとは何か」産業図書
- Greenberg, J.H. (ed.) (1963) *Universals of Language*. The MIT Press.
- グライス、ポール (1998) 「論理と会話」勁草書房
- Halliday, M.A.K. and C.M.I.M. Matthiessen. (2004) *An Introduction to Functional Grammar*. Hodder Education.
- Hopcroft, J.E. and J.D. Ullman. (1979) *Introduction to Automata Theory, Languages,*



and Computation. Addison Wesley.

金水敏・今仁生美 (2000) 「意味と文脈」 岩波書店

高津春繁 (1950) 「比較言語学」 岩波全書.

黒崎政男 (2002) 「デジタルを哲学する一時代のテンポに翻弄される“私”」

PHP 研究所

レイコフ、G、M. ジョンソン (1986) 「レトリックと人生」 大修館

Langacker, R.W. (1999) Foundations of Cognitive Grammar. Vol. 1 and 2. Stanford Univ. Press.

Lyons, J. (1968) Introduction to Theoretical Linguistics. Cambridge University Press.

Martin, J.R. and D. Rose. (2008) Genre Relations. Equinox.

パウル、ヘルマン (1976) 「言語史原理」 (上・下) 講談社学術文庫

ピアジェ、ジャン (1970) 「構造主義」 (文庫クセジュ) 白水社

セルズ、ピーター (1988) 「現代の文法理論：GB 理論、GPSG、LFG 入門」 産業図書

定延利之 (2000) 「認知言語論」 大修館

ソシュール、フェルディナンド (2007) 「ソシュール一般言語学講義—コンスタンタンのノート」 東京大学出版会

Talmy, L. (2003) Toward a Cognitive Semantics. Vol. 1 and 2. The MIT Press.

龍城正明 (編) (2006) 「ことばは生きている—選択体系機能言語学序説」 くろしお出版

Thomason, R.H. (ed.) (1974) Formal Philosophy: Selected Papers of Richard Montague. Yale Univ. Press.

Tomasello, M. (1992) First Verbs. Cambridge Univ. Press.

角田太作 (1991) 「世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語」 くろしお出版

渡辺勝正 (1978) 「アルゴリズムと計算機械」 日本コンピュータ協会.



## 21世紀の音韻論

篠原茂子

近年の音韻論は複合領域化の様相を呈している。本稿では、それに至る過程と現在の状況を眺望し、今後の展望を計ってみたい。

言語科学全体の複合領域化は今世紀に入ってから始まったわけではない。’60-’70年代以降、パーソナルコンピューターの著しい発達に伴って、音声合成・音声認識などのスピーチテクノロジーは目覚ましいスピードで進化した。そこには、意識せずとも音素対立などの基本的な音韻理論が敷石として存在していたのもまた事実である。’60年代の派生言語理論の出現をきっかけに心理言語学の実験も進められた。スピーチテクノロジーの発達により、大量の音声データをスピーディーに処理することが可能となり、理論音韻論においても実験音声学による検証が行われるようになった。ラボラトリーフォノロジーという分野もこのような背景で確立した。

例えば、イントネーションパターンはピッチトラックにより数秒でヴィジュアル化することができるようになったおかげで、そのデータは統語構造、リズム構造の分析に活用されている (Cf. Beckman and Pierrehumbert 1988)。シンタックス・プロソディー インターフェイスといった分野では、このような実験的研究方法が進んでいる。さらにこのような研究は、人間の脳の中で統語 (シンタックス) を制する部分、プロソディー (リズム、メロディーなどの韻律) を制する部分、発話のコーディネーションを司る部分といった3つの異なる機能がどのように絡み合ってひとつの発話産出や知覚に関っているのか、といったよりダイナミックなモデルをつくるための重要な要素となるだろう。十分なデータに根ざしたエンピリカルな研究結果はまた理論的枠組みの不備を指摘するための強い武器にもなり得る。

もうひとつ実験音声学と音韻論のつながりを説明するための簡単な例を挙げよう。ある言語において重子音と単子音の間で対立（＝子音の長さの音韻的違い）があるか否かということが問題あったとする。この場合、発話データの中でターゲットとなる子音の相対的な長さを比較してみれば、産出の際の対立の有無を考察することができるし、またその結果を知覚実験によって確認することもできる。知覚実験の刺激音作りには音声合成の技術を適用できる。

近年この領域縦断的傾向がさらに進み、言語科学内での異なった方法が補い合いながら互いの研究分野を発展させていく、というのに付け加えて、理論音韻論内部でいくつかの複合領域的研究分野が確立する方向性も見えてきた。実験音声学や認知科学的要素を全く取り入れない理論音韻論の方がマイナーになる傾向が強いといっても過言ではないだろう。こういう情勢の中で現在顕著なものは、統計知識を取り入れた言語理論（Zuraw 2000；Boersma and Hayes 2001；Pierrehumbert 2003）、及び、発話・知覚に関する生理的制約を取り入れた音韻理論（Hume and Johnson 2001；Hayes, Kirchner and Steriade 2004）である。2つはそれぞれ言語理論のディベートの対象として近年研究が発達してきている。

まず、言語要素のパターンやアイテムの頻度統計知識を言語に取り入れる方法はStochastic/Probabilisticモデルと呼ばれているもので、その中でも認知心理学のコネクションリストモデルとアプローチを共にする見方と、より独立した言語モジュールに統計知識を反映させる見方に概ね分かれており、互いに批判を重ねながら、データ分析を蓄積している段階といえるかもしれない。

一方、音韻制約の音声的あるいは生理的由来に関する研究は'90年代のOptimality Theory（OT、最適理論）の発展に負うところが大きい。OTではこれまでの派生理論でルールの適用によって支配されていた音韻パターンが、破ることのできる普遍的な制約の優位度によって規定される方法に全

面的に取って代わったため、制約は（大部分）絶対的なものではなく、同時に、相反する制約の一言語内における存在も説明可能となった。

調音器官や聴覚システムはヒトに共通であるため、生理的制約が普遍的な音韻文法に反映されていると考えるのも合理的といえる。しかしながら、言語システムは生理機能のみによって支配されているわけではなく、より抽象的な情報処理を行う認知システムであることは明らかである。

元来抽象的なものとして取り扱われてきた音韻文法の中で、調音や知覚に由来する制約が直接的なものであるかどうか、という問いには2つの内容が含まれる。まず、音声的な制約が音韻文法の一部として取り入れられる過程は存在するのかどうか、という問い、また、音声に由来する制約の役割が共時的なものであるかどうか、すなわち、ヒトの個々の発話に直接影響を与えているかどうか、という問い。

はじめの問いに対しては、調音上必然的に起こる音声制約の結果はグラデュアルであるのに対して音韻制約はディスクリットであるという研究結果がある (Hayes 1999)。つまり、ある音韻制約が音声に由来しているとしても、一旦音韻制約になった以上はディスクリットな結果を生み出すというものである。それは、ヒトの脳には言語文法を扱うための特有の機能が存在することを示唆する。

次に、最近では音声に由来するものも含めて音韻制約はその由来するところから直接文法に関与しているのではなく、歴史変化の中でのみ影響を及ぼし、その歴史変化のパターンが音韻文法を形成しているという見方も主張され、論議を呼んでいる (Blevins 2004)。例えば、ヒトの知覚上あいまいな音のペアは聞き間違えられ、それを原因として歴史変化を起す場合がある。その際の曖昧さは、二通りに解釈可能である。ひとつめは、聞き間違いは単に話し手と聞き手の間で起こる一過性の現象にすぎず、間違えられる傾向のある音のペアの間に起こる音韻変化は結果的に音韻文法として残る、という解釈。ふたつめは、ある音のペアの間の曖昧さは話

し手の文法知識の一部として常に存在するという解釈。

ひとつめの主張の強みは歴史変化の中で必然的に起こる現象を常に音声知識として音韻文法内に持ち続けるのは二度手間であるという点である。つまり、制約なり、ルールなり、を持っていればそれで役割が果たせるものをその内容に関する知識まで一緒にもっていることは重荷である、という意見である。

ふたつめの解釈を立証するには、その音声に由来する知識が常に、またある言語に特定されることなく普遍的に話者の頭の中に存在することを示せばよい。そのためには、言語内の歴史的変化、共時的音韻変化、幼児の言語習得データに共通の現象を一度に提示すればよい。また、母国語にはでてこない音のつながりを持った外国語のインプットが話者の文法によってどう処理されているか、などインプット構造から学びとられたのではない知識を試すデータを補足することにより、その音韻知識の普遍性と共時性を示すことができる。

これらそれぞれの論点について議論はまた研究課題を生み発展を続ける。この最後に扱った論議自体に関しても、それぞれ立場は分かれています。音韻変化の音声的要因について新しい技術や知識をよりどころとした数々の音声研究に支えられていることだけは間違いなく、今後も発展が期待されている。

## References

- Beckman, Mary and Janet Pierrehumbert (1988) *Japanese tone structure*, Cambridge MA: MIT Press.
- Blevins, Juliette (2004) *Evolutionary phonology: The emergence of sound patterns*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hayes, Bruce (1999) *Phonetically-Driven Phonology: The Role of Optimality Theory*

- and Inductive Grounding. In Michael Darnell, Edith Moravcsik, Michael Noonan, Frederick Newmeyer, and Kathleen Wheatly, (eds) ., *Functionalism and Formalism in Linguistics*, Volume I: General Papers, John Benjamins, Amsterdam, 243-285.
- Hayes, Bruce, Robert Kirchner and Donca Steriade (eds.) (2004) *Phonetically-Based Phonology*, Cambridge University Press.
- Hume, Elisabeth and Keith Johnson (eds.) (2001) *The role of speech perception in phonology*, Academic Press.
- Pierrehumbert, Janet (2003) Probabilistic phonology. In Bod, R; Hay, J; Jannedy, S. (eds.) . *Probabilistic Linguistics*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Boersma, Paul and Bruce Hayes (2001) Empirical tests of the Gradual Learning Algorithm. *Linguistic Inquiry* 32, 45-86.
- Zuraw, Kie (2000) *Patterned Exceptions in Phonology*. Ph.D. dissertation, UCLA.

## Ⅱ．応用言語学

### 外国語教授法

笠島準一

外国語を学んでいる人は、次のような事項にも興味がないだろうか。

- どのように外国語を学べばよいのだろうか。
- どのように外国語を教えると効果的なのだろうか。
- 母語や第2言語はどのようにして身につけるのだろうか。
- パイリンガリズムについてはどのようなことが判明しているのだろうか。
- 言語の能力はどのようにして測定するとよいのだろうか。
- 言語を心理学や社会的な側面から研究するとどのようなことがわかるのだろうか。
- 言語のコーパスを用いるとどのようなことがわかるのだろうか。

以上のような視点は、言語を抽象的に研究するというよりは、現実的・実用的な視点から研究するものである。もし一つでも関心があれば、ぜひ応用言語学に関心を抱いていただきたい。

応用言語学は、元来は言語学と心理学が手を組んで発展した。今でも外国語教授法は主要な一分野であるため、最初に紹介することとしたい。

### これまでの外国語教授法

#### (1) 文法・翻訳法

この古い教授法はなぜ消えないのだろうか。文法書と辞書があれば外国語はわかると考えて文法を教え、例外を覚えさせ、単語を暗記させる。リーディングといえば外国語から母語への翻訳、ライティングといえば母語か

ら外国語に直すのが一般的である。発音や会話の指導は軽視される。この教授法で教える人の言い分では、外国語教育とは教養を高め、知的訓練を施すものなのである。決してすべて間違っているわけではないのだが、問題は、文法と翻訳で事足れり、とすることにある。

## (2) オーディオ・リンガル法

文法・翻訳法でいくら学んでも、生の外国語を聞いて理解することは難しく、また会話ができないのはふつうである。そこで、読み書きを後回しにして、先に聴く話すを指導する動きが出てきた。よく考えると、幼児も聞く・話すことから始めるし、言語の起源を考えても、最初に話し言葉、次に書き言葉が誕生したのだから、この順序で外国語を学ぶことはごく自然なことから考えられた。これが1950-60年代から始まり、一世を風靡したオーディオ・リンガル法である。

自由に外国語を使えない理由は、文法や母語を考えるからだと考え、「習慣的に、無意識に」言語を使うことが強調された。従って文法を重視せず、母語の使用も避けた時代だった。

まず外国語を真似して暗記し (mimicry and memorization, mim-mem)、そして文型練習 (pattern practice) を行う。このミムメモとパターンプラクティスがオーディオ・リンガル法の特徴的なテクニックである。

次のような文型練習を盛んに行なったのはこの期の特徴である。

I	told	him to come.
	asked	
	promised	

このような練習を何度も繰り返せば自然にこの文型を使えるようになると考えられた。このような文型を、文法を意識しないで、母語での意味を考えないで操るようになることが目的である。ネイティブスピーカーはここで文法のことを考えることは決してしない。だから外国語学習者も文法を考えることは避けるべきだとされたわけである。

### (3) コグニティブ・アプローチ

ところが、外国語とは単なる暗記や表面的な文型練習では身につけることができない、との主張が1970年代に強くなった。変形文法理論の影響を受けて、言語は暗記した文や限られた文型で成り立っているのではなく、無限の新しい文を理解したり話したりすることのできる創造性を有していることが強調されたのだった。この創造性とは文法規則を操ることから生じるものであると考え、一昔前のような文法指導を中心とする教授法、コグニティブ・アプローチが誕生した。

文型練習は表層的でしか過ぎない、との非難は激しかった。例えば、次の文で、下線部のto comeの主語はだれかを考えてみよう。

I told him to come.

I promised him to come.

最初の文では、来るのは主語の「彼」であり、2つ目の文では目的語の「私」である。このように、単に「動詞＋目的格＋to不定詞」の文型を表層的に学んでも外国語は使えないのである。文法の仕組みや意味を考える必要があることが再認識されたのである。更には、言語には共通性、普遍性があるので、その共通性は避ける必要はなくなり、オーディオ・リンガル法の時代とは異なり、母語を使って外国語の授業を行なうことは問題ではなくなったのである。

それでは昔の文法・翻訳法への後退ではないのか。

実は外国語教授法の変遷は「振り子現象」と呼ばれる。右に振れたと思えば左に戻る。文法は教えるなど右に振れ出したと思えば、文法を教えよ、と左に戻る。ただし、全く以前の状態に戻らないのが実際の振り子とは異なる点だ。左に振り戻ったこのコグニティブ・アプローチでは音声面が重視されている。これが昔への後退ではないことを示す特色なのである。

### 現在の教授法

現在の外国語教授法はコミュニケーション・ランゲージ・ティーチング (Communicative Language Teaching) を追求している。その主な特徴を垣間



見よう。

### (1) 文法指導は一部に過ぎない

コグニティブ・アプローチの時代は去り、現在、振り子はまた右方向に動いている。文法の役割は弱められ、身につけるべき外国語能力の一部にしか過ぎないと考えられている。

また、コグニティブ・アプローチの時代には言語の共通性・普遍性が追求されたが、今では各言語の使用場面における違いが注目されている。例えば文法的な表現であっても、フォーマルな状況、インフォーマルな状況で使い分けなければいけない。また、各言語が属する文化によって、例えば詫げる時にはどのような言い回しをするのかなどが注目されている。

一例として日本の英語の授業で起こりうる風景を考えてみよう。クラス全体で教科書を声を出して読み終えたところだとする。内容確認のために、英語でのQuestions and Answersをする運びとなった。そこで次のやり取りである。

Teacher: May I ask you some questions?

Class: Yes, you may.

文法的には問題はない。でも何かおかしい。

May I ...? はフォーマルな表現で、いねば目下の人が目上の人に向かって言うのなら普通だが、今は先生が生徒に向かってこんなに丁寧な尋ね方をしている。答える方も答える方で、Yes, you may. は許可を与える表現で、なぜ生徒が先生にこのように言う権限があるのだろうか。このような言語の使い方に関する能力は社会言語能力 (sociolinguistic competence) と称される。文法通りの文を指導するだけではなく、このような面の指導も欠かせない。

### (2) 言語の使用場面や言語の働き (function) を明確にする

まず最初に、従来型の練習問題に答えてみよう。

例にならって正しい文を書きなさい。

例 The teacher/to want/the students/to look at/his/books

The teacher wants the students to look at their books.

1. I/to prefer/my/friend/to choose/film/tonight

2. We/to want/tests/to be/easier

3. You/to insist/your/friend/to come/restaurant, etc. . . .

このように、各々バラバラで脈絡のない単文単位の練習は頻繁に行なわれるので、抵抗はないかもしれないが、次の練習問題と比べるとどう感じるだろうか。

アパート探し Jean-PhilippeとルームメートのPaulは大学の近くに新しいアパートを探しています。例にならって、会話をしなさい。

例 Jean-Philippe: I/to want/the apartment/to be/near/university

I want the apartment to be near the university.

Jean-Philippe: I/to prefer/the apartment/to have/a lot/natural light

Paul: And/we/to want/rooms/to be/sufficiently/large

Jean-Philippe: You/to be going to/insist/they/to repaint/walls? etc....

(*Teaching Language in Context, 3rd Edition*. Alice Omaggio Hadley.  
Heinle & Heinle, 2001, pp. 141-142より一部変更)

この2つの練習問題は同じ文法事項を練習している。しかしその練習内容を比べると、後者の方が外国語の使われる場面も、その働きも明確であることがわかるだろう。文法の練習でさえ、このようにコミュニケーション志向にすることが可能なのである。どのような場面でどのような目的でことばが使われるかを明確にして外国語指導を目指すのが現在である。

### (3) 本物志向である

従来、特に日本の中学校や高等学校では、いかにも教科書的な内容と表現に満ちたテキストを用いて英語を教えることが多かった。でも今ではコミュニケーション・ランゲージ・ティーチングを目指して本物に近い教材が導入されている。例えば中学校用英語教科書New Horizonの1年生用ではBe動詞と一般動詞の基本を学んだ時点で英語のコマーシャルを聞かせている。従来はこの段階での語彙と文法では、せいぜい自分の好きなものと言う自己紹介程度だった。CMを聞かせることは考えられなかった。でも工夫をすれば生の英語を導入できるのである。学年が進むと映画のヒットチャート、英語で社会科の授業、グリーティングカードなど、具体的な場面で明確な目的をもつ英語を、本物志向の英語として提示してある。オーセンティック (authentic) な教材が求められているのである。

コミュニケーション・ランゲージ・ティーチングの特徴はその他にもTask、Fluency、Interaction、Discourse、Personalなどのキーワードで説明されるのだが、まだ確立されたものではない。この教授法を理解するためには、単に外国語教授法の種類や歴史を知るだけでは不十分である。外国語教授法の背景にある理論について基本的な知識を持っていることが必要である。関心のある読者には村野井仁著『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』（大修館書店・2006年）をお勧めする。参考までに目次を示しておく。

- 第1章 第二言語学習のプロセスと内容中心第二言語学習法・指導法
- 第2章 インプット重視の第二言語学習法・指導法
- 第3章 インタラクション重視の第二言語学習法・指導法
- 第4章 アウトプット重視の第二言語学習法・指導法
- 第5章 フォーカス・オン・フォームによる文法の習得
- 第6章 第二言語学習と個人差
- 第7章 社会文化要因と第二言語学習
- 第8章 第二言語学習の目的

## 第9章 第二言語コミュニケーション能力

### 終章 教室SLA研究と英語学習・英語教育

だれもが知りたい疑問—外国語はどのようにして学んだり教えたりすると効果的なのだろうか？

この疑問には多くの人が理論的に、経験的に取り組んでいる。読者の中にもこの問題に応用言語学の視点から、一緒に取り組んでみたいと思う人が出ることを願っている。

## 第二言語習得研究 (Second Language Acquisition)

和泉伸一

### 第二言語習得研究とは？

第二言語習得研究 (Second Language Acquisition) は近年大きな広がりとし深みを増してきている応用言語学の一分野であり、一般的にSLAとして知られている。SLAでは第二言語、つまり母国語を習得した後に獲得する二番目の言語が、いかに習得されていくのかを主な研究課題としている。多くの日本人にとってみれば、それは外国語としての英語の習得であり、大学で学ぶ第二外国語のフランス語、スペイン語、中国語などの習得にも当てはまる。

SLAは学際的な研究分野であり、言語学だけでなく、社会学、心理学、教育学、社会言語学、心理言語学、英語教授法といった多くの学問分野からその知識や研究手法などを取り入れて発展してきている。したがって、取り組まれている研究課題も多様なものである。代表的な研究課題としては、次のような事柄があげられる。

- ・ 第二言語習得はどのように起こっているのか？ そのメカニズムはどうなっているのか？
- ・ 第二言語習得では母語話者のように外国語をマスターすることが可能なのか？
- ・ 第二言語習得と母語習得の違いは何か？ 類似点は何か？
- ・ 第二言語習得の成功の秘訣は何か？
- ・ 第二言語習得の成功の度合いは、学習開始年齢、動機づけ、インプットやアウトプットの量や質などと、どのように関係しているのか？
- ・ なぜ外国語を得意とする人がいる反面、苦手とする人がいるのか？ それらの個人差は何が原因なのか？
- ・ 外国語教育ではどのような教授法が有効であるのか？

## 「意見」 vs. 「証拠」

外国語学習というと、専門家でなくても何らかの意見や考えを持っていることが多い。しかしSLA研究では、限られた外国語学習の経験に基づいた個人的な独自の意見を述べるのではなく、実際に多くの学習者から関連するデータを集めてそれを科学的に分析した上で、客観的な事実に基づいて仮説や理論を構築していく。例えば、語彙力を伸ばす上で日英対称の単語帳を使って出来るだけ多くの英単語を身につけるべきだ、という意見があるとする。それが本当に効果的であるのか。客観的証拠があるのか。それともそれは教えている先生または学生個人の経験や信念に基づく単なる意見／持論なのか。この問題を検証するために、SLAでは一つの方法として実験研究などを行い、特定の方法で一定期間学習した実験グループと、そうしなかった別の似通った統制グループを数週間から数ヶ月にわたって追跡調査し、その学習効果を調べていくといった手法をとる。つまり、SLA研究では、個人的見解に基づく意見よりも客観的データに裏付けられた証拠を重んじるのである。そうすることによって、科学的検証を可能にし、第二言語習得で何が重要であり、何が重要でないのかを見極めていくとするのである。

SLA研究を紹介するにあたり、以下に多くの人たちが一般的に信じているとされる「意見」をいくつか示し、それらがSLA研究で実際に支持されているのか、またSLA研究ではどのようにそれらの問題を扱っているのかについて簡単に紹介したい。

## 「外国語学習で重要なのはやはり模倣である ?!」

子供は大人の言うことをまねることから言語習得を始める。同様に第二言語習得においてもネイティブの話すことを出来るだけ正確に何度もまねて言うことが言語習得の近道である。これは本当であろうか。確かに母語習得で子供が大人の言うことをまねることを目にすることはある。しかし、実際多くの親子の会話データを収集して調べてみると、子供によって随分

違いがあることがわかる。ある子はよく模倣をするが、別の子はほとんど模倣をしなかったりするのである。しかしおもしろいことに、これら全ての子供は皆ネイティブ・スピーカーとして何の遜色もない言語能力を身につけていくのである。また、子供に模倣の実験をしてみるとわかることであるが、ある程度長いセンテンスを与えると、子供はそれを正確に模倣できないばかりではなく、自らの現在持っている言語知識を使って自分なりのセンテンスを作り上げて答えるのである。他にも、子供の発話には、I goed to mom. や Is the daddy is tired?、Daddy no comb hair. などの大人が決して与えないような文が出現する。これらの事実が示すことは、たとえば子供が模倣を活用したとしても、それはほんの初期段階の話であって、しかもそれには個人差がかなりあり、そしていずれの場合も、子供はすぐに単なる模倣を飛び越えて、自分の文法を積極的に構築しているということである。

それでは、第二言語習得の場合はどうであろうか。例えばテープなどを聞きそれに続けて何度も言う練習を繰り返している人は、そうでない人と比べて第二言語の能力がより高いものとなるのであろうか。残念ながら、ことはそんなに簡単ではないようである。つまり、模倣をしたからといって自動的に言語能力が上がるというわけでもないし、模倣をしないから言語能力が伸びないというわけでもない。模倣の如何に関わらず、多くの英語を聞いたり読んだりしている人は、そこからかなりの英語能力を身につけている可能性が高い。また模倣をするにしても、ただ漠然と機械的に繰り返しているだけなのか、それとも意味や発音、イントネーション、文構造などに着目しながら繰り返しの練習をしているのか、やり方の違いによって学習効果もかなり違ってくる可能性が高い。前者の方法だと多少は英語の音に慣れたとしても、それ以上の効果はあまり期待できないであろう。後者の場合は、何に注意を向けるかによって獲得できる能力に違いが出てくる。例えば、文法に注目してどのような文構造でどういう意味を表しているのかといったことに注意しながら練習をすれば、後にそれがより実践活用できるような言語能力に発展する可能性が高いであろう。

第二言語習得においても、母語習得と同様に、模倣は初期段階ではある

程度の有用性はあるが、学習者は最終的には模倣を超え、自らの創造的な言語能力を構築していく必要があるのである。

### 「外国語学習で一番重要なのはモチベーションである ?!」

確かにモチベーションは何事を学習する際にも、とても重要な要因となることは間違いない。特に外国語学習のように多くの時間をかけて取り組まなければならないことでは、それを持続させるだけのモチベーションは欠かすことができない。しかし、モチベーションがあれば本当に外国語学習は成功するのであろうか。成功するとすれば、どの程度までの能力を獲得することが出来るのであろうか。

母語習得ではモチベーションの必要性はほとんど問題にはならない。それは子供の言語習得では、やる気に関わらずネイティブレベルまで全く問題なく達成することができるからである。第二言語習得の場合はどうであろうか。それは、学習者がどのような学習環境で第二言語の習得をしているのかによって話が少し違ってくる。例えば、親の都合で否応無しに英語圏に長期にわたって居住しなければならないような場合は、学習者は長い時間をかけて大量の英語に触れることになる。そうした場合、モチベーションの有無に関わらず、時間の経過と共に学習者の英語習得はかなり進んでいくこととなるであろう。

とは言っても、個人のモチベーションの強さやモチベーションのタイプなどによって、習得スピードや習得される言語能力の強みや弱みが違ってくとも考えられる。例えば、ネイティブの同級生たちと仲良くなりたいたいといった「統合的動機づけ」(integrative motivation) を持つ学習者は、ネイティブの同級生たちがよく使うスラングなどの言葉をよりはやく身につけていくであろう。他方、テストでいい点を取りたいといった「道具的動機づけ」(instrumental motivation) をより強く持つ学習者なら、授業や教科書に出てくるような単語や表現をよりはやく身につけていくであろう。ただ、どちらのタイプのモチベーションを持ったとしても、多くの研究報告で明らかにされてきているのは、学習開始年齢がかなりはやくなければ、



発音にしても文法能力にしても、ネイティブと全く同じ言語能力を身につけるということは非常に難しいということである。つまり、第二言語習得はモチベーションがあれば完璧にマスターできるとか、外国に長期間住めばネイティブのようになる、というような簡単な問題ではないことがわかってきている。

日本で外国語学習をするような場合はどうであろうか。上記のような第二言語環境と比べて、モチベーションの有無はより大きな影響力を持つであろう。それは外国語学習に対してのやる気の有無によって、日常触れる外国語の量が大きく違ってくるからである。モチベーションの高い学習者は授業以外でも積極的に英語に触れる機会を持つであろうし、やる気があまりない学習者は授業中でもそれほど真剣に英語に触れる努力をしないかもしれない。また、モチベーションが「英語がうまくなりたい」といった漠然としたものであって、それが具体的な学習行動につながっていない場合や、突発的なモチベーションで持続しないような場合は、やはり言語習得にはつながっていかないのである。

母語習得でも第二言語習得でも今までの研究で明らかになってきていることは、インプットの重要性である。より多くのインプットが意味あるコンテキストの中で学習者に何とか理解できる形で与えられていることが不可欠である。インプットがあれば言語学習は起こりうるし、なければ起きない。良質のインプットが多ければそれだけ学習の可能性は高まるし、インプットが少なければ言語習得はそれだけ限られたものにならざるをえない。また、モチベーションのタイプによって触れるインプットもかなり違ったものになる可能性がある。例えば、より統合的動機づけを持った学習者は学校で習う英語に加えて英会話や映画などを通して口語的な英語をより多く身につけていく可能性が高いが、受験対策のための英語能力の獲得を目指すといった道具的動機づけを持つ学習者は、そのようなテスト対策に特化したような英語能力を身につけていくであろう。そのような知識が容易に英会話や英語のプレゼンテーションやディスカッション能力につながっていくことは考えにくいし、同様に学問的な英語のインプットに触れていなければ英会話は自由にできてもフォーマルな形の英語を身につける

ことは難しい。必要とされるインプットに持続的に触れていく努力が大事になってくるのである。

モチベーションの研究は多岐にわたり、簡単にまとめることは難しいが、言語習得はモチベーションがあれば必ず成功するといった簡単な問題ではなく、モチベーションのタイプや、学習環境、インプットの量と質、また学習者の特性や学習方法などによって結果は随分違ってくるのである。

「第二言語習得にあたっては、まず文法を理解することが必要だ?」

これは特に思春期を過ぎてから外国語学習を始めた学習者の多くが持つ意見である。大人の学習者は認知的な能力が子供と比べて発達しているので、言語学習に対してとかく分析的なアプローチで文法などの構造を理解することを好む傾向がある。これに対して、子供の学習者は認知的な能力がまだそれほど発達していないので、特に構造的な理解に対してそれほどこだわりがない。では、文法を理解することは言語習得においてそんなに重要なのであろうか。確かに多くの場合文法を理解していることは、より高い文法能力を身につける上でプラスになることはある。しかし、必ずしも理解を伴っていかなくてもかなり高いレベルの実用的な文法能力を身につけることは可能である。

日本の伝統的な英語教育では、文法の分析と説明にかなりの時間を割く。しかし、言語習得で本当に重要なことは、詳しい文構造の理解というよりも、どのような文形式が何を意味しているのか、また自分が言う英語とネイティブが言う英語の違いは何か、ということに気付くことであるというのが多くの研究者の見解である。つまり、文構造の理解は出来ていなくても、「形式と意味のつながり」(form-meaning connection)と「違いの存在に気付くこと」(noticing the gap)ができれば、それが言語習得につながっていく。文法は、実は様々な英文に触れていった時に後々にパターンとしてわかったり、様々な文形態に触れる中で比較対照して理解を深めていくということがよくある。最初から一つ一つの文法項目に関して着実に段階を追って理解を深めていくというのは、教える側からすると一見整然として

いるように思えるが、既存知識が不足している学習者にとっては実は非常に困難なことである。とすると、学習者は理解したいという欲求に必要以上に振り回されてしまう危険性もあるし、教師は理解させれば言語習得が自動的に起こると勘違いをしてしまう可能性もある。

第二言語習得で重要なことの一つに、「曖昧さの許容」(tolerance of ambiguity) という概念がある。これは言語というものは、必ずしも全て論理的に説明しうるものではなく、特に学習段階では曖昧な要素に数多く出会うため、それを許容しつつより多くのインプットに触れていくことが重要であることを示唆している。そのため、例え文法がその時によく理解できなかったとしても、それで気を病んだり、つまずいて言語学習を止める必要は全くない。また、学習者が文法を理解した際に気をつけなければならないのは、それを自己満足で終わらせないことである。重要なのは、多くの意味あるインプットに触れていくことであり、とりあえず覚えた英語を意味あるコンテキストの中で使ってみるということである。文法理解は、それを側面から支えていくというのがその本来の役割であるべきである。また、言語能力が上達するにしたがって、文法理解を通して覚えられた知識の多くは、やがて忘れ去られ、その代わりに実践的な自動化された能力だけが日常使われることになるということも認識するべきである。

以上、ごく短い形で一般の「意見」に対するSLA研究からの観点や示唆を述べてきた。SLAでは、様々な観点から第二言語習得という現象を研究していくことがわかってもらえたら幸いである。最後に、SLAを学習する理由について少し述べておきたい。

### 自分探検としての SLA / 教育への示唆を与える SLA

SLAを学ぶ理由は色々と考えられるが、多くの人にとって始まりは素朴な疑問ではないであろうか。例えば、人はどのように第二言語を習得していくのか。どうしたら外国語が上達するのか。海外経験の長い人にとっては、自分はどうやって母国語と同時に第二言語を習得してきたのか。また、

今までの自分の英語学習は正しかったのか。これからどのように努力をしていったらいいのであろうか。このような疑問を持つ人にとっては、SLAは言語習得から見た「自分探検」の一つとして、非常に有益な学問分野となるであろう。

また、英語教師を目指している者にとって、SLAは必須の学問である。欧米ではSLAが多くのTESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages: 英語教授法) プログラムの中で必修のクラスとなっているが、21世紀に入り日本でもようやくその認知度が高まりつつある。別の分野からの例を借りれば、医者にとって患者に適切な治療を行う上で、人体がどのように機能・成長・維持しているのかを知ることが不可欠であろう。また、環境問題を解決するにあたり、人間のその場の思いつきや思い込みだけを頼りにしては、環境破壊が進んでしまうことになりかねない。環境問題に真剣に取り組むならば、生物の生態から地球の営みのメカニズムなどについてしっかりと理解しなければならないであろう。同様のことが英語教師にとっても言える。英語教師にとって第二言語習得の過程について知ることは、より効果的な授業を展開する上で欠かすことができない。英語教師は授業を教えていて思ったように生徒の学習が進まないと、自身喪失・自己嫌悪に陥ることもめずらしくない。逆に生徒の注意力散漫、または学習意欲の弱さについて嘆くことも稀ではない。しかしSLAを勉強してみると、第二言語習得は時間のかかる過程であり、様々な環境的要因と学習者に内在する要因が複雑に絡み合っているものであることがよくわかる。決して短絡的に教師や生徒の責任として片付けられないし、単なる教え込みや練習一辺倒の考えを振り回すだけではダメなことがわかる。よりよい英語教育には、SLAの基礎知識が欠かせないのである。

## SLA関係の推薦図書

- Doughty, C., & Long, M. (Eds.) (2003). *The handbook of second language acquisition*. MA: Blackwell.
- Doughty, C., & Williams, J. (Eds.) (1998). *Focus on form in classroom second language acquisition*. New York: Cambridge University Press.
- Ellis, R. (1997). *SLA research and language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Ellis, R. (1999). *Second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Gass, S., & Selinker, L. (2001). *Second language acquisition: An introductory course*. 2<sup>nd</sup> edition. New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Larsen Freeman, D., & Long, M. (1991). *An introduction to second language acquisition research*. New York: Longman.
- Larsen-Freeman, D. (2003). *Teaching language: From grammar to grammaring*. Boston: Thomson & Heinle.
- Lightbown, P., & Spada, N. (2006). *How languages are learned*. 3<sup>rd</sup> edition. Oxford: Oxford University Press.
- Richards, J., & Rodgers, T. (2001). *Approaches and methods in language teaching: A description and analysis*. 2<sup>nd</sup> edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Robinson, P. (Ed.) (2001). *Cognition and second language instruction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Skehan, P. (1989). *Individual differences in second language learning*. London: Edward Arnold.
- Skehan, P. (1998). *A cognitive approach to language learning*. Oxford: Oxford University Press.
- VanPatten, B. (Ed.) (2004). *Processing instruction: Theory, research, and commentary*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Willis, J., & Willis, D. (Eds.) (1996). *Challenge and change in language teaching*. Oxford: Heinemann ELT.
- 和泉伸一 (2009) 「『フォーカス・オン・フォーム』」を取り入れた新しい

英語教育」大修館

白畑、若林、須田 (2002) 「英語習得の「常識」「非常識」: 第2言語習得研究からの検証」大修館

村野井 仁 (2006) 「第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法」大修館

羽藤由美 (2006) 「英語を学ぶ人・教える人のために: 『話せる』のメカニズム」世界思想社

### SLA関係の主な専門誌

*Annual Review of Applied Linguistics*

*Applied Language Learning*

*Applied Linguistics*

*Applied Psycholinguistics*

*Canadian Modern Language Review*

*ELT Journal*

*Foreign Language Annals*

*International Review of Applied Linguistics (IRAL)*

*JACET Bulletin*

*JALT Journal*

*Language Learning*

*Language Teachers*

*Language Teaching Research*

*Modern Language Journal*

*Studies in Second Language Acquisition*

*System*

*TESOL Quarterly*

## Bilingualism and Bilingual Education

Mitsuyo Sakamoto

### Who are Bilinguals?

“Bilinguals” are those who are able to speak two languages perfectly - I wonder if this is the definition you use when identifying bilinguals. Indeed, stereotypical “bilinguals” featured in the media are often portrayed as persons who can *speak* English and Japanese *equally* fluently. However, if that were true, then what do we call those who can speak the language but cannot read or write? Worse yet, what if the person only knows a mere two or three words in a foreign language? Does this disqualify him/her as being “bilingual”? Bilingualism is a complex, multifaceted phenomenon, making its study that much more fascinating.

### Types of Bilingualism

In the field of applied linguistics, there is a term that refers to someone who is competent in all four language skills (i.e., reading, writing, speaking, listening) in two languages: balanced bilinguals (Skutnabb-Kangas, 1981). However, according to some scholars, achieving two identical abilities in two languages is a myth (e.g., Grosjean, 1989, 2008), as language learning is largely context-dependent. That is, languages are learned not in a vacuum but rather within particular contexts. This in turn implies that particular contexts shape particular language development. In fact, it has been reported that the two sets of vocabulary knowledge of bilingual children are not

identical in the two languages (e.g., Pearson, Fernández & Oller, 1995). These discrepancies give rise to phenomenon such as code-switching in which bilinguals change from one language to another in an utterance.

In the past, this idiosyncratic, eclectic use of vocabulary in two languages has been misdiagnosed as cognitive deficit (See Cummins, 1984), stigmatizing bilingualism. Indeed, there are those whose language proficiency in one of the two languages does not reach the monolingual-norm, and they are classified as semi-linguals. The cause of semi-lingualism is often falsely attributed to the first language (henceforth L1) interference on the second language (L2), or L2 takeover of L1. In the worst case, a child may end up with double semi-lingualism in which both languages are under-developed. This in turn implies that bilingual linguistic development is not always auspicious.

### Recent Findings about Bilinguals

In order to better understand the mechanism behind the bilingual brain, applied psycholinguists have been conducting various research pertaining to the language learning of bilinguals. Overall the findings show how bilinguals, while they are often compared to monolinguals, are in fact unique individuals with multi-competence (e.g., Cook, 1991) who happen to have the knowledge of more than one language in the same mind (Cook, 2002, p. 10).

Furthermore, the linguistic interdependence hypothesis (Cummins, 2001) suggests that, while L1 and L2 may appear to have very different surface features, L1 and L2 academic language competencies in fact share a common underlying proficiency. This implies how the nurturing of L1 academic proficiency has the ability to



enhance L2 proficiency and vice versa.

In this way, L1 knowledge is increasingly perceived positively in terms of L2 development. L1 is appreciated more as a valuable resource in developing L2 rather than a hindrance to L2 learning (e.g., Swain & Lapkin, 2000).

### Why Not Promote Bilingualism for All?

Given the above, one might question why bilingualism and bilingual education are not necessarily actively sought. If L1 and L2 enjoy mutual benefits, then why not learn L1 and L2 at the same time?

Bilingualism and bilingual education are often blamed for such things as semi-lingual development and weakness in L2. For example, there exists a strong belief in the time-on-task hypothesis, attributing successful language learning to the amount of time spent learning that language. However, the hypothesis has been refuted by a number of research findings, claiming no correlation between the amount of time spent learning the language and the actual language development (See Cummins, 2001 for further discussion). For example, language acquisition successes reported from numerous Canadian French immersion programs (e.g., Swain, 2000) reflect how the reduction of instruction time in English has no bearing on English language development.

### Bilingualism as a Social Entity

Personally, I envision language acquisition as a socially-

oriented phenomenon. That is, a particular social makeup gives rise to a particular language acquisition pattern. Therefore, I believe language learning can be, to a certain extent, socially engineered via the establishment of particular social milieus and the use of certain mediating tools (Sakamoto, 2001; 2006). This is in line with Joshua Fishman's claim that language shift can be reversed and languages can be revitalized (Fishman, 2001).

In order to discover how and when which language learning strategies work, I turned to the life history research method (Cole & Knowles, 2001). That is, I collected the narratives of Japanese immigrant parents who raised successful bilingual children and explored the meaningful ties between their stories and their social context. You might ask how reliable a mere story could be, as stories do not necessarily reflect the "truth". My question to the reader would be, how might one define "truth"? Our instinct to make the best decision, our rationale to make certain life choices, our ability to interpret things in certain ways all stem from not necessarily the objective "truth" but instead our subjective "beliefs" (Wertsch, 2002). For this reason, our beliefs are important resources for the actions we take. Beliefs in turn are constellated by our past experiences, which are formed from unique combinations of contexts and artifacts.

By collecting narratives and framing them within a particular social context, one will begin to learn how a particular social setup gives rise to particular actions. While life history research cannot provide generic claims that apply across different contexts, it can offer a rich, insightful, descriptive account of what worked and what did not work in a given context.

Qualitative research methods such as those described above are still stigmatized in Japan as 'unscientific'. However, language acquisition, including bilingualism, is a multi-faceted phenomenon that requires various explorations and interpretations in discovering its underlying mechanism. Having read my brief descriptive interpretation of bilingualism and bilingual education, I hope you would consider joining this collaborative endeavour of unveiling the mysteries in bilingualism.

#### References:

- Cole, A. L. & Knowles, J. G. (2001). *Lives in context: The art of life history research*. Walnut Creek, CA: Alta Mira Press.
- Cook, V.J. (1991). The poverty-of-the-stimulus argument and multi-competence, *Second Language Research*, 7, 2, 103-117.
- Cook, V.J. (2002). Background to the L2 user. In V.J. Cook (ed.), *Portraits of the L2 User*, Clevedon, UK: Multilingual Matters (2002), 1-28.
- Cummins, J. (1984). *Bilingualism and special education: Issues in assessment and pedagogy*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Cummins, J. (2001). *Negotiating identities: Education for empowerment in a diverse society*. 2nd Edition. Los Angeles, CA: California Association for Bilingual Education.
- Fishman, J. A. (2001). Why is it so hard to save a threatened language? In J. A. Fishman (ed.), *Can threatened languages be saved?* (pp. 1-22). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Grosjean, F. (1989). Neurolinguists, beware! The bilingual is not two monolinguals in one person. *Brain and Language*, 36, 3-15.
- Grosjean, F. (2008). *Studying bilinguals*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Pearson, B., Frenández, S., & Oller, D. K. (1995). Lexical development in

- bilingual infants and toddlers: Comparison to monolingual norms. In B. Harley (ed.), *Lexical issues in language learning* (pp. 31-57). Ann Arbor, MI: Research Club in Language Learning.
- Sakamoto, M. (2001). Exploring societal support for language learning and L1 maintenance: A socio-cultural perspective. *Australian Review of Applied Linguistics*, Vol. 24, No. 2: 43-60.
- Sakamoto, M. (2006). Balancing L1 maintenance and L2 learning: Experiential narratives of Japanese immigrant families in Canada. In K. Kondo-Brown (ed.), *Heritage language development: Focus on East Asian immigrants* (pp. 33-56). Amsterdam, The Netherlands: John Benjamin Blackwell.
- Skutnabb-Kangas, T. (1981). *Bilingualism or not: The education of minorities*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Swain, M. (2000). French immersion research in Canada: Recent contributions to SLA and applied linguistics. *Annual Review of Applied Linguistics*, 20, 199–212.
- Swain, M. & Lapkin, S. (2000). Task-based second language learning: The uses of first language use. *Language Teaching Research*, 4, 253-276.
- Wertsch, J. V. (2002). *Voices of collective remembering*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.

# CALL: Using Digital Technology to Learn English

Francis Britto

## 1. Introduction

Are you still learning English the old way—using printed or handwritten materials, cassette recorders, and rote memory? If you are, it's time to start using modern digital technology! Perhaps you are using technology even now for playing video games, for chatting with friends, for listening to music, and for watching movies—but not for learning English! If only you take just one step further, you can use the same technology for learning English. Learning English with technology is not only fashionable, but also much more pleasant and efficient.

How can technology help you learn English? That is the question that CALL can answer for you. What is CALL? CALL is simply a catch-all term for most of the activities connected with using digital technology for learning, teaching, or using languages. Literally, CALL is an acronym for Computer Assisted Language Learning; but these days, the term is used very broadly since there is no precise term to refer to all the activities related to the learning, teaching, and using of languages with the aid of digital technology. There are numerous terms like CAI (Computer Assisted Instruction), CAL (Computer Assisted Learning, Computer Assisted Listening), CAT (Computer Assisted Teaching), CELL (Computer Enhanced Language Learning), CAW (Computer Assisted Writing), TELL (Technology Enhanced Language Learning), TALL (Technology Assisted Language Learning), WALL (Web Assisted Language Learning), WELL (Web Enhanced

Language Learning), and so on. The list goes on and on depending on what the focus of the activity is. Since all these acronyms can be quite confusing, we generally use CALL as if it is a new word with a meaning like 'language learning and teaching with digital technology.' CALL, therefore, may refer not only to "learning a language," but also to "teaching a language" and any related activity; and the device or the means used may be not only a "computer," but also the Internet; any Internet-based service like email, podcast, RSS feed, blog, and video conference; any hand-held device like a mobile phone, a PDA (Personal Digital Assistant), or any digital recording and playback device such as a DVD/CD recorder or MP3 player. As you can see, CALL is a very broad and exciting field, especially if you like computers, the Internet, or any digital device.

## 2. CALL Facilities at Sophia

Whether you plan to study CALL in depth or not, it is important for you to know the CALL-related facilities that are available at Sophia University.

- (1) **Email:** As a student of Sophia University, you can get an email address with the domain "sophia.ac.jp" so that you can use it for any academic or formal purposes as well as for casual correspondence (cf. *Sophia Media Center*, 2007). Some students prefer a non-Sophia email address they have been using, but while you are a student of Sophia, it will be much better and more convenient to use the Sophia address. If you prefer, you can keep both your Sophia email address and your other email addresses, using the Sophia address mainly for academic purposes. Some teachers demand that you use the Sophia address for class-related

purposes—mainly to protect themselves from spam and to make sure that the sender is a genuine Sophia University student. The Sophia email can be accessed from any part of the world via Active Mail, the *Sophia Webmail* (2007), or even via a Unix mailer like *mh* (see Britto, 1998).

- (2) **Homepage:** If you have a Sophia email account, you will be able to make your own homepage (see *Sophians' Personal Home Page Service*, 2007). Even if you do not become famous for your homepage, you can acquire many IT [Information Technology] skills by making a homepage and publishing your academic papers and other reflections on the Web. If you really enjoy building Webpages, you can try to master more advanced skills like Web-designing, HTML coding, Flash, JavaScript, Java, CSS [Cascading Style Sheets], animation, image slicing, image mapping, and so on.
- (3) **Disk Space:** When you get your Sophia email account, you will be allotted 130 MB (perhaps more in the near future) of disk space, which you can use practically from any PC [Personal Computer] within the campus. When you log in to a Sophia University PC with your ID and password, this disk space will appear as a folder, and you can keep in it your email messages, Webpages, academic writings, presentations, pictures, and other digital materials (cf. Britto, 2006f). You can do your homework or report from any of the PCs at Sophia University and save the work in this folder and retrieve it on another day from any other PC. If you learn how to use this folder properly, you'll find your assignments easily manageable!
- (4) **Moodle:** Moodle is a fantastic new 'Course Management Software' program, available at Sophia since 2006 (see Britto, 2007; *Sophia Moodle*, 2006). More and more teachers are using this program for

their courses. This program will make it possible for you to get to know your classmates, send them email or chat with them, do group work, take part in forums, and submit your homework from home or even from abroad! You can also download class notes, get in touch with the teacher, and discuss issues with others. Moodle is used in many universities and schools around the world for CALL purposes as well.

- (5) **PC Rooms and CALL rooms:** Sophia University has several CALL rooms in Building 2, and numerous PC rooms in Building 2, the Central Library, and other buildings for your use (see *Sophia Media Center*, 2007). Almost all the PCs at Sophia University have the MS Office Suite of programs [Word, Excel, PowerPoint, etc.], browsers like the Internet Explorer and Firefox, email software, and Internet connection. The PCs in some rooms are also attached to scanners and printers, and contain programs for special tasks like OCR [Optical Character Recognition], movie editing, image editing, and so on. The CALL rooms are special computer rooms that have not only ordinary software like the MS Office Suite, but also additional software for learning languages like English, Spanish, French, German, etc. They are also equipped with CALL-specific hardware.

The facilities listed above are available to all the students of Sophia University so that everyone may acquire minimum IT skills. If you are a CALL enthusiast, try to familiarize yourself with these facilities even more than the average student and try to master as many programs and as many skills as you can. Be sure especially to explore the Webpages of your department (*Sophia DES*, 2004; 2006) and your faculty (*Sophia Faculty of Foreign Studies*, 2006).



### 3. Specializing in CALL

In order to specialize in CALL, it is not enough to be familiar with a variety of hardware and software and acquire diverse technological skills. What distinguishes CALL specialists is their interest in applying technology to language learning and language teaching. So if you want to be a CALL specialist, you have to find various ways of using technology for purposes related to language teaching and learning. Here are some suggestions to help you.

#### 3.1 Using CALL software

CALL has nearly a 30 year history, and compared to the early 1980s and 1990s, there are nowadays numerous CALL-related software programs. Modern programs are much more entertaining, easier to use, and better designed than the older ones. There are programs for helping students learn; there are programs for helping teachers teach; and there are programs serving both purposes. A program may focus on only one of the language skills, like speaking or writing; or it may deal with a variety of skills, like speaking and writing. Currently, programs are available to meet nearly every need of a language learner, dealing with grammar, listening, pronunciation, reading, speaking, test preparation, vocabulary, writing, and so on. Some programs may serve as tutors, taking the place of human teachers; some may serve as coaching or testing robots, helping you memorize vocabulary or helping you test yourself through quizzes. Language-related adventure games and puzzles can help you learn language skills indirectly as you enjoy the game or puzzle (see Brian & Neko, 2006). There are also many reference tools such as dictionaries, thesauri, idea organizers, academic style helpers, and so on (see Britto, 2004a). For a selected list of CALL

software currently on the market, see Camsoft (2011) or Stevens (2001).

Programs come in a variety of forms. Some may be very basic and text-based (without any image, sound, or animation); some may be quite rich with audio and video clips, stereo sound, and animation. Obviously, the more multimedia-based a program, the more attractive and easy to use it will be for language learning purposes, especially for young learners. Some programs may display information passively, without demanding much action from the user; whereas others may be quite interactive, enthusiastically engaging the user in some action. Not all programs have to be bought. There are many programs that are free and easily downloadable from the Internet (see e.g., Britto, 2001a; 2001d; *Hot Potatoes*, 2007; Healey, 2009). Some software makers distribute free beta-versions of their programs at their Website or at language Conventions and Conferences.

Familiarizing yourself with CALL software programs is reasonably easy, since you don't need any advanced knowledge of programming or of computers. You simply have to use the programs like an ordinary learner and see how they work. By using many programs, you'll not only improve your language skills, but also become competent to compare them, judge their relative merits and demerits, and see for yourself which design is easier and more convenient to use.

### 3.2 Using the Internet for Language Learning

Compared to the past, when autonomous computer-based programs were the norm, nowadays Internet-based programs are becoming much more common. For language teaching and learning too, the Internet is the liveliest place to go. There are hundreds of thousands of Websites that can help language learners. A good place

to start with may be the *English WebLab* (Britto, 2004a), which is a summary of a series of columns Britto (1999c) wrote for the *Daily Yomiuri*. You will find on the *English WebLab* sites concerned with pronunciation, grammar, vocabulary, listening, reading, news, quizzes, references, etc. All the sites listed there are free, and you can explore them at your leisure and focus on the skills that you want to acquire. You can, of course, find your own favorite sites too using a search tool like Google.

The Internet is nowadays as rich as or even richer than a PC-installed program. Until a few years ago, the Internet was a boring 'text-only' place—without any graphic user interface and without any browser to display colorful and interactive Webpages. In those days, you could use the Internet mainly for email and for downloading language-related texts, like copyright-expired books, grammar notes, static images, and vocabulary lists (see Britto, 1996). Nowadays, however, the Internet has a graphic user interface and is audio-visually appealing. With a browser like the Internet Explorer or Firefox, you can view beautifully and colorfully adorned pages, hear voice and music, watch movies; download text, audio, and video files; go window-shopping or order commercial goods; and interact directly with numerous Websites. There are also network communities to which you can belong; blog sites at which you can yourself blog or react to others' blogs, podcast sites from which you can download news or music directly to your PC or to a portable recording device like an MP3 player, and RSS (Really Simple Syndication) sites where you can subscribe to your favorite news/radio/music service. The language-learning opportunities that the Internet offers are so abundant that even discovering a portion of them will enhance your CALL expertise.

Let me give here a couple of examples on how the Internet may be used for language study. If you would like to learn how to pronounce difficult English sounds, visit the *English Pronunciation/Listening* (2007) site and explore. Make sure to watch the video clips and check for yourself how good you are in distinguishing some common English minimal pairs, like /boat/ and /both/. For listening to basic or advanced conversation segments as you view the transcript, visit Randall S. Davis's *ESL Cyber Listening Lab* (2011). To learn common English songs, visit Charles Kelly's *Learn a Song* (2010). To listen to retired Professor Peter Milward of Sophia University read his book *From First to Last*, as you view the text and read along with him, visit Francis Britto's Online Audio-Reader entitled *Peter Milward's FIRST TO LAST* (2005b). The Online Audio Reader, perhaps unique on the Internet, will allow you to stop the reader, Professor Milward, any time and make him repeat phrases or sentences as you like; it will also make it possible for you to use the same text for dictation and memorization purposes (cf. Britto, 2006a; 2006c; 2006d). To download various English audio files for listening to them later on from your PC or an MP3 player, try *English as a Second Language (ESL) Podcasts* (2006). For the use of Blog in teaching English see, for example, Lee Hobbs' *The English Blog* (2007) or Jeffrey Hill's *The English Blog* (2006). On the Internet, you don't have to be always a passive listener or a viewer. There are excellent sites where you can interact by taking quizzes or by writing your own reactions (see Kelly & Kelly, 2007).

There are many Internet projects these days that allow collaboration among students from different continents or different cities (see Robb, 2005). For example, students from different places can exchange opinions, build a website, construct an essay or a story, and engage in useful debates. There are many resources such as free

telephone services (e.g., Skype), free videos (e.g., YouTube), and free audios (e.g., VOA Podcasting). Many of these can be used for language learning (see Rao, 2007; Sawhill & Ganley, 2006; Britto, 2004a). There are outstanding online dictionaries and online reading sites giving meaning for every word too (see Britto, 2004a; Kelly & Kelly, 2007). For learning English through audio-visually enhanced games, try Brian and Neko's *Halloween* (2006). There are numerous other resources on the Internet for language learning, which you may learn about by taking a CALL-related course.

### 3.3 Doing CALL Research

If you are academically inclined to study CALL, then you can do CALL research, especially for a graduation thesis or in a graduate school later on. What kind of research can you do in CALL? You can, for example, explore whether using CALL is any better than not using CALL, or whether a particular skill like reading or writing is better acquired with software assistance. You can also do research about the attitude of students, teachers, and administrators to technology, exploring whether they like it or not, and whether their attitude affects the success or failure of CALL programs. Still another area of research is how the design of software affects learning. Do some designs turn off users? Do some designs entice users? Not all software is equally efficient, and only research can point to ways by which truly productive software can be developed. Many institutions seem baffled by new technology and seem unsure how to introduce CALL into their curriculum. So, another area of research could be how to integrate CALL efficiently into the curriculum. You can explore articles and books given in the bibliography below for further inspiration on research topics.

### 3.4 Developing CALL Software

If you are a computer wizard, already writing computer programs or eager to write computer programs, you can try developing CALL software. There is a big demand in this area since most professional programmers are not language educators, and language educators are usually not programmers. So if you are a language professional with programming skills, you can solve many academic problems by developing appropriate software (cf. Britto 1991; 1993; 1994; 2001a; 2002; 2003a; 2003b; 2003c; 2004b; 2005a; 2005b; 2006a; 2006b; 2006c; 2006d). As a language professional, you don't have to be a programming expert, but you must have at least basic knowledge of programming in order to create useful utilities, tools, and add-ons that professional programmers usually do not care to make. There are many 'part-time' programmers around the world, who contribute to the academic community by making their programs available either free of charge or for a low price. Worth mentioning are programs like *Hot Potatoes* (2007) and *Moodle* (2007), both of which are now widely used in many parts of the world. Moodle, conceived and developed by Martin Dougiamas in connection with his doctoral thesis, is currently the second most popular Course Management Software in the world, used in thousands of academic institutions and by millions of users. Great insights and superb programs have evolved from the inventiveness of non-professional programmers like university students and dropouts; so if you are inclined to solving problems, you must try your hand at programming.

If you find programming software too challenging, you can try creating Websites useful for language learners. As long as you are able to use some audio, graphic, and video software programs like PowerPoint, PhotoShop, Flash, PaintShopPro, Director, Windows Movie

Maker, and Windows Media Player, you can make very interesting Webpages for language learners. Several DES students have created such Webpages, the most notable of which is perhaps *Hanabi Taikai*, a set of conversational lessons for learners of Japanese, created by the CALL Seminar Class of the academic year 2000-2001 (see Britto, 2001c). These lessons contain conversational and vocabulary texts, images, audio and video segments. The *Hanabi Taikai* was presented at the 2001 JALTCALL Annual Conference and was favorably received by the audience, which consisted mostly of teachers interested in CALL (see Britto & Iwasaki, 2001).

In brief, then, developing CALL software is not an impossible task for students of English!

#### 4. CALL-related courses at Sophia University

There are several courses that you can take to improve your computing and CALL-related skills at Sophia. First, as a freshman, you will have the optional *Information Literacy* course. This course will introduce to you all the computer and Internet facilities at Sophia and teach you basic computing and Internet skills. If you already know much about computers and software, you may take advanced courses by passing the Information Literacy placement test. Even if you are placed with students poorer than you at computing skills, you can consult the teacher and try to learn advanced skills by yourself or with the teacher's personal guidance.

Several professors use the CALL classroom for courses like Composition, English Skills, French, Spanish, and German. You may be able to take such a course and learn by doing how a CALL classroom works and what its advantages are. Some professors may use an

ordinary computer classroom, Moodle, or the Web for their courses (cf. *Sophia Moodle*, 2006; *Sophians' Personal Home Page Service*, 2007; Tinoco, 2005; Yamamoto-Wilson, 2005; Yoshida, 2005). A Moodle-based course will offer you many opportunities to use a computer and the Internet for educational purposes. Since Moodle, being freeware, is spreading fast to most of the educational institutions, it will be to your advantage to make yourself thoroughly familiar with it.

Finally, there are special courses that try to address the needs of students in the Faculty of Foreign Studies. For example, courses like "The Internet for learning English," "Internet Skills," "CALL: Language Learning in the Digital Age," "Database construction on the Web," "Corpus Analysis," and so on are offered by professors from the English and Spanish language departments. If you are quite proficient in IT skills and if your schedule permits, you may challenge the more advanced courses in Excel, programming (Java, JavaScript, C), networking, system administration, and so on, offered by professors of other faculties.

## 5. Career in CALL

At present, Sophia University has neither a department of CALL nor an outfit to offer degrees in the field, but around the world there is a dramatic surge in the number of institutions that offer certificates and degrees in CALL (e.g., Monterey Institute of International Studies, Monterey, CA; Saint Michael's College, Colchester, Vermont; The University of Melbourne, Melbourne). You can see a longer list of such institutions on the Webpage entitled *Postgraduate and INSET Courses in CALL & TELL* (Davies, G., 2006). The CALL curricula and objectives may vary with institutions. The University of Melbourne



(2004), for instance, states that its Master of CALL program has the aim of “educating the ‘CALL expert’ who will take responsibility for integrating educational technology into curricula, designing learning environments, and organizing and conducting local teacher education programs.” Other institutions may focus on different issues such as useful CALL sites, development or evaluation of CALL software, setting up of a CALL laboratory, methods of assessing CALL productivity, and so on. If you are interested in getting a degree in CALL and then going on to a CALL-related career, check out these institutions. One reason for the increasing popularity of CALL is that employment opportunities abound for CALL graduates. The University of Melbourne (2004) asserts that

the career outcomes for our graduates have to date been very encouraging and included development of new technology-related subjects at university ... levels, conference presentations and papers in professional journals, taking up new positions (for example as IT curriculum coordinators), starting a business in on-line ESL tutoring, creating original software, and obtaining funds to develop electronic environments and start collaborative projects with schools overseas.

In many educational institutions (that is, kindergartens to universities, and all technical and tutorial schools), there is a great demand for CALL specialists to work as instructors, faculty advisors, troubleshooters, planners, coordinators, and CALL-center administrators. Since most senior staff and faculty members are unfamiliar with CALL, many institutions waste money and other resources by investing in useless, outdated, or unfit computers and

programs. In some institutions, they invest a large amount of money in getting new hardware and software, but they cannot find among their employees anyone competent enough to use the new hardware and software. Even when they hire experts to teach the employees, few employees are interested in learning new skills and still fewer actually use the new computers and programs. The lack of CALL experts leads to such tragic outcomes. Professional CALL experts can assist educators by introducing to them the latest developments in hardware and software, by recommending to them the most appropriate CALL products, and by giving them practical lessons and tutorials. CALL experts can also contribute by writing manuals and guides for their institution so that even non-experts may be able to use the hardware and software acquired by the institution (see e.g., Britto, 1996; 1998; 2006f; 2007). Apart from careers as administrators and consultants at educational institutions, CALL experts can look forward to careers as independent critics by evaluating CALL software and CALL-related publications (see e.g., Britto, 1997; 1999a; 1999b; 1999c; 2001b). Most academic journals are in need of professional reviewers of CALL-related products.

If you are thinking of a career in CALL, surely, you will have to pursue higher studies in CALL. But even while you are a student of Sophia, you can get involved in CALL activities by joining CALL associations like JALTCALL, TESOL CALL-IS, APA-CALL, etc. and by writing for any of the CALL journals, like CALL-EJ or TESL-EJ. Taking part in CALL conferences and reading CALL journals also can help you widen your horizon.

## 6. Bibliography

(See *Brittonia* or the *CALL Seminar WebLab* (Britto, 2006e; 2006g) or Britto's CALL homepage on Moodle for more and up-to-date materials.)

Basena, D., & Jamieson, J. (1996). CALL research in second language learning: 1990-1994. *CAELL Journal*, 7, 14-22.

Bradin, C. (1999). Instructional aspects of software evaluation. In J. Egbert & E. Hanson-Smith (Eds.), *CALL Environments: Research, Practice, and Critical Issues*. Alexandria, VA: TESOL.

Chapelle, C. (1997). CALL in the year 2000: Still in search of research paradigms? *Language Learning and Technology Journal*, 1 (1), 19-43. Retrieved February 8, 2007, from <http://llt.msu.edu/vol1num1/chapelle/default.html>

Chapelle, C. (2003). *English language learning and technology: Lectures on applied linguistics in the age of information and communication technology*. Philadelphia: John Benjamins Publishing.

Doughty, C. (1992). Computer applications in second language acquisition research: Design, description, and discovery. In M. Pennington, & V. Stevens (Eds.), *Computers in applied linguistics: An international perspective*. Clevedon, Avon: Multilingual Matters, Ltd.

Dunkel, P. (1991). The effectiveness research on computer-assisted instruction and computer-assisted language learning. In P. Dunkel (Ed.), *Computer-assisted Language Learning and Testing: Research Issues and Practice*. New York: Newbury House.

Egbert, J. (2005). *CALL Essentials: Principles and Practice in CALL Classrooms*. Alexandria, VA.: TESOL.

Felix, U. (2001). *Beyond Babel: Language Learning Online*. Melbourne: Language Australia, distributed by CAE Press, Australia.

Hubbard, P. (1987). Language teaching approaches, the evaluation of CALL

- software, and design implications. In W. Smith (Ed.), *Modern media in foreign language education: Theory and Implementation*. Lincolnwood, IL: National Textbook Company.
- Levy, M. (1997). *Computer-Assisted Language Learning: Context and Conceptualization*. Oxford: Oxford University Press.
- Myles, S. (1998). The language learner and the software designer: A marriage of true minds or ne'er the twain shall meet? *ReCALL Journal*, 10 (1), 38-45.
- Pennington, M.C. (Ed.) (1989). *Teaching Languages with Computers: The State of the Art*. La Jolla, CA: Athelstan.
- Pennington, M.C. (Ed.) (1995) *The power of CALL*. Houston, TX: Athelstan.
- Pennington, M.C. (Ed.) (1996). *Writing in an Electronic Medium: Research with Language Learners*. Houston, TX: Athelstan.
- Stevens, V. (1984). Implications of research and theory concerning the influence of control on the effectiveness of CALL. *CALICO Journal*, 2 (1), 28-33, 48.
- Underwood, J. (1984). *Linguistics, Computers, and the Language Teacher*. Rowley, MA: Newbury House.
- Warschauer, M., & Healey, D. (1998) Computers and language learning: an overview. *Language Teaching*, 31, 57-71.
- Warschauer, M. (1995). *E-mail for English teaching*. Alexandria, VA: TESOL Publications.
- Warschauer, M. (Ed.). (1995). *Virtual connections: On-line activities & projects for networking language learners*. Honolulu, HI: Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawai'i.
- Wilhelm, J., & Friedemann, P. (1998). *Hyperlearning: Where Projects, Inquiry, and Technology Meet*. York, Maine: Stenhouse Publishers.
- Woodin, J. (1997). Email tandem learning and the communicative curriculum. *ReCALL Journal*, 9 (1), 22-33.

- Wyatt, D. (1984). *Computers and ESL*. Orlando: Harcourt, Brace, Jovanovich, Inc.
- Young, R., & Shermis, M.. (1993). Computer-Adaptive Testing in HyperCard. *CAELL Journal*, 4, 20-25.

## 7. CALL-related Online Journals

*(All sites accessed on July 28, 2011)*

*CALL-EJ* <http://callej.org>

*Language Learning & Technology* <http://llt.msu.edu/>

*TESL-EJ* <http://tesl-ej.org>

## 8. CALL-related Associations

*(All sites accessed on July 28, 2011)*

APACALL (Asia-Pacific Association for Computer-Assisted Language Learning) <http://www.apacall.org/>

CALICO [Computer Assisted Language Instruction Consortium]  
<https://calico.org/>

EUROCALL, European Association for Computer Assisted Language Learning <http://www.eurocall-languages.org/>

IALLT (The International Association for Language Learning Technology)  
<http://iallt.org/>

IATEFL Learning Technologies SIG <http://ltsig.org.uk>

JALTCALL <http://jalt.org/groups/CALL> & <http://jaltcall.org/>

TESOL CALL-IS <http://www.call-is.org/>

## References

- Brian & Neko. (2006). *Halloween*. Retrieved February 12, 2007, from <http://www.neko.ca/content/view/44/50/>
- Britto, F. (1991, March). QuizMaster: An experiment in computer-assisted instruction. *Sophia University Bulletin of the Faculty of Foreign Studies*, 26, 1-16.
- Britto, F. (1993). *Kuizu no de-ta be-su wo kyouzai to suru QuizMaster* 'QuizMaster: Using quiz databases for learning English.' In K. Kitao, et al. (Eds.), *Konpyu-ta Riyou no Gakikokugo Kyouiku-CAI no Doukou to Jissen*. 'CAI for EFL education: Trends and Practices.' Tokyo: Eichousha. pp.180-186.
- Britto, F. (1994, September 1). *Konpyu-ta- wo mochiita Eibun dokusho*. 'Computer Assisted Reading.' *Dai 8 Kai Shijoukyou Taikai Happyo* 'A presentation at the Eighth Annual Convention of the Information Science Association of Private Universities.' Arcadia Ichigaya Shigaku Kaikan, Tokyo.
- Britto, F. (1996). *Testdriving On the Internet Highway: A Basic Guide for Scholars in Humanities*. Tokyo: Sophia University Computer Center.
- Britto, F. (1997, May). Review of *Nichijou Kaiwa ni Jishin ga tsuku Eikaiwa* 'Everyday English Conversation, CD ROM & Book.' *C@lling Japan (JALT CALL N-SIG Newsletter)*, 6 (1).
- Britto, F. (1998). *Unix Email Using MH*. Tokyo: Sophia University Computing Center.
- Britto, F. (1999a, May). Site Review of Randall's ESL Lab. *C@lling Japan (JALT CALL N-SIG Newsletter)*, 8 (2).
- Britto, F. (1999b, May). Site Review of Senshu University, Movie Clip site. *C@lling Japan (JALT CALL N-SIG Newsletter)*, 8 (2).
- Britto, F. (1999c, April~). Web pages for English learners. A series of 18 columns in *The Daily Yomiuri*.

- Britto, F. (2001a, March 2). *Right Sort with RLSort*. A TESOL CALL-IS Developers' Showcase Presentation. TESOL 2001 Annual Convention. St. Louis, MO.
- Britto, F. (2001b). Review of S. Quann & D. Satin, *Learning Computers, Speaking English: Cooperative Activities for Learning English and Basic Word Processing*. *TESOL CALL-IS News*, 18 (2), 6-7.
- Britto, F. (2001c). *Hanabi Taikai*. Retrieved July 28, 2011, from <http://pweb.cc.sophia.ac.jp/britto/semi/>
- Britto, F. (2001d). *RLSort*. Retrieved July 28, 2011, from <http://pweb.cc.sophia.ac.jp/britto/rls/>
- Britto, F. (2002, February 15). *Automating the Identification and Collection of Writing Errors*. A presentation at the International Colloquium: Language Learning is Everybody's Business, Flinders University of South Australia, Adelaide.
- Britto, F. (2003a). Collecting errors with *Word*. In P. Lewis, C. Imai, & K. Kitao (Eds.), *Local Decisions, Global Effects: The Proceedings of JALTCALL 2002*. Nagoya: The JALTCALL SIG. pp. 203-208.
- Britto, F. (2003b). Ordinary applications and extraordinary uses. *Sophia Linguistica*, 50, 237-252.
- Britto, F. (2003c, March). *Extracting EFL Errors with Word*. A TESOL CALL-IS Developers' Showcase Presentation. TESOL 2003 Annual Convention. Baltimore, MD.
- Britto, F. (2004a). *English WebLab*: <http://pweb.cc.sophia.ac.jp/~britto/weblab-e.html> (Selected sites for learning English pronunciation, grammar, vocabulary, reading, writing, listening, etc., based on the series of columns Francis Britto wrote for *The Daily Yomiuri*)
- Britto, F. (2004b, March). A quick and dirty way to make an error corpus. *Handbook of an International Symposium on Learner Corpora in Asia*. Tokyo: Showa Woman's University. pp.22-27.

- Britto, F. (2005a). Word styles for thesis. *Free Downloads from Brittonia*.  
<http://pweb.cc.sophia.ac.jp/britto/free/index.html>
- Britto, F. (2005b). *Peter Milward's FIRST TO LAST*. Retrieved February 8, 2007, from <http://lctweb.cc.sophia.ac.jp/~p-milwar/f2l/> [only from Sophia]
- Britto, F. (2006a, March). *Online Audio Reader. A TESOL CALL-IS Developers' Showcase Presentation*. TESOL 2006 Annual Convention, Tampa, FL. Retrieved February 8, 2007, from <http://www.uoregon.edu/%7Ecall/ev2006/Devshowcase2006.htm>
- Britto, F. (2006b, March). *Making a Sing-along Movie with Windows Movie Maker and PowerPoint. A TESOL CALL-IS Applications Fair Presentation*. TESOL 2006 Annual Convention, Tampa, FL. Retrieved February 8, 2007, from <http://www.uoregon.edu/~call/ev2006/appfair.html>
- Britto, F. (2006c, August 18). *Web-based Reading and Listening: An Original Approach*. A presentation at AsiaTEFL 2006 International Conference, Seinan Gakuin University, Fukuoka. Retrieved February 8, 2007, from <http://www11.ocn.ne.jp/~iskwshin/program.pdf>
- Britto, F. (2006d, September 23). *Toward a Web-based Audio Reader for Extensive Listening*. A presentation at JALT Hokkaido 2006 Conference, Hokkai Gakuen University, Sapporo. Retrieved February 8, 2007, from [http://www.jalthokkaido.net/html/events/conference/conference2006/conference2006\\_schedule.htm](http://www.jalthokkaido.net/html/events/conference/conference2006/conference2006_schedule.htm)
- Britto, F. (2006e). *CALL Seminar WebLab*. [http://pweb.cc.sophia.ac.jp/britto/callsemi/semilab\\_.html](http://pweb.cc.sophia.ac.jp/britto/callsemi/semilab_.html) (links to useful CALL resources, like CALL Research Articles, CALL Journals, Dictionaries of Technical Terms, CALL-related Associations and Conferences, CALL-related Free software.)
- Britto, F. (2006f). *Email Netiquette*. (3<sup>rd</sup> Ed.) Tokyo: Sophia University Computing Center.



- Britto, F. (2006g). *Brittonia*. <http://pweb.cc.sophia.ac.jp/britto/> (Francis Britto's homepage for his students. Contains a variety of information useful to students, especially students of DES)
- Britto, F. (2007). "Moodling at Sophia." *Sophia University Bulletin of the Faculty of Foreign Studies*, 41, 1-38.
- Britto, F., & Iwasaki, M. (2001, May 26). *Hanabi taikai: Web-based Japanese lessons made by students*. JALTCALL 2001 Annual Convention, Ota Shi, Gumma. <http://pweb.cc.sophia.ac.jp/britto/semi/jalthdout.html>
- Camsoft. (2011). *Modern Foreign Languages and English as a Foreign Language: Main Catalogue*. Retrieved July 27, 2011, from <http://www.camsoftpartners.co.uk/catalog.htm>
- Davies, G. (2011). *Postgraduate and INSET Courses in CALL & TELL*. Retrieved July 28 2011, from <http://www.camsoftpartners.co.uk/courses.htm>
- Davies, R. D. (2011). *ESL Cyber Listening Lab*. Retrieved July 27, 2011, from <http://www.esl-lab.com/>.
- English as a Second Language (ESL) Podcasts*. (2006) Retrieved July 27, 2011, from (2007). <http://a4esl.org/podcasts/>
- English Pronunciation / Listening* (2007). Retrieved July 27, 2011, from <http://international.ouc.bc.ca/pronunciation/>
- Healey, D. (2009). *A place to start in selecting software*. Retrieved July 27, 2011, from [http://www.deborahhealey.com/cj\\_software\\_selection.html](http://www.deborahhealey.com/cj_software_selection.html)
- Hill, J. (2006). *The English Blog*. Retrieved February 12, 2007, from [http://jeffreyhill.typepad.com/english/learning\\_english/index.html](http://jeffreyhill.typepad.com/english/learning_english/index.html)
- Hobbs, L. (2007). *The English Blog*. Retrieved July 27, 2011, from <http://www.english-blog.com/>
- Hot Potatoes*. (2007). Retrieved February 12, 2007, from <http://hotpot.uvic.ca/>
- Kelly, C. (2010). *Learn a Song*. Retrieved July 27, 2011, from <http://www.manythings.org/songs/>
- Kelly, C., & Kelly, L. (2007). *Interesting Things for ESL Students*. Retrieved

- July 28, 2011, from <http://www.manythings.org/>
- Moodle. (2007). Retrieved July 28, 2011, from <http://moodle.org/>
- Rao, P. (2007, January 29). Skype as a language-learning tool. *The GW Hatchet Online: An Independent Student Newspaper*. Retrieved July 28, 2011, from <http://media.www.gwhatchet.com/media/storage/paper332/news/2007/01/29/Life/Skype.As.A.LanguageLearning.Tool-2682418.shtml>
- Robb, T. (2005). *Student List Projects*. Retrieved February 12, 2007, from <http://sl-lists.net/>
- Sawhill, B., & Ganley, B. (2006, July 11). Using Skype, Podcasting and Blogging in Foreign Language Teaching. *CTLR [Center for Teaching, Learning and Research, Middlebury College, Middlebury, Vermont] Workshops*. Abstract retrieved February 12, 2007, from [http://mt.middlebury.edu/middblogs/hvila/CTLRWorkshops/2006/05/workshop\\_descriptions\\_1.html](http://mt.middlebury.edu/middblogs/hvila/CTLRWorkshops/2006/05/workshop_descriptions_1.html)
- Sophia DELAS (Old version) (2004). Retrieved July 28, 2011, from <http://www.info.sophia.ac.jp/fs/eigo/eigo.htm>
- Sophia DES (2006). Retrieved July 28, 2011, from <http://www.info.sophia.ac.jp/engffs/index.html>
- Sophia Faculty of Foreign Studies. (2006). Retrieved July 28, 2011, from [http://www.info.sophia.ac.jp/fs/index\\_ajax.html](http://www.info.sophia.ac.jp/fs/index_ajax.html)
- Sophia Media Center (2007). Retrieved July 28, 2011, from <http://ccweb.cc.sophia.ac.jp/>
- Sophia Moodle (2006). Retrieved July 28, 2011, from <http://nakama.cc.sophia.ac.jp/login/index.php>
- Sophia Webmail (2007). Retrieved July 28, 2011, from <http://ccweb.cc.sophia.ac.jp/Annai/webmail/webmail.html>
- Sophians' Personal Home Page Service. (2007). Retrieved July 28, 2011, from <http://pweb.cc.sophia.ac.jp/>
- Stevens, V. (2001). *CALL Software Wish List*. Retrieved July 27, 2011, from

<http://www.vancestevens.com/callsoftware.htm>

Tinoco, A.R. (2005). *El Taller de Tinoco*. Retrieved February 11, 2007, from <http://lingua.cc.sophia.ac.jp/taller/index.php> (Mostly in Spanish!)

University of Melbourne, The. (2006). *Harwood Language Center: Introduction*. Retrieved July 28, 2011, from <http://www.unimelb.edu.au/HB/2006/areas/AHLC.html>

Yamamoto-Wilson, J.R. (2005). *Web pages for students of English literature at Sophia University*. Retrieved July 28, 2011, from <http://pweb.cc.sophia.ac.jp/j-yamamo/>

Yoshida, K. (2011). *Yoshiken's Home Page*. Retrieved July 28, 2011, from <http://pweb.cc.sophia.ac.jp/1974ky/> (Contains materials of relevance to TESOL & EFL)

### Ⅲ 社会言語学

#### Sociolinguistics (社会言語学)

Lisa Fairbrother

In simple terms, *sociolinguistics* refers to the study of language and society. Obviously this is a very broad and complex topic and, because it includes concepts relating to both language and society and the actual people using those languages in those societies, research in this area overlaps with the fields of linguistics, sociology, anthropology, psychology and education.

One of the key concepts in sociolinguistics is the idea of variation; that people use different languages or different types of the same language in different ways depending on what they are doing and with whom they are communicating. Some themes relating to this kind of variation will be introduced below.

##### 1) What is your language?

One of the easiest ways to grasp some of the basic ideas of sociolinguistics is to think about your own language and try to define what it is. At first glance, this seems to be a very simple task and you might say “English”, “French”, or “Japanese”. However, *what is* English, French or Japanese? If someone from the USA, someone from Britain, someone from India and someone from Singapore say that they speak English are they all talking about exactly the same thing? There are clearly differences in language depending on where the speakers of that language live and this leads to the further question of who decides which type of English is “right”. This kind of question is rarely

left to chance but is usually based on decisions made by governments and politicians or other powerful institutions. For example, “realise” used to be the “correct” spelling in British English but the publishers of the Oxford English Dictionary decided that “realize” would also be correct and now most British people use the latter spelling “naturally”. Therefore, even if one word is “correct” today, it may not be “correct” in the future.

For the Japanese student this then leads to the further question of *which English* to study? And, is it possible to learn **English as an international language**, separate from any one country’s national standards? If so, who decides which spelling system, grammar and vocabulary are the most international? This then connects to further questions, such as why study English at all? Why not Chinese or Swahili? These kinds of questions belong to the branch of sociolinguistics called **language planning** and it is important to realize that many issues concerning language that many people feel are “natural” are actually decided by governments and other organizations.

Even if we can pinpoint which national language we speak, for example Japanese, can we really say that everyone in Japan uses exactly the same type of Japanese? Can we say that a farmer in Kagoshima speaks the same Japanese as a businessman in Osaka, or a fisherman in Aomori? Obviously there are many regional differences and these can be seen in many languages. Differences in pronunciation or the sounds people make are often referred to as accent, whereas differences in word choices and grammar are referred to as **dialects**. For example in British English, someone in London might say “It’s very dirty” but the same idea could be expressed as “Tha’s right mucky” in Yorkshire, or “It’s hacky” in Teeside (Stockwell, 2002).

However differences within a single language are not limited

to regional variation, and researchers have shown how people within a certain society may also use language differently depending on their **social class, gender, age and race or ethnicity**. For example, in Japanese generally only women, (or men trying to sound like women) would use “kashira” at the end of their sentences. From the sociolinguist’s point of view all forms of language used are equally valid and “correct”, however in most societies, certain varieties are considered to have more **prestige** than others and this leads to evaluative statements about certain varieties, such as British Received Pronunciation being “proper” English, or American English being “better” than Singaporean English, or someone with a dialect from the south of the USA sounding “less intelligent” than someone with a dialect from the north. Sociolinguists will never make such evaluations themselves but they will be very interested in how and why people make those evaluations.

## 2) How do you use your language?

Sociolinguists also show that language is not always used in the same way in every situation. The way language is used may vary according to the circumstances you are in and the person you are talking to. A simple way to grasp this idea is to consider how you use your language. For example, if you see your friend on the street, you will probably greet her by saying something like “Hi, Jane”. However, if you send an email to that friend you might just write “Jane” or in a letter you might write “Dear Jane”. Therefore, the words and expressions you use may differ according to the **mode of communication** (spoken, written, email, etc.) you choose.

Language is also used differently depending on where you are

and what you are doing. For example, special words and expressions may be used by people with a particular job or interest. People familiar with computers, for instance, will understand words such as “hacking”, “defragging” and “surfing the net”, while pilots will use expressions such as “roger” and “sierra whiskey foxtrot”. These special varieties, often described as jargon, are referred to as **register** in sociolinguistics. Furthermore, the same person may use different registers when at home or at work. In other words, the type of language used may differ depending on the **domain** where it is used. People may even choose a completely different language to communicate in different situations or for different purposes, a process referred to as **code-switching**.

The type of language used may also be different depending on the relationship you have with the person you are speaking to. For example, a Japanese student meeting his friends in the morning might say “ohayō” or “uss” but the same student would most probably say “ohayō gozaimasu” to his teacher. Thus, it can be seen that people use different levels of formality depending on whom they are communicating with; more casual language with friends and more formal language with people they consider to be of higher status. In sociolinguistics, this type of variation is referred to as **style** and the concept is closely related to another theme of sociolinguistics and pragmatics, **politeness**, which examines the ways language is used to show a person’s relationship with others.

Language may also be used differently towards different types of people. For example, people often use special words, such as “handie” (hand) and “doggie” (dog) and speak in a higher pitched voice when talking to babies and small children. This register, called **baby talk** or **motherese** in the past, is now more commonly referred to as **child directed language**. Similarly, people may speak more

slowly and use simpler grammatical constructions when speaking to foreigners: a register known as **foreigner talk**. People's attitudes also govern the way they use language towards certain people and research into **accommodation theory** has shown how people make their pronunciation and way of speaking similar to the person they are talking to if they like that person. On the other hand, they may use different pronunciation and a different way of speaking if they do not like that person. Negative attitudes also obviously play a role when people use **sexist**, **racist** and **ageist language**.

### 3) Communicating with people from different language backgrounds

Another major theme within sociolinguistics is the analysis of how people from different language backgrounds communicate with each other, an aspect that overlaps considerably with the field of psychology called **intercultural communication**. It has been widely reported that depending on their culture, people communicate in different ways. For instance, it has been shown that people from different cultures use their bodies and faces in different ways when they communicate, a concept referred to as **non-verbal communication**. Also, people from certain cultures generally express their intentions and wishes more directly than others. Thus, if an Israeli wants the window to be opened he or she might say something along the lines of "Open the window", whereas an American might say, "Would you open the window please" and a Japanese person might not mention the window at all but say something much more indirect, such as "It's cold in here, isn't it?" In each of their native cultures these expressions will sound perfectly appropriate and polite but if translated literally into another language they could seem impolite, strange or



may not even be understood at all. Much research on this topic has been conducted in the field of **cross-cultural pragmatics** and it has been found that depending on their culture people use language to show friendliness, politeness, sincerity, disapproval, anger etc. in often very different ways. Thus, if people rely on literal translations of expressions from their own languages when speaking a foreign language, they are likely to be misunderstood.

Some of these issues have been taken up by researchers in **language education**. In the past foreign or second language educators used the way native speakers communicate with each other as the ideal model for designing language learning programmes. Thus, in the past many language programmes focused on the pronunciation and communication patterns of native speakers. However, research into **contact situations**, situations where people from different linguistic backgrounds interact with each other, has found that native speakers may communicate in very different ways when interacting with non-native speakers. In addition to the use of foreigner talk, they may talk about different topics, ignore usual politeness conventions and expect non-native speakers to use their language in a particular way (not using slang for example). As a result, some recent language programmes have tried to teach students in preparation for contact situations, rather than native speaker situations. Furthermore, the very notion of categorizing language users as native speakers and non-native speakers has been criticized because these categories don't actually apply to language proficiency. For example, even if someone whose first language is Japanese has a much broader vocabulary and a better command of formal English than many so-called 'native speakers', they probably will never be regarded as a native speaker. In addition, the majority of people who learn English in the world today

will be more likely to use it with other non-native speakers as a **lingua franca** rather than with native speakers.

#### 4) How do researchers analyse language?

Sociolinguists carry out their research in a variety of ways. Many sociolinguists conduct large-scale surveys in order to collect substantial quantities of data concerning a specific feature of language, such as the pronunciation of a certain word or sound, which can then be analysed statistically. Through this method it is possible to see how many people actually use that feature of language and whether that feature is representative of the language of a particular group of people. One way of collecting this kind of data is through the **sociolinguistic interview**, where the researcher talks to the interviewee and tries to get samples of different kinds of speech. **Fieldwork** is also used by researchers who want to collect samples of language within context and can include the covert collection of responses to particular questions or requests. In addition, **questionnaires** are used to gather speakers' attitudes towards language.

Another way that sociolinguists analyse language is to look at longer pieces of naturally occurring language (either written or recorded) in context, a method that is broadly termed **discourse analysis**. As this type of analysis can clearly be used to analyse any part of language the range of research conducted in this field is immense and many of the major themes of sociolinguistics mentioned above have been approached in this way. One method, called **conversation analysis**, examines the underlying structure of conversations. For instance, utterances often come in pairs, such as one person's greeting followed by another person's greeting, a question

followed by an answer, an offer followed by either an acceptance or rejection. Conversation analysis also looks at the ways in which people take turns in conversation and has shown that there are particular places in conversations, often marked by a slight pause, that make it easy for other speakers to take their turn.

Another method within discourse analysis, called the **ethnography of communication**, also examines the structure of conversations and written language, but in a different way: by analysing speakers' use of language as a pattern of behaviour within a broader context. For example, one student in a science class wanting to use another student's calculator might say, "Can I borrow your calculator?" In this way the student is using words to do something (make a request), which can be described as a **speech act**. However, in many cases the process of making a request does not necessarily start with a speech act itself. Often people will say things beforehand that lead into the request. For example, the student wanting to borrow the calculator might say something like, "Have you finished?", or "I forgot my calculator today" before launching into the actual request. Also a request does not actually end until it is recognised by the other person, so the student with the calculator is likely to reply, perhaps accepting by saying "Sure", or adding a condition such as "But I'll need it back in 5 minutes". Therefore, all these other utterances (which may also be speech acts) are included in the wider sequence of "trying to borrow someone's calculator", which can be described as a **speech event**. Going one step further "trying to borrow someone's calculator" is only one speech event within the broader **speech situation** of the science class, which will contain many other speech events, such as "the teacher's explanation" "students' question time" and "the opening and closing" of the class. Therefore, the ethnography of communication

shows that it is often necessary to look at language within its wider context to understand how people use it.

Another method used within discourse analysis is **interactional sociolinguistics**, which looks at the spoken discourse between people of different ethnicities and nationalities. It has been found that there are certain **contextualization cues**, such as the intonation, rhythm, timing and volume of an utterance or set phrases, that show how a speaker wants his or her utterance to be understood. Therefore, if a mother, speaking to her child who is about to go out in the rain, says “Where are your boots?” without rising intonation at the end, she is not likely to be asking the child the physical location of her boots but rather indirectly telling her to put her boots on. However, people from different ethnic or language backgrounds often do not share the same cues so they often misinterpret each other’s meanings, a phenomenon referred to by Gumperz as **crosstalk**.

Finally, **critical discourse analysis** is concerned with the way in which ideology is represented in language and deals with issues of power, social control and manipulation. For example, it looks at how racism, sexism and political ideology are conveyed through language, often covertly, in the media, and how institutions control what will be written or talked about. Thus, if a history book states “the Vikings were addicted to drink, gluttony and *women*”, it shows that the author is only talking about men when he uses the word “Vikings” and is not considering the other half of the population that were female.

As can be seen above, sociolinguistics is a very broad multidisciplinary field that can be approached in a variety of ways. The following resources should help you to learn more about the particular areas of sociolinguistics you are interested in.

## Recommended Reading

### 1. General introductory textbooks

飯野公一・恩村由香子・杉田洋・森吉直子 (2003) 『新世代の言語学－社会・文化・人をつなぐもの－』 くろしお出版

Holmes, J. (2001). *An introduction to sociolinguistics, second edition*. Harlow: Longman.

Kramsch, C. (1998). *Language and culture*. Oxford: Oxford University Press.

Romaine, S. (2000). *Language in society: An introduction to sociolinguistics (2nd edition)*. Oxford; New York: Oxford University Press.

真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹 (1992) 『社会言語学』 おうふう

Scollon, R & Scollon, S.W. (1995). *Intercultural communication: A discourse approach*. Oxford: Blackwell.

Stockwell, P. (2002). *Sociolinguistics: A resource book for students*. London: Routledge.

Wardhaugh, R. (2002). *An introduction to sociolinguistics (4th edition)*. Malden: Blackwell.

### 2. More specialized texts

Coates, J. (2003). *Men talk*. Malden; Oxford: Blackwell.

This book addresses the issue of **language and gender** by examining how men speak.

Cutting, J. (2002). *Pragmatics and discourse: A resource book for students*.

London: Routledge. This book provides a very clear introduction to the branch of **discourse analysis** that deals with the socio-cultural meanings of language use. As well as providing definitions of the key concepts the author gives many examples from real language use and includes excerpts from famous researchers' work.

Duranti, A. (1997). *Linguistic Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press. This very detailed book analyses the relationship

between **language and culture** in depth.

Gumperz, J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge; New York: Cambridge University Press. The key concepts behind **interactional sociolinguistics**, such as contextualization cues, are introduced here with examples.

木村護郎 クリストフ・渡辺克義 (編) (2009) 「媒介言語論を学ぶ人のために」 世界思想社 This book gives an overview of **lingua franca** research and gives case studies of some of the languages commonly used as lingua franca around the world.

橋内武 (1999) 『ディスコース－談話の織りなす世界－』 くろしお出版 This is a general introduction to **discourse analysis**, which includes chapters on **non-verbal communication, accommodation theory, register** and **style**.

Jenkins, J. (2003). *World Englishes: A resource book for students*. London: Routledge. This is a general introduction to the different types of English used around the world, including a section on **English as an international language**.

Kiesling, S.F. & Paulston, C.B. (Eds.) (2005). *Intercultural discourse and communication: The essential readings*. Oxford: Blackwell. This is a collection of journal articles and extracts from the most important research conducted in **intercultural communication** approached from the perspective of **discourse analysis**.

Nekvapil, J. & T. Sherman (Eds.) (2009). *Language management in contact situations: Perspectives from three continents*. Frankfurt am Main: Peter Lang. This book presents some of the latest research into **contact situations**. A variety of case studies are presented from Europe, Japan and Australia.

Paulston, C.B. & Tucker, G.R. (2003). *Sociolinguistics: The essential readings*. Oxford: Blackwell. This is a collection of journal articles and extracts from the most important research conducted in **sociolinguistics**.

Piller, I. (2011). *Intercultural communication: a critical approach*. Edinburgh: Edinburgh University Press. This book presents a criticism of psychology-based **intercultural communication** research and shows how **sociolinguistics** research can greatly improve our understanding of the field.

ネウストプニー、J.V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』 岩波新書

This is a general introduction to **intercultural contact situations** from the viewpoint of sociolinguistics.

ネウストプニー、J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店

This book introduces a new approach to language teaching that incorporates sociolinguistic theory and the concept of the **contact situation**.

ネウストプニー、J.V.、宮崎里司 (編) (2002) 『言語研究の方法—言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために—』 くろしお出版

This is a very clear introduction to the **methodology** used by researchers in sociolinguistics and discourse analysis. It includes a large section where actual researchers explain how they collected their own data.

Samovar, L.A & Porter, R.E. (Eds.) (2003). *Intercultural communication: A reader (10th edition)*. Belmont: Wadsworth Publishing Company. This is a very broad introduction to the field of **intercultural communication**, mainly from the position of social psychology although there are some sections that also deal with language.

Schiffrin, D., Tannen, D. & Hamilton, H. (Eds.). (2003). *The handbook of discourse analysis*. Oxford: Blackwell. This is a collection of articles written by many of the leading researchers in the field of **discourse analysis**. A very wide range of topics are covered, ranging from discourse and racism, the language of medicine and discourse and conflict, to discourse in language teaching.

Singh, I. & Stilwell Peccei, J. (Eds.) (2004). *Language, Society and Power (2nd edition)*. London, New York: Routledge. This book introduces some of the themes in **critical discourse analysis** by examining how language

is used in society and its relation to power. It addresses topics such as language and politics, language and the media, language and **gender** and language and **ethnicity**.

Spencer-Oatey, H. (Ed.) (2000). *Culturally speaking: Managing rapport through talk across cultures*. London: Continuum. This is a collection of articles that examine the language used in a variety of **intercultural contact situations**.

Tannen, D. (1990). *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*. New York: Ballantine. This is a very readable introduction to the topic of language and **gender**.

Wierzbicka, A. (2003). *Cross-cultural pragmatics (2nd edition)*. Berlin: Mouton de Gruyter. This book introduces some of the key concepts in **cross-cultural pragmatics** with examples from many different languages.



## 第3章 アメリカ研究

### アメリカ(史)研究との出会い

小塩和人

#### I. はじめに

「アメリカ合衆国（以下アメリカと略す）」の文化や生活習慣は、そこら中に溢れ、あまりに身近になったため、皮肉なことにかえって関心が薄れてしまった。また、メディアが誇張する否定的なイメージによって、嫌米・反米意識が広がっている。さらに、「アメリカ」と言われることがらが地域を越えて拡散することで、従来の手法では「見えなく」なっている。そのため、どの大学でもアメリカ研究（American Studies）を専攻しようとする学生数に陰りがみられる、という指摘がある。これは日本に限らずグローバルな現象だともいわれている。こうした一種の危機的状況の中で、アメリカ研究を専攻しようとする学生は、何と遭遇できるのだろう。まずは僕自身のアメリカ遭遇記から始めて、日本とアメリカ（学）そして上智大学とアメリカ研究の遭遇へと話しをもっていこう。

なぜ個人的な話から始めるのかについては、簡単な説明が必要だろう。大学は客観的研究の場だから、主観的な記述は不要だとする向きもあるかもしれない。しかし、いかに客観性の装いをまとっていても、以下で触れるように、研究成果は時代の影響を受けるものだ。アメリカ認識の主体である自分を客観化、相対化あるいは歴史化することで、他の認識と比較したり多様性に気づく契機となる。つまり、いかに個人的な経験であってもアメリカ研究の基盤になり、自分の立場がものの見方を限定してしまっている、と気づく必要性がある。それは、これを書いている僕だけではなく、これを読んでいる学生にとっても大事なことだ。なぜなら、僕自身が特定の立場や個人的偏見を排除しようとしても、おのずと限界があることをあ

らかじめ断っておきたいからだ。

なお、ここでいうアメリカ研究は、歴史学・文学や政治学・社会学・人類学・心理学・国際関係論など方法論が確立された既存の学問が寄り集まって形成されている「総合知」を意味している。その分、広い基盤と深い関心を同時に満たすことが求められ、研究者の負担は非常に大きいといわれる。「アメリカ地域研究とは、一つの学問分野では満足できないという意識をもったものが、さまざまな学問を渡り歩いてみるという、『総合的な知性構築』の試みなのである」とある先達は論じている。優れた知性と勉強意欲をもってこそ、努力が実った時の成果は大きい、とまずは強調しておきたい。

## Ⅱ. 私的な遭遇記

### (1) ホワイトアルバム

それは1971年11月だったはずだから、僕が杉並区の中学校一年生の時だ。小遣いを貯めて悪友M君と一緒に当時渋谷にあった「輸入版専門店（海外でリリースされたばかりのレコードを売る店舗）」へ向かった。お目当てはシカゴが前月にアメリカでリリースしたばかりの4枚組LP『シカゴ・アット・カーネギー・ホール』。前年4月5日から10日にわたってニューヨークにあるカーネギー・ホールで行なったライブで収録された37曲をフィーチャーした大部なものだった。

別名「ホワイトアルバム」といわれるシックな作りで、ベージュ色のジャケットに例の「Chicago」と書かれたロゴが入っている。やっと手に入れた興奮で体が震えていた。これだけでも十分だが、セピア色をした巨大なカーネギー・ホールの写真（84×56センチつまり33×22インチ）、メンバー全員（左からロバート・ラム、ピーター・セテラ、リー・ロフネン、テリー・カス、ジェームス・パンコー、ダニー・セラフィン、そしてウォーター・パラザイダー）が長髪髭面で写っている白黒ポスター、ライブステージの写真集、そしてもう一つおもしろいものが入っていた。

ロゴと同じ癖のある筆記体で“The Return of the Power of the Vote”と表

紙に記された二つ折りの一覧表。開いてみるとアルファベット順にアラバマからワイオミングまで各州の選挙人登録法が簡便に解説されている。左のコラムから順に、州名、登録締切日、予備選挙の日程、本選挙の日程、登録に必要な居住期間、18歳になっている必要がある期限、不在者投票の可否、問い合わせ先が並んでいる。なぜロックが選挙と関わるのだろうか？ M君と二人でいぶかしがったことをつい昨日のように思い出す。さらに、写真集の最後の頁に “It Better End Soon – 4<sup>th</sup> Movement – (Preach)” の歌詞が書かれていた。

## (2) アメリカとの出会い

まだ英語を学び始めたばかりの中一の二人が辞書を片手に暗号解読に挑んだ。“If we want to have the whole world right / We got to put up a fight / Can’t go around killing – and contradicting ourselves / We gotta do it right – within the system” 何のことだかさっぱり分からない。完敗だ。それでも頑張った。“End this war as fast as we can / End this war, end this war, end all wars” これはヴェトナム戦争反戦メッセージだということがかろうじて理解できた。それは近所に安保反対で国会に突入しようとした親しい人が住んでいたからかもしれない。今振り返ってみると、これが僕のアメリカとの最初の出会だった。かなり衝撃的だ。

シカゴというバンドについては、あえてここで詳細する必要がないかもしれない。そこで、「寄り道」は簡単にすまそう。1967年、パラザイダーがデュポール大学の学友ロフネン (tp) とパンコー (tb) を誘ってクラブ回りをしたのが始まり。その後、カス (gt)、ラム (pf)、セラフィン (dr)、そしてセテラ (bs) が加わってビッグ・シングと名乗り、ビートルズをブラスサウンドでアレンジしていた。彼らをコロンビアに売り込んだのが、これまたデュポール出身のプロデューサー、ジェームス・ガルシオだった。

ちょうどブラッド、スウェット&ティアーズに注目が集まっていたことも助けになり、シカゴ・トランジット・オーソリティと改名した彼らは1969年に待望のデビューアルバムをリリース。ハードロック、R&B、ジャズがホーンセクションとミックスした新しいサウンドは、当時まだ実験的

段階だったFM放送を通じて全米に流れた。翌年1月に『シカゴ（二枚目という意味でChicago IIともいわれるアルバム）』をリリースした時には、シカゴ市長リチャード・J・デリー（シカゴが歌った1968年8月29日「流血の日（シカゴ市で行なわれた民主党大会）」の一立役者）が、彼らの名前がシカゴ市交通局と同名であることを理由に訴訟を起し、さらに有名になった。「ホワイトアルバム」が1960年代を理解するのに不可欠な一次史料だ、ということはアメリカ史を学んでからわかった。

### (3) 新旧世界

さて、幼少期をドイツのマールブルクで過ごしたため「第一言語」がドイツ語になって杉並区の小学校に戻ってきた「変ジャパ」な僕の意識は、家族の志向性も手伝って、常に旧世界を向いていた。バイオリンを弾いたし、聴く音楽はクラシック、おめかしして出かける食事は西荻窪のこけし屋だった。だからこそ、ロックとくに反体制音楽との出会いは、その分衝撃が大きかった。したがって、中学校に入ってまず手にした楽器はトランペットだった（本当はパンコーに憧れていたからトロンボーンが吹きたかったのだけれど）。弦楽器に慣れきった身体に、金管の攻撃的な音が僕の発達段階ともあいまってピツタリきた。精神的には、旧大陸に関心を寄せる両親に対して新大陸に目を向けた僕がいたのも、ある意味では必然かもしれない。あるいは明治時代後期、社会福祉を学ぶためボストンへ渡った曾祖父の遺伝子か。

そんな僕が、直接アメリカを体験したのは都立高校一年の夏、マサチューセッツ州ケープコッドでのサマーキャンプからプリマス・ロック見物に出かけて「何だ、この岩は」といぶかしがったのが最初。ちょうどこの頃、部活の「特訓」に反旗を翻した仲間と一緒にアメリカン・フットボール同好会を創設した。それらの体験が高じて大学でアメリカ史を専攻するようになったといっても過言ではないかもしれない。（ちなみに、1年次に履修した米国史概説で書いた最初のレポートがシカゴ市の福祉施設についてだったし、卒論は政治史だった。）こうしてヨーロッパを強烈に意識しつつ変化してきたのが、僕自身であり、また学問としてのアメリカ（史）研

究だと考えてよいと思う。

たとえば、独立後19世紀のアメリカにはヨーロッパ精神からの独立願望があったし、第一次大戦後にはヨーロッパに失望したアメリカ(文)学者のイギリス(文)学からの独立機運があった。これらが、アメリカ文化の固有性や例外性を学術的に強調することにつながった。1929年にイエール大学で歴史学者と文学者が共同して「アメリカ文明」の授業を提供し、その後はジョージ・ワシントン大学やハーヴァード大学にも同様の広がりを見た。そして、1950年代に「神話と象徴」つまりアメリカ人が信じている神話、民話、ヒーローなどが、ヨーロッパとは異なる性格をもったアメリカ的精神を象徴しているというパラダイムを打ち立てるに至る。時あたかも冷戦下の米ソ対立が最も激しく、アメリカ国民が一致団結する必要性が叫ばれていた。

### Ⅲ. アメリカ(史)研究の特徴

#### (1) 二つの歴史

「アメリカ研究」という学問領域は、1930年代に萌芽し50年代にミラーヤスミスを擁する「黄金時代」を迎えたのに対して、その中核を担うアメリカ〈史〉研究は、それより数百年古い。たとえば、アメリカに歴史意識を持ち込んだのは、17世紀ニューイングランドのピューリタンたちだといわれている。彼らはあれこれ記録することに力を注いだが、なかでもウィリアム・ブラッドフォードの『プリマス・プランテーション』やコトン・マザーの『アメリカにおけるキリストの偉大なる御業』は、すぐれた歴史叙述として評価を受けている。その特徴は、彼らが自分たちの営みを神に選ばれた者の行為だと信じたからこそ、その記録を正確に伝えようとする義務感だった。このような事実を尊重し、忠実にこれを伝えようとする伝統は、その後ジョージ・バンクロフトの『合衆国史』やフランシス・パークマンの『北米におけるフランスとイギリス』といった大作へと継承された。

文学的といってもよい雄大なアメリカ史の叙述が展開していた19世紀半

ば、旧大陸から新しい科学思想や教育制度が導入されて、歴史叙述も大学院で専門的な訓練を受けた研究者による専門的な仕事に変化していった。そして、19世紀末には、（ヒーローが主人公となる）文学的歴史と（制度や社会的構造に目を向ける）科学的歴史が渾然一体となった。ヘンリー・アダムスの『合衆国史』が一例だろう。彼の弟ブルックス・アダムスは『文明と衰退の法則』において、文明の推進力はもはやイギリスから大西洋を渡ってアメリカへと進んできた、と高らかに宣言した。つまり、アメリカは政治経済的にイギリスから独立するだけではなく、精神文化的にも旧大陸からの脱却を意識していたことになる。こうした19世紀後半の歴史家は第一世代と呼ばれている。

## （2）対立・抗争史観

それに対して、世紀転換期に登場したのが第二世代。彼らは、社会が農業中心から工業中心へと急速に変化することで、社会的格差をはじめとする資本主義の弊害が表面化した時代に生きた。なかでも有名なのがフレデリック・J・ターナーとチャールズ・A・ビアードの二人。まず1890年に国勢調査局が「フロンティアの消滅」を宣言した3年後に「アメリカ史におけるフロンティアの意義」という論文を発表したターナーは、文明が旧世界から新世界へと段階的に進化してきたと考えて、ヨーロッパの古い文明は、アメリカのフロンティア（辺境）において原始の状態に一度引き戻されて、単純だけれども新しい生命を得た、と解釈した。

一方のビアードは、政治的論争の背後には、経済的利害が存在すると実証しようとし『合衆国憲法の経済的解釈』や『ジェファソニアン・デモクラシーの経済的諸起源』を刊行した。合衆国憲法は、憲法制定会議の代表者たちが自己利益を擁護する目的で定めた文書とみなされ、ジェファソンの民主主義は、フェデラリストから保守的プランテーション経営者へと支配権が移行したにすぎない、と断じられた。社会的対立・抗争や歴史的断続性を強調したターナーやビアードの学説は、批判や修正が盛んになされたが、後世の研究者に大きな影響を及ぼした。

### (3) 第三世代

第二次大戦後に登場する第三世代は、社会的同質性や歴史的連続性に目を向けた。彼らはアメリカをヨーロッパと比較することで新たに解釈しようと試みた。つまり、一見複雑に見えるアメリカも、ヨーロッパ諸国のように革命的動乱を経験していないし、そもそもアメリカは封建制をもたずに出発した社会なのだから、実は同質的なのだ、と。たとえば『アメリカ自由主義の伝統』を著したルイス・ハーツによれば、アメリカは最初からジョン・ロックが主張したような自由主義の伝統だけを保持してきた特異な歴史をもっている。ここで注目すべきは、ハーツが自由主義は時代遅れとなり、反動的体質と異質な社会的要素を排除しようとする排外主義を育てた、と批判的な眼をもっていた点だろう。

第三世代が生きた「豊かな」1950年代は60年代に入ると、貧困・人種問題・公民権運動・女性解放運動・ヴェトナム反戦運動といった社会情勢によって歴史家の意識も変化した。すなわち巨大企業・巨大労組・巨大政府の均衡によって硬直化した社会体制を問題視し、アメリカの対外膨張政策が反省の対象となった。さらに、これまで歴史家によってあまり注目を浴びてこなかった社会的マイノリティにも関心が集まるようになった。それは、伝統的な「上から」の歴史ではなく、女性、少数民族、庶民を研究対象にした「下から」の歴史が生まれたことを意味していた。

## IV. 日本とアメリカ学の遭遇

### (1) 開国から戦後へ

こうしたアメリカ史研究の潮流は、アメリカ研究との共通点が多い。そもそも日本において本格的なアメリカ研究が始まるのは昭和に入ってからだが、幕末の開国期以来、日本人は絶えずアメリカの衝撃を受けて、刻々と変化するアメリカ観を呈してきた。たとえば、福沢諭吉の『西洋事情』は独立宣言全文を邦訳することで「共和・自由・平等」の三大理念を理解しようと努めた。確かに文明開化の指導者たちはアメリカを称賛していたが、日本の模範となるにはあまりにも「特殊」だ、と捉えていた。つまり、「普

遍」は旧世界だった。また、自由民権運動の馬場辰猪、キリスト教の内村鑑三、社会運動の安部磯雄などが理想を求めて渡米するが、現実との落差に失望し反発し、やがて反米感情を持つに至る。亀井俊介が「拝米と排米」と呼んだこの思考回路は今もって私たちにも継承されている。

ところで、日本においては「米国研究」という表現が、アメリカよりも早く1913年に正岡猶一『米国及米国人』の中で使われた。1918年にはアメリカの銀行家A・ヘボンの寄附講座として東京帝国大学法学部教授高木八尺が担当する「米国憲法、歴史及外交」が開設され、学問分野としてのアメリカ研究が姿を現した。翌1919年には新渡戸稲造が「米国研究の急務」を訴えている。彼らに共通してみられたのは、斎藤眞が指摘するとおり、近代化を進めながら世界列強入りを目指す日本の二つの眼差し、つまり「範例」としての民主国家アメリカ、そして「強敵」としての大国アメリカが目映っていた点である。

第二次世界大戦後、アメリカのアメリカ学会よりも4年早く日本のアメリカ学会が創設された。その目的は、アメリカの知識を広めて日米友好に貢献すること、アメリカの進んだ人文・社会科学を吸収することであった。この時期以降、日本のアメリカ研究者には、アメリカを総体としてとらえつつ民主主義発展史とみる視点と、非民主化と海外支配の歴史とみる視点とが並存した。しかし、1970年代から日米両国の距離が近くなった結果として、日本人としてアメリカの全体像をつかもうとする意欲が後退し、興味ある社会・文化の現象だけを追う傾向が強まった。つまり、日本のアメリカ化が進むと、戦前のような近代化政策という動機（あるいは範例・強敵という認識）から離れて、アメリカをより細分化された学問研究の対象とすることができた、といわれている。それが今、再び問題視されている。なぜなら、日本のアメリカ研究が象牙の塔に閉じこもり、現実問題の解決に直接関わっていない、とする批判があるからだ。

## (2) 「境界線」

何はともあれ今はアメリカで高等教育を受ける日本人が増えた結果、アメリカ国内のアメリカ研究者と同様の資料を使い、同様の視点で、同様の



学会で発表する機会が多くなった。これを肯定するか否かは判断が分かれる。「日本人研究者がアメリカでアメリカ人研究者と同水準の研究を進めれば進めるほど、日本人としての視点は失われる」と嘆く声が聞こえてくる。「国境を越えた視点からのアメリカ研究が求められている現在、かえってアメリカ人研究者と変わらない視点に基づいた日本人の研究者が多くなってしまおうという皮肉である」と続く。

しかし、よく考えてみれば、ここでいう「アメリカ(人)」「日本(人)」は決して一様ではないはずで、従って上のような議論はかえって「国境」に縛られた考え方ということもできないだろうか。むしろ、アメリカ人研究者と成果を共有しつつ、たまたま日本的発想があればそれを持ち続ける、ということによいのではなかろうか。そうすれば、アメリカか日本かという「国境」に縛られた二律背反的な認識の枠組みを越えていくことができるのではないだろうか。

もちろん、「学間に国境はない」という表現はナイーブだとする指摘もある。それは、世界がグローバリズムという言葉で語られ、アメリカ研究がインターナショナルリゼーションという標語を採用している今、ポスト・ナショナリズムという言葉が皮肉な結果を生んでいるからだ、という。たとえばフレデリック・ビュエルは「最近のアメリカ文化は、反政府的なポスト＝ナショナリズムによってというより、新種の文化的ナショナリズム—つまりポスト＝ナショナルな環境にふさわしい形の文化的ナショナリズム—の発明によって特徴づけられている」と批判している。それに呼応して、小林剛はフレデリック・ジェームソンの「政治的無意識」を引きながら、「アメリカン・スタディーズの再検討」を促している。要するに、アメリカ研究は、その起源を「封じ込め」が横行した保守的な1950年代ではなく、過激思想が勃興した1930年代に求められるのだから、批判精神を根底に有していることを忘れるな、ということだ。そうすると、たとえばシカゴの“within the system”(つまり現行の選挙制度の中で異議申し立てをしよう)という一節は、きわめて保守的な思想の表れだ、ということになり、ロック＝反体制と認識する僕のナイーブさを暴露された気分になってしまう。

## V. 上智大学とアメリカ研究

### (1) アメリカ研究（所）の創設

さて、東京タワーが建った1958年に上智大学外国語学部が発足した。その当初は、外国語の習得に重点を置いていた。しかし、アメリカ研究の科目としてアメリカ文化史が最初から提供されていたことは注目に値する。それが1970年代になると、アメリカ文化、社会、経済などの授業を強化し、1985年にはアメリカ研究の核となる科目群が設けられた。そして1992年度からは、英語学科にアメリカ研究を始め英語圏研究、言語学、国際関係論、アジア研究の五「専攻」領域が設けられ、学生は専攻の一つとしてアメリカ研究を選択できるようになった。

また、「アメリカ・カナダ地域の歴史、政治、経済、社会文化等の諸問題に関する研究活動を行いその成果を教育の場に還元するとともに、当該地域についての理解と知識の普及に貢献することを目的」とする上智大学アメリカ・カナダ研究所が1987年に設立されたことは、アメリカ研究の教育上強みとなっている。そもそも文学部が中心となって主催していた「カナダセンター」と、外国語学部のアメリカ関係の図書コレクションを統合することによって、より総合的な北アメリカの研究と教育ができるようになるという大学の期待があった。そして、文学部英文学科の秋山健教授と外国語学部英語学科の松尾式之教授が創設初期の歩みを支えた。現在の蔵書は約1万5千冊、雑誌が200種類、加えて年一回の機関誌『アメリカ・カナダ研究』を刊行し、共同研究・講演会・教育補助も行い、所員は諸学部に所属する教員が兼任している。

### (2) カリキュラム

ところで、上智大学内ではさまざまなアメリカに関する授業が提供されている。外国語学部の英語学科はもちろんのこと、国際関係副専攻、さらに文学部の英文学科、史学科、法学部や経済学部などで展開されている科目群を合計すれば50科目近くなる。これらの中から自由に選んで、規定の条件を満たすことで卒業資格を得ることができる。ただし、多様な科目を

漫然と履修するだけでは、専攻にならないので、本格的にアメリカ研究を履修しようとするには、モデルが必要かもしれない。もちろん各学生の背景や必要性に応じて多少の違いはあろうが、以下のような流れが考えられよう。

#### [1年次]

一般的なアメリカ研究への導入：アメリカ研究入門など（グループ指定の「英米文化入門」があるが担当の教員によって必ずしもアメリカだけを取り上げるわけではない）

#### [2年次]

基本的なアメリカ研究の知識：アメリカ社会入門、米国史概説、英文講読（アメリカ研究・アメリカ社会）など

#### [3・4年次]

専門的なアメリカ研究の展開：米国現代文学、アメリカ音楽史、太平洋日系移民史、アメリカ女性史、アメリカ政治論、米国思想史、現代アメリカ政治論、アメリカ演劇・映画論など

特定分野の調査・研究：演習（米社会史・アメリカメディアなど）〈3－4年次の継続履修が可能〉

#### [4年次]

特定分野の調査・研究：卒業論文など

なお、英文学科やその他の学科の科目を履修して卒業単位に勘定できるが、「専門分野履修証明書」を希望する学生の場合、これらの単位が英語学科の専門分野科目としては認められない。履修証明書を取得したい学生は、必ず3・4年次選択科目のアメリカ研究科目も含め16単位＋演習（4単位）＋卒業研究（6単位）を履修しなければならない。但し、履修証明書を望まない学生は、卒業のために必要な科目と単位数を満たせばよい。

### (3) 残された課題

確かに上智大学全体はアメリカよりもヨーロッパを向いている。また、受験生だけではなく社会一般も外国語学部を語学教育の機関と認識する傾向が強い。さらに、アメリカ研究を専門とする教員が不足しており、大学院にアメリカ研究専攻がない。したがって、アメリカ研究を大学の「地域研究」全体の中にどう位置づけていくかは将来の課題だろう。それでも、英語学科のアメリカ研究専攻を卒業したOG・OBが日本国内はいうに及ばず海外に飛翔している。

こうした卒業生に共通しているのは、在学中にアメリカ研究の基礎を固め、英語で卒業論文を執筆していることだ。なぜなら、学問の基礎固めが終わっていること、英語情報を受信し整理し発信する力が備わっていることは、英語で書いた論文でこそ示すことができるからだ。そうしてこそ、明るい未来への門戸は大きく開かれる。たとえば、アメリカの大学院に進学したいと考えた時に最も信頼できる相談相手は、本学から歩いて行ける日米教育委員会（千代田区永田町 2-14-2 山王グラントビル207号 03-3580-3231 <http://www.fulbright.jp/>）だろう。

先輩たちは流暢な英語を操ることよりも、はるかに大事なことを大学で学んで巣立っている。それは、論理的な英語が無理なく書けるよう、アウトラインの書き方から文章全体を体系的に組み立てる技法、さらには自分の考えを他人に分かりやすく提示するといった「知の技法」を総合的に学んだことを意味している。英語を駆使しながら世界の情報を正確にそして網羅的に集める技法と共に、論理的な思考能力や柔軟な発想を身につけることは、決して知識や情報の詰め込みではない「知の技法」を獲得することなのだ。

## VI. おわりに

冒頭でも述べた通り、アメリカ研究に限らず大学で論じられる事柄は、絶対的真理つまり「至論」というよりは「試論」だと肝に銘ずるべきだろう。高校までの教育はどちらかといえば「知の受容者」となることを優先してきた。しかし、大学において目指すのは「知の創造者」になるための

批判的思考力を身につけることだ。別の言い方をすれば、大学で学ぶ事柄は、試論であり至論ではないという意味で、〈学問の限界〉を示している。つまり、アメリカ研究であるなしにかかわらず、受信した情報に対して学生は疑問を持ち、対案を提起できるようになってほしい。

これからもアメリカの世界的地位や日米関係の重要性は存続していくだろう。したがって、よほど日本のナショナリズムが反動的にならない限り、日本のアメリカ研究の重要性も極端に減少するとは考え難い。だからこそ、量的に多いが質的には偏ったアメリカ情報が入り続けている現状に対して、正確で魅力的な教育を行なうことが大切になる。そうしてこそ、日本の大学におけるアメリカ研究の将来に関して悲観的にも楽観的にもならず、冷静に使命を全うすることが可能なのだと信じたい。

最後に、アメリカ(史)研究は非常に多くの蓄積がある。そこで、研究文献も多岐に渡る。それでもアメリカ学を始めようとする人には、一通りの紹介をしておかねばなるまい。決して包括・網羅的とはいえないが以下に挙げるものは、それぞれが掲載している参考文献を含めて「アメリカ事始」にふさわしい見識を与えてくれるだろう。そこに素敵な出会いがあることを祈りつつ。

## (1) アメリカ研究

### 〈本格的なアメリカ研究への案内書〉

阿部齊、五十嵐武士編『アメリカ研究案内』東京大学出版会、1998年  
五十嵐武士、油井大三郎編『アメリカ研究入門・第3版』東京大学出版会、2003年

斎藤眞、嘉治元郎編『アメリカ研究入門』東京大学出版会、1969年  
本間長世、有賀貞編『アメリカ研究入門・第2版』東京大学出版会、1980年

『入門』第1から3版を読み比べれば、日本のアメリカ研究の歩みを追体験できる》

### 〈アメリカ研究者の共同作業による概論〉

小塩和人、岸上伸啓編『アメリカ・カナダ』朝倉書店、2006年

小田隆裕、柏木博・巽孝之・能登路雅子・松尾弑之・吉見俊哉編『事典 現代のアメリカ』大修館書店、2004年  
『アメリカ古典文庫』全23巻 研究社、1974－78年  
『総合研究 アメリカ』全7巻 研究社、1976－77年  
『文明としてのアメリカ』全5巻 日本経済新聞社、1989年  
『変貌するアメリカ太平洋世界』全6巻 彩流社、2004－05年  
『アメリカ文化を読む〈移動〉〈風景〉〈都市〉』全3巻 ミネルヴァ書房、2011年

〈読みやすいアメリカ研究の概説書〉

明石紀雄、川島浩平編『現代アメリカ社会を知るための60章』明石書店、1998年  
明石紀雄監修『21世紀アメリカ社会を知るための67章』明石書店、2002年  
和泉真澄、趙無名編『アメリカ研究の理論と実践』世界思想社、2007年  
斎藤眞、大西直樹編『今、アメリカは』南雲堂、1994年  
斎藤眞『アメリカとは何か』平凡社、1995年  
古矢旬『アメリカ』岩波新書、2005年  
古矢旬、遠藤泰生編『新版 アメリカ学入門』南雲堂、2004年  
松尾弑之『不思議の国アメリカ』講談社、2001年  
松尾弑之『アメリカという物語』勉誠出版、2004年  
松尾弑之、丹野眞編『アメリカ研究』大修館書店、1984年  
渡辺靖編『現代アメリカ』有斐閣、2010年  
矢口祐人、吉原真里編『現代アメリカのキーワード』中公新書、2006年  
油井大三郎、遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ』東京大学出版会、1999年  
油井大三郎、遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ』東京大学出版会、2003年

〈日本における最新のアメリカ研究集大成〉

- 秋元英一、小塩和人編『豊かさと環境』ミネルヴァ書房、2006年  
 荒このみ、生井英考編『文化の受容と変貌』ミネルヴァ書房、2007年  
 上杉忍、巽孝之編『アメリカの文明と自画像』ミネルヴァ書房、2006年  
 紀平英作、油井大三郎編『グローバリゼーションと帝国』ミネルヴァ書房、2006年  
 久保文明、有賀夏紀編『個人と国家のあいだ』ミネルヴァ書房、2007年  
 古矢旬、山田史郎編『権力と暴力』ミネルヴァ書房、2007年

〈「黄金時代」のアメリカ研究〉

- H・スミス『ヴァージンランド』研究社、1971年  
 A・トラクテンバーク『ブルックリン橋』研究社、1977年  
 L・ハーツ『アメリカ自由主義の伝統』講談社、1994年  
 R・ホフスタッター『改革の時代』みすず書房、1967年  
 D・ポッター『アメリカの富と国民性』国際文化研究所、1957年  
 L・マークス『楽園と機械文明』研究社、1972年  
 P・ミラー『ウィルダネスへの使命』英宝社、2002年

(2) アメリカ史研究

〈もっとも入手しやすいアメリカ史の入門書〉

- 有賀夏紀『アメリカの20世紀』中公新書、2002年  
 有賀夏紀、油井大三郎編『アメリカの歴史』有斐閣、2003年  
 有賀夏紀、紀平英作、油井大三郎編『アメリカ史研究入門』山川出版社、2009年

〈過去から現代に至るアメリカ史資料集〉

- アメリカ学会訳編『原典アメリカ史』岩波書店、1950－2006年  
 有賀貞、大下尚一、志邨晃佑、平野孝編『史料が語るアメリカ』山川出版社、1989年  
 亀井俊介、鈴木健次監修『史料で読むアメリカ文化史』東京大学出版会、

2005－06年

斎藤眞、久保文明編『アメリカ政治外交史教材 第2版』東京大学出版会、2008年

有賀貞『アメリカ ヒストリカル・ガイド』山川出版社、2004年

有賀貞、大下尚一編『概説アメリカ史・新版』有斐閣、1990年

有賀貞、大下尚一、志邨晃佑、平野孝編『アメリカ史』山川出版社、

1993－93年

紀平英作編『アメリカ史』山川出版社、1999年

清水博編『アメリカ史・増補改訂版』山川出版社、1986年

樋口映美、中條献編『歴史のなかの「アメリカ」』彩流社、2006年

長沼秀世、新川健三郎『アメリカ現代史』岩波書店、1991年

野村達朗編『アメリカ合衆国の歴史』ミネルヴァ書房、1998年

### (3) 分野別 科学・教育

#### 〈文学〉

秋山健監修『アメリカの嘆き』松柏社、1999年

飯野友幸『アメリカの現代詩』彩流社、1994年

一之瀬和夫、外岡尚美編『境界を越えるアメリカ演劇』ミネルヴァ書房、2001年

コロンビア米文学史翻訳刊行委員会訳『コロンビア米文学史』山口書店、1997年

佐伯彰一『日米関係のなかの文学』文芸春秋、1984年

巽孝之『アメリカ文学史』慶應義塾大学出版会、2003年

巽孝之、渡部桃子編『物語のゆらめき』南雲堂、1998年

#### 〈思想・宗教〉

井門富士夫編『アメリカの宗教』弘文堂、1992年

大西直樹『ニューイングランドの宗教と社会』彩流社、1997年

大類久恵『アメリカの中のイスラーム』子どもの未来社、2006年

本間長世『思想としてのアメリカ』中央公論社、1996年



- 増井志津代『植民地時代アメリカの宗教思想』上智大学出版、2006年  
 森孝一『宗教からよむ「アメリカ」』講談社、1996年  
 森本あんり『アメリカ・キリスト教史』新教出版社、2006年

# 〈人種・民族〉

- 明石紀雄、飯野正子『エスニック・アメリカ 第3新版』有斐閣、2011年  
 阿部珠理『アメリカ先住民』角川書店、2005年  
 飯野正子『もう一つの日米関係史』有斐閣、2000年  
 五十嵐武士編『アメリカの多民族体制』東京大学出版会、2000年  
 内田綾子『アメリカ先住民の現代史』名古屋大学出版会、2008年  
 鎌田遵『ネイティブ・アメリカン』岩波新書、2009年  
 R・タカキ『多文化社会アメリカの歴史』明石書店、1995年  
 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ』東京大学出版会、1994年  
 中條献『歴史のなかの人種』北樹出版、2004年  
 野村達朗『「民族」で読むアメリカ』講談社、1992年  
 藤川隆男編『白人とは何か』刀水書房、2005年  
 D・ホリンガー『ポストエスニック・アメリカ』明石書店、2002年  
 D・ローディガー『アメリカにおける白人意識の構築』明石書店、2006年

# 〈ジェンダー・家族〉

- 有賀夏紀『アメリカ・フェミニズムの社会史』勁草書房、1988年  
 有賀夏紀、小檜山ルイ編『アメリカ・ジェンダー史研究入門』青木書店、  
 2010年  
 S・エヴァンス『アメリカの女性の歴史』明石書店、1997年  
 緒方房子『アメリカの中絶問題』明石書店、2006年  
 荻野美穂『中絶論争とアメリカ社会』岩波書店、2001年  
 L・カーバー、J・ドゥハート編『ウィメンズ・アメリカ 資料編』ド  
 メス出版、2000年  
 L・カーバー、J・ドゥハート編『ウィメンズ・アメリカ 論文編』ド  
 メス出版、2002年

高橋裕子『津田梅子の社会史』玉川大学出版部、2002年  
E・デュボイス『女性の目から見たアメリカ史』明石書店、2009年  
豊田真穂『占領下の女性労働改革』勁草書房、2006年  
藤本茂生『アメリカ史の中の子ども』彩流社、2002年  
渡辺和子編『アメリカ研究とジェンダー』世界思想社、1997年

〈政治外交・法〉

阿部斉編『アメリカの政治』弘文堂、1992年  
浅香吉幹『現代アメリカの司法』東京大学出版会、1999年  
五十嵐武士『覇権国アメリカの再編成』東京大学出版会、2001年  
猪口孝、P・ブレビッチ、C・プリントン編『冷戦後の日米関係』NTT  
出版、1997年  
入江昭、R・ワンプラー編『日米戦後関係史』講談社インターナショナル、  
2001年  
大津留（北川）智恵子、大芝亮編『アメリカが語る民主主義』ミネルヴァ  
書房、2000年  
大津留（北川）智恵子、大芝亮編『アメリカのナショナリズムと市民像』  
ミネルヴァ書房、2003年  
亀井俊介『アメリカ文化と日本』岩波書店、2000年  
川田稔、伊藤之雄編『20世紀日米関係と東アジア』風媒社、2002年  
久保文明編『アメリカの政治』弘文堂、2005年  
酒井啓子『イラクとアメリカ』岩波新書、2002年  
佐々木卓也編『戦後アメリカ外交史』有斐閣、2002年  
砂田一郎『新版 現代アメリカ政治』芦書房、1999年  
砂田一郎『アメリカ大統領の権力』中公新書、2004年  
J・ダワー『敗北を抱きしめて』岩波書店、2001年  
J・ダワー『容赦なき戦争』平凡社、2001年  
J・ナイ『ソフト・パワー』日本経済新聞社、2004年  
西崎文子『アメリカ冷戦政策と国連』東京大学出版会、1992年  
西崎文子『アメリカ外交とは何か』岩波新書、2004年

M・ハート、A・ネグリ『帝国』以文社、2003年  
 樋口範雄『はじめてのアメリカ法』有斐閣、2010年  
 藤倉皓一郎ほか編『英米判例百選』有斐閣、1996年  
 藤原帰一『デモクラシーの帝国』岩波新書、2002年  
 古矢旬『アメリカニズム』東京大学出版会、2002年  
 細谷千博監修『日本とアメリカ』ジャパン・タイムズ、2001年  
 細谷千博編『日米関係通史』東京大学出版会、1995年  
 松井茂記『アメリカ憲法入門 第6版』有斐閣、2009年  
 松田武編『現代アメリカの外交』ミネルヴァ書房、2005年  
 松尾弑之『大統領の英語』講談社、2002年  
 村田晃嗣『アメリカ外交』講談社、2005年  
 油井大三郎『日米戦争観の相克』岩波書店、1995年  
 油井大三郎『好戦の共和国アメリカ』岩波新書、2008年  
 吉原欽一編『現代アメリカの政治権力構造』日本評論社、2000年  
 S・リプセット『アメリカ例外論』明石書店、1999年  
 S・ヴォーゲル編『対立か協調か』中央公論新社、2002年

# 〈経済〉

秋元英一『ニューディールとアメリカ資本主義』東京大学出版会、  
 1989年  
 秋元英一『アメリカ経済の歴史』東京大学出版会、1995年  
 岡田泰男『アメリカ経済史』慶應義塾大学出版会、2000年  
 岡田泰男、須藤功編『アメリカ経済史の新潮流』慶應義塾大学出版会、  
 2003年  
 嘉治元郎編『アメリカの経済』弘文堂、1992年  
 佐々木潤『一体化する北米経済』日本貿易振興会、1994年  
 塩見治人、堀一郎編『日米関係経営史』名古屋大学出版会、1998年  
 渋谷博史『アメリカ・モデル経済社会シリーズ』全10巻 昭和堂、  
 2010年－12年  
 常松洋、松本悠子編『消費とアメリカ社会』山川出版社、2005年

中戸祐夫『日米通商摩擦の政治経済学』ミネルヴァ書房、2003年

〈地理・環境〉

石山徳子『米国先住民族と核廃棄物』明石書店、2004年

井出義光編『アメリカの地域』弘文堂、1992年

岡島成行『アメリカの環境保護運動』岩波新書、1990年

岡田泰男編『アメリカ地域発達史』有斐閣、1987年

太田伊久雄『アメリカ国有林管理の史的展開』京都大学学術出版会、  
2000年

小塩和人『水の環境史』玉川大学出版部、2003年

D・オースター『ネイチャーズ・エコノミー』リプロポート、1989年

R・カーソン『沈黙の春』新潮社、2001年

鎌田遵『「辺境」の抵抗』御茶の水書房、2006年

上岡克己『アメリカの国立公園』築地書館、2002年

久保文明『現代アメリカ政治と公共利益』東京大学出版会、1997年

W・クロノン『変貌する大地』勁草書房、1995年

諏訪雄三『アメリカは環境に優しいのか』新評社、1996年

Y・トゥアン『トポフィリア』せりか書房、1992年

R・ナッシュ編『アメリカの環境主義』同友館、2004年

世一良幸『米軍基地と環境問題』幻冬舎、2010年

〈科学・教育〉

喜多千草『インターネットの思想史』青土社、2003年

喜多村和之編『アメリカの教育』弘文堂、1992年

坂本辰朗『アメリカ大学史とジェンダー』東信堂、2002年

世界教育史研究会編『アメリカ教育史Ⅰ・Ⅱ』講談社、1975年

橋本毅彦『〈標準〉の哲学』講談社、2002年

R・フレデリック『アメリカ大学史』玉川大学出版部、2003年

D・ラヴィッチ『学校改革抗争の100年』東信堂、2008年

## 〈文化・社会〉

生井英考『空の帝国』講談社、2006年

亀井俊介編『アメリカ文化史入門』昭和堂、2006年

N・キャンベル、A・キーン『アメリカン・カルチュラル・スタディーズ 増補版』萌書房、2002年

佐藤良明『J-POP進化論』平凡社、1999年

猿谷要編『アメリカの社会』弘文堂、1992年

A・シュレジンガー『アメリカの分裂』岩波書店、1992年

上智大学アメリカ・カナダ研究所編『アメリカ文化の原点と伝統』彩流社、1993年

R・スクラー『アメリカ映画の文化史』講談社、1995年

J・トムリンソン『文化帝国主義』青土社、1997年

平野共余子『天皇と接吻』草思社、1998年

E・J・ブレークリー、M・G・スナイダー『ゲーテッド・コミュニティ』集文社、2004年

本間千枝子、有賀夏紀『世界の食文化 アメリカ』農山漁村文化協会、2004年

松尾弑之、大西健夫編『アメリカの社会』早稲田大学出版部、1994年

瀧田佳子『アメリカン・ライフへのまなざし』東京大学出版会、2000年

辻内鏡人『現代アメリカの政治文化』ミネルヴァ書房、2001年

陸井三郎『ハリウッドとマッカーシズム』筑摩書房、1990年

渡辺靖『アフター・アメリカ』慶應義塾大学出版会、2004年

## (4) インターネット

連邦議会図書館 <http://www.loc.gov/>

政府関連ポータル <http://www.firstgov.gov/>

法律関連 <http://www.law.cornell.edu/>

統計資料関係 <http://fedstats.gov/> <http://www.gallup.com/>

報道メディア <http://newslink.org/>

米国アメリカ学会 <http://www.theasa.net/>  
アメリカ歴史家協会 <http://www.oah.org/>  
国際アメリカ研究学会 <http://www.iasaweb.org/>  
日本アメリカ学会 <http://www.jaas.gr.jp/>  
日本アメリカ史学会 <http://www.jaah.jp/>  
アメリカ経済史学会 <http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~sakade/aeha/>  
日本英文学会 <http://www.elsj.org/>  
日本アメリカ文学会 <http://www.soc.nii.ac.jp/alsj/>  
中・四国アメリカ文学会 <http://www.chushi-als.org/>  
アジア系アメリカ文学研究会 <http://www013.upp.so-net.ne.jp/aala/>

上智大学アメリカ・カナダ研究所 <http://www.info.sophia.ac.jp/amecana/>  
東京大学アメリカ太平洋地域研究センター <http://www.cpas.c.u-tokyo.ac.jp/>  
同志社大学アメリカ研究所 <http://www.doshisha.ac.jp/academics/institute/america/>  
南山大学アメリカ研究センター <http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/AMERICA/>  
立教大学アメリカ研究所 <http://www.rikkyo.ne.jp/grp/ias/>

#### (5) 学術定期刊行物

日本アメリカ学会『アメリカ研究』（年報）Japanese Journal of American Studies（年報）  
日本アメリカ史学会『アメリカ史研究』（年報）  
関西アメリカ史研究会『アメリカ史評論』（年報）  
国際政治学会『国際政治』（季刊）  
American Studies Association, American Quarterly（季刊）  
Organization of American Historian, Journal of American History（季刊）  
American Historical Association, American Historical Review（季刊）  
Forest History Society & American Society for Environmental History, Environmental History（季刊）  
Society for Historians of American Foreign Relations. Diplomatic History（季刊）

Princeton Institute for International and Regional Studies, World Politics  
(季刊)

## 第4章 英国・英語圏研究

### I. イギリス

#### シェイクスピア研究のすすめ

東郷公德

#### 1. シェイクスピアってどんなひと？

##### 1) 時代

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) は、1564年、イングランド中部の町ストラットフォード・アポン・エイヴオンに生まれ、ロンドンで活躍した後、故郷に戻って1616年に亡くなりました。彼が生まれた1564年には、カルヴァンとミケランジェロが亡くなっており、また同じ年にガリレイが生まれています。時代はルネッサンス。西欧では、中世の世界観に代わって、新しい近代的な物の見方が生まれ、それにともない、社会も大きく変動していました。昨日まで当然のこととされていたことが信じられなくなる。それまでの常識が通用しなくなる。新旧の世界観がぶつかり合い、人々が殺し合う。そんな混沌の時代にシェイクスピアは生きていました。イギリス国王の治世でいうと、エリザベス I 世からジェームズ I 世にかけての時代でした。

ちなみに、日本史でいうと、徳川家康 (1542–1616) がシェイクスピアとほぼ同時代の人で、ふたりは同じ年にこの世を去っています。

##### 2) 生涯

上述のように、ウィリアム・シェイクスピアは、イングランド中部の田舎町に生まれました。父親は、皮製品を扱う商人で、町長を務めるほどの有力者でした。ウィリアムは、地元のグラマー・スクールでラテン語などを学びました。しかし、彼が13歳になった頃から父親が経済的に没落した



ために、ウィリアムは大学に進学することは出来なかったようです。18歳のときに、彼は8歳年上のアン・ハサウェイという女性と結婚し、すぐに長女が生まれます。さらに21歳のときに男女の双子が生まれ、ウィリアムは若くして家庭を養う責任を負うことになります。

その後、「ロスト・イヤーズ」と呼ばれる7年ほどの間、ウィリアムが何をしていたか良く分っていません。確かなことは、1592年頃には、彼がロンドンで劇作家としてある程度成功し、名を知られるようになっていた、ということです。ウィリアムは28歳になっていました。彼は、劇団の役者兼座付き作家で、また共同経営者のひとりでもありました。当時のロンドンでは演劇が非常に盛んで、多くの劇作家たちが活躍していました。その中でも人気作家のひとりとして、ウィリアムは次々と作品を発表していきました。重要なことは、彼が他の劇団や劇作家たちとの競争の中で、集客力のある、売れる作品を書くことを要求されていた、ということです。シェイクスピアは孤高な芸術家などではありませんでした。むしろ、幅広い階層の人々を楽しませるための娯楽を提供するエンターテイナーであったのです。

劇作家として成功したウィリアムは、稼いだお金で、父親のために紋章を獲得したり、故郷で大邸宅ニュー・プレイスを購入したりしました。その後も、土地を購入したり、金銭をめぐる訴訟を起こしたり、残された記録からはウィリアムの俗物的な面が窺われます。

劇作家としての活動期間中、彼自身は主にロンドンで生活し、時折故郷の家族のもとに帰っていたようです。しかし、46歳になったころからは、ニュー・プレイスで家族と生活するようになったと思われます。劇作のペースも落ち、最晩年、49歳ころの作品である『ヘンリー8世』は若手作家との合作とされています。晩年は、故郷で半分隠退した生活をしていたようです。

1616年4月23日、ウィリアムは亡くなります。52歳でした。亡くなる直前に、悪い男と結婚してしまった次女のために遺書を書き換えたりしています。最後まで金銭をめぐる気苦労が絶えませんでした。

シェイクスピアの遺言といえば、そのなかで妻であるアンに「2番目に

上等なベッド」しか与えなかった、ということが問題とされます。これは夫婦仲が悪かった証拠だ、という人がいますが、本当のことは分かりません。アンは7年後の1623年に亡くなります。同じ年に最初の全集、いわゆる「ファースト・フォリオ」が出版されました。ウィリアム・シェイクスピアはその作品の中に生き続けることになったのです。

### 3) 作品

通例シェイクスピアの作品とされている戯曲は約40ほどあります。その内容は、歴史劇、悲劇、喜劇、問題劇、ロマンス劇と様々なジャンルにわたっています。シェイクスピアの作風の特徴のひとつは、その幅広さにあります。時代順にならべると、初期に歴史劇と喜劇が多く、後期にかけて有名な悲劇や問題劇が書かれ、最晩年にロマンス劇が書かれました。

その他、シェイクスピアの残した作品としては、2つの長篇物語詩と、154編の14行詩から成る『ソネット集』などがあります。こうした詩作品からは、シェイクスピアは劇作家としてではなく、詩人として後世に名を残したいと考えていたことが窺われます。

## 2. 現代に生きるシェイクスピア

シェイクスピアがこの世を去ってから400年近くになります。にもかかわらず、彼の作品は、今でも英語圏諸国のみならず、世界中で、いろいろな言語に翻訳され、読まれ、上演され、映画化されています。日本でも、ほとんど毎週のように、どこかでシェイクスピア劇が演じられています。また、2000年秋以降だけに限っても、『タイタス・アンドロニカス』、『恋の骨折り損』、『ハムレット』、『ヴェニスの商人』と4本の新作映画が封切られました。シェイクスピアは現在も確実に生き続けているのです。

こうしてあちこちで上演されたり上映されたりしている作品は、シェイクスピア自身が劇団の仲間たちとテムズ河畔のグローブ座で上演していた演劇とはまったく別物になっています。多くの場合、翻訳によって、シェイクスピア劇の命である「言葉」さえ変えられています。しかし、様々な

解釈や改変を受け入れる懐の広さと、時代の違いや言語の違いさえ乗り越えてしまう骨の太さが、シェイクスピア演劇の魅力なのです。

### 3. 講義では？

2011年度現在、英語学科ではシェイクスピア関連の講義が6つ開講されています。それぞれの講義では異なったアプローチでシェイクスピアを紹介し、その魅力の謎を探ります。アプローチの仕方には次のように3通りあります。

#### 1) ビデオで観る

いろいろな作品を少なくとも一本ずつは通して観る。

「英国研究入門」(前期)：比較的有名な12の劇作品を扱う。

「英国演劇」(後期)：少し知名度の低い作品なども交えて「英国研究入門」で扱わない劇作品を12ほど紹介する。

#### 2) 精読する

注釈付きテキストを使って精読する

「英文講読(シェイクスピア)」(前期)(休講)

「演習・英文学 1」(前期)

「演習・英文学 2」(後期)

#### 3) 演じる

グループに分かれて、実際にシェイクスピア劇を自分たちで上演する。

「英国研究A」(後期)

6つの講義を全て制覇すれば、あなたもかなりのシェイクスピア通になるでしょう。「シェイクスピアに慣れ親しむ」ことを大学時代の目標のひとつに加えてみてはいかがでしょう。積極的な学生諸君の参加を講師は待ち望んでおります。

#### 4. ブック・ガイド

##### ★入門書

- 1) アエラムック『シェイクスピアがわかる。』 朝日新聞社 1999年  
※多彩な執筆陣とバランスのとれた内容で、手軽な入門書になっている。
- 2) 特集アспект79『読まずにわかるシェイクスピア』 アспект 1999年  
※学問的ではない分とても面白い。楽しむための入門書。
- 3) 出口典雄監修『シェイクスピア作品ガイド37』 成美堂出版 2000年  
※全劇作品を豊富な舞台写真を使って紹介している。
- 4) 高橋康也編『シェイクスピア・ハンドブック』 新書館 1994年  
※小辞典風にまとめている。小冊子であるわりには内容は充実している。
- 5) 高田康成ほか編『シェイクスピアへの架け橋』 東京大学出版会 1998年  
※一流の講師陣による連続講座のような内容。やや教科書的だがわかりやすい。
- 6) 今西雅章ほか編『シェイクスピアを学ぶ人のために』 世界思想社 2000年  
※シェイクスピアやその作品を論じた論文を集めたもの。シェイクスピア学入門。
- 7) 小田島雄志著『小田島雄志のシェイクスピア遊学』 白水社 1982年  
※伝記的歴史的背景もからめてシェイクスピアのことをわかりやすく紹介している。

##### ★翻訳

- 8) 坪内逍遙訳『ザ・シェイクスピア』 第三書館 1989年  
※全劇作品の原文と翻訳が一冊にまとめられている便利な全集。
- 9) 小田島雄志訳『シェイクスピア全集』 全37巻 白水Uブックス 1983年  
※とても読みやすく舞台でもいちばんよく使われているが、上演向き

かどうかは疑問。

- 10) 松岡和子訳『シェイクスピア全集』(刊行中) ちくま文庫 1996年より  
※出来るだけ原文を生かそうという姿勢で訳している。わかりやすい。

### ★シェイクスピアその人について

- 11) S. シェーンボーム著『シェイクスピアの生涯』 紀伊国屋書店 1982年  
※伝記としていちばん標準的で学問的にも信頼できる。
- 12) 安西徹雄著『仕事場のシェイクスピア』 ちくま学芸文庫 1997年  
※劇場人としての活動に焦点をあてた伝記。文庫本で手軽に読める。
- 13) 福田陸太郎、菊川倫子著『シェイクスピア』 清水書院 1988年  
※伝記と作品についてコンパクトにまとめられている。

### ★シェイクスピアと映画

- 14) 森祐希子著『映画で読むシェイクスピア』 紀伊国屋書店 1996年  
※5つの劇作について、それぞれの映画版の面白さを紹介している。
- 15) 狩野良規著『シェイクスピア・オン・スクリーン』 三修社 1996年  
※ざっくばらんな語り口で様々な映画化作品を批評していて面白い。

### ★その他

- 16) P.ミルワード著『シェイクスピアは隠れカトリックだった』 春秋社 1996年  
※シェイクスピアの宗教的背景がわかる。幾つかの作品論も含む。
- 17) ヤン・コット著『シェイクスピアはわれらの同時代人』 白水社 1968年  
※この暗く挑発的な解釈は批評と舞台に大きな影響を与えた。
- 18) 河合隼雄、松岡和子著『快読シェイクスピア』 新潮社 1999年  
※対談なので読みやすくとても面白い。

## イギリス表象文化としての小説

小川公代

イギリスという国について「知る」ことと、イギリス人がどのような社会を構築し、それについて彼らがどのように考え、どんなふうに行動してきたのかという問題について「認識」することは異なる。たしかに日本人は学校教育の過程において世界史上の主な出来事の年代、西洋の主な思想家の名前や著名な作家の作品名などの知識を得ているかもしれない。このような事実についての「知識」は極めて重要であり、好奇心次第では制限なく得ることができるだろうし、得るべきであると思う。しかし、例えばイギリス社会の道徳や階級意識についての「認識」は、教科書を眺めていても体得できるものではない。イギリス近代社会を内側からの視点で捉えるということはどういうことか。まずその国の、そしてそれぞれの時代の言説を時間をかけて自らの言語体系に組み込んでいく必要がある。哲学や科学の書物、政治パンフレット、文学作品を読むのも手かもしれない。小説という形態の書物からイギリス文化や社会の何が汲み取れるかをまとめてみようと思う。

### 1. イギリス個人主義と小説の勃興

小説のプロット（話の筋）だけを理解するならば英文学事典や批評書などを参照するだけで十分である。しかし、何日もかけて小説に書かれた言葉と戯れることで、プロット以上の「認識」を少しずつ蓄積することができるだろうし、よりイギリス社会や考え方を知りたいという欲求が湧いてくる。これは本国イギリスの国民にとっても同じことである。イギリス人は読書好きであるが、一番衝撃的だったのが、ロンドンの大企業に勤める働き盛りの友人が、帰宅後、毎晩小説を読んでいると話してくれたことだ。19世紀の小説をよく読むとのことだったが、彼は「現代人にとっても学ぶ

べきことが多い」といってギヤスケルの『クランフォード *Cranford*』(1851-53)を誇らしげに見せてくれた。小説が現代社会に生きるイギリス人の精神的な糧となっていることを実感した瞬間だった。

私の友人も言ったように、歴史・文化的背景を想像しながら小説を精読することは非常に意義がある。特にイギリス小説が表象文化の一つとして近代、現代社会において果たしてきた役割は大きい。オックスフォード英語辞典(OED)によると、“Novel”というのは「登場人物や彼らの行動が、過去や現在の実生活を(中略)表象するものである」という。文学批評家イアン・ワットがイギリス小説の祖として挙げるサミュエル・リチャードソンの『パメラ *Pamela; or Virtue Rewarded*』(1740)や、ヘンリー・フィールディングの『トム・ジョーンズ *Tom Jones*』(1749)は、固有名詞の題名が示すとおり、主人公の遍歴を追った物語である。その原型となったのが、かの有名なスペインの小説『ドン・キホーテ』(1605-1615)である。

主人公は王や貴族でなく、下層から中産階級に属する場合が多く、物語は例えば小間使い(パメラ)や捨て子(トム)の人生を追う。彼らが階級の差異によって引き起こされる数々の問題を乗り越えて逞しく生きていく姿を、時にはユーモアを交えながら描いている。つまり「小説」とは、それ以前の騎士道精神が貫かれた「ロマンス」と呼ばれる読み物とは区別されるジャンルである。15世紀のトーマス・マロリー卿の『アーサー王の死 *Le Morte D'Arthur*』(1469-70)の、王を中心とする円卓の騎士たちの冒険などと比較すると、近代小説は故意に物語の壮大さや騎士道的理想を避ける傾向にあり、『ドン・キホーテ』などにいたっては、騎士道物語をパロディにして妄想に陥る愚かな男を描いている。イギリスで小説が中産階級の個人主義(individualism)の文化として勃興したといっても過言ではない。18世紀イギリスで一世を風靡した版画家のウィリアム・ホガースの作品もまたこの時代の庶民の生活を中心に描いている。ホガースの『ある娼婦の生涯 “A Harlot's Progress”』(1732)や『ある放蕩児の遍歴 “A Rake's Progress”』(1735)という版画絵は、当時売れ始めていたダニエル・デフォーの情婦についての小説『ロクサーナ *Roxana*』(1724)やジャーナリズムの流行に照応しているといえる。女性にとって貞節(Chastity)が最重要課

題であった時代に、そのイメージとは正反対の女性を描くことはスキャンダラスであったかもしれない。だが、18世紀末に『女性の権利の擁護 *A Vindication of the Rights of Women*』（1792）で女性の教育の権利や自立を主張したメアリ・ウルフストンクラフトもまた、アウトローな女性を主人公にした小説（『メアリ *Mary*』、1788など）を書いており、個人主義的な文化の兆しがみえる。

## 2. 19世紀の表象文化としての小説

18世紀中頃から始まっていた産業革命はヴィクトリア時代（1837－1901）に黄金時代を迎え、イギリスは帝国主義、植民地政策によりさらに国力を増大させていく。それとともに、経済知識だけでなく倫理観（モラルティ）が重要視されるようになる。1840年から50年代にかけて、いわゆる「社会小説」（または産業小説）が多く書かれた。チャールズ・ディキンズやエリザベス・ギヤスケルは産業革命によって生じた工場労働者の悲惨な生活や苦悩を深い共感とともに描き出している。この頃、過酷な労働を強いられた若者の「チャーチスト運動」も小説に取り上げられるようになる。このような時代の趨勢にあって、さまざまな思想や知識、そしてモラルティなどが、小説や刊行物などを通して発信された。これらの書物が印刷技術によって部数を増やしたことで、出版物が社会に与える影響は大きくなるとともに、これらの書物がより多くの声を代弁するようになる。

伝統的に土地を継承する貴族に代わって、次第に新興階級（ブルジョアジー）の人々が勢力を強めていったが、彼らの俗物主義は小説の訴えるモラルティによって厳しく批判された。イギリス小説に欠かせないのがヒロインである。もちろん科学者、労働者、医師などの男性主人公も登場するが、小説というジャンルが誕生したことによって数多くの女性が現実味あふれる形で描かれてきたことも事実である。当時、女性の教育にも関心が高まりつつあったことから女性読者が急増し、小説と女性とは切っても切れない関係にある。この頃、家父長的（Patriarchy）－男性中心主義的－「家庭」の枠組みの外で、女性が生活を営むことは非常に難しく、たいいていの



女性登場人物に与えられる選択肢というものは「結婚するかどうか」や「誰と結婚するのか」であった。裕福でなければ、未婚女性は家庭教師や使用人として生計をたてるしかなかった。ブロンテ姉妹（シャーロット・エミリー・アン）は女性の自立する強い意志や社会的影響下における人間の本性を鋭く描いている。また社会的規範から外れてしまう女性の悲劇を通して、その危うさ（vulnerability）も訴えている。以下は女性表象についてよく取り上げられる代表的な作品である。

- (1) ジェーン・オースティン『分別と多感 *Sense and Sensibility*』（1811）  
エレンア・ダッシュウッドに見られる知性にも似た良識（これを小説では「分別」と呼んでいる）が称えられる。
- (2) ジェーン・オースティン『マンスフィールド・パーク *Mansfield Park*』（1814）  
 知性も良識も持ち合わせたファニー・プライスは大邸宅の女主人の納まり、物質主義と道徳的放埒を体現するメアリ・クロウフォー  
ドは放逐される。
- (3) ウィリアム・サッカレー『虚栄の市 *Vanity Fair*』（1847）  
ベッキーの新興中産階級の虚栄と貪欲を風刺。
- (4) シャーロット・ブロンテ『ジェーン・エア *Jane Eyre*』（1847）  
 孤児ジェーンが教育を武器に家庭教師で生計をたて、最後には幸せな結婚をするというシンデレラ・ストーリーの一変形。
- (5) アン・ブロンテ『アグネス・グレイ *Agnes Grey*』（1847）  
 自伝的な作品でアグネスの家庭教師としての苦労を赤裸々に描いている。
- (6) ジョージ・エリオット『ミドルマーチ *Middlemarch, A Study of Provincial Life*』（1871）  
 献身的なドロシア・ブルック・道徳的模範となるメアリ・ガスに対して上層階級育ちで貴族趣味に浸るロザモンドは俗物主義の権化。
- (7) トーマス・ハーディー『ダーバヴィル家のテス *Tess of the d'Urbervilles*』（1891）  
 金持ちの商人の家で働くテスはこの家の息子であるアレックに誘惑され、私生児を生み、苦労をする。テスはエンジェルとめ得太く結婚するが過去の秘密が原因で破綻し、最後にはアレックを

殺害してしまうという悲劇の物語。

### 3. 「語り」に反映される時代の声

小説の語り手とはテレビでいう「ナレーション」と同じ役割を担っている。語り手は過去に起こった（あるいは進行している）出来事を描写したり、何がどのようにして起こったのかを説明したりするのである。もちろん、登場人物の発話をそのまま伝える引用符で括る方法もあるが、終始会話と出来事の描写が繰り返されるだけでは、読者は本筋を見失ってしまう。語り手がプロットを操作しながら「語り」でもって読者の心理に訴えるのだが、この語りの訴えにイギリス社会の思想や声を読み取る鍵がある。

19世紀初頭のジェーン・オースティンの作品には「自由間接文体」(free indirect speech) という語り手の発話と登場人物の発話とが交じり合った形式が使われていたが、デフォーやフィールディングなどの初期の小説においては、まだ登場人物の発話と語り手の言葉（語り）がはっきりと区別されていた。登場人物の理想と語り手が語る現実の食い違いによって、作者は「人間の本性」を描き出そうとする。

ここにその例を挙げておこう。フィールディングの『トム・ジョーンズ』の主人公トムは孤児として育てられるが、近くの地主の娘ソフィアを愛するようになる。当然階級が異なるという理由で反対されるが、トムはソフィアを一途に愛するのだと自分に誓いをたてる。次の瞬間、語り手が介入し、その誓いとは矛盾する現実を語り始める。猟場番ジョージ・シーグリムの娘モリーがトムの前に現れ、彼を誘惑する。そして、彼は誘われるがままに果樹園の奥に消えていった、というのである。これによって、トムの理想主義または幻想は木っ端微塵に碎かれる。語り手は以下のような言葉で締めくくる。

Some of my readers may be inclined to think this event unnatural. However, the fact is true, and, perhaps, may be sufficiently accounted for, but suggesting that Jones probably thought one woman better than none, and Molly as probably imagined two men to be better than one. (Henry Fielding, Penguin Books, 1985, p.239-240)

プロットを操作する以外に、語りは「真実」を告げる役割も担っている。トムの言っていること（理想）とやっていること（現実）が対照的に描かれるのだが、読者は結局、トムの（本能的な）行いを語り手の示した現実を通して認識する。「語り手の言説」が「言及される人物の言説」を圧倒する最も分かりやすい例である。

中立であるはずの「語り手」にも、ある価値観を背負った視点が見え隠れする。興味深いのは、登場人物が語り手であり、その語り手がイギリス人の階級意識や先入観を「語り」の部分に取り込んでいる場合である。読者が「語り手（そして作者）のレンズを通して物語を読むのだ」という意識をもてば、イギリス小説はより面白くなる。もし語り手の言うことが明らかに嘘だとするなら、それは小説とは、結局虚構（フィクション）の産物なのだからと結論づけてしまえばいいかもしれない。けれども、「信用できない」語り手にもそれなりの意義がある。小説内部にも、ある程度真実と嘘を見分ける道筋が作られているので、歴史考証によって作者の隠れた主観が見えてくることがある。（文学批評において、「作者－語り手－読者」の関係は広く議論されているが、ここでは割愛する。）

語り手が真実を歪曲する過程で、語り手の階級意識、プライド、宗教観、といったものが関わっている。語り手がすまし顔で、さもそれが人間の本性、または真実であるかのように語るとき、語り手の言葉にこめられた階級に絡む利害意識、下層階級や宗派（例えばメソディズム）に対する蔑みや哀れみ、植民地支配という文脈における「文明をもたない」（uncivilised）国にたいする脅威、という主観を垣間見ることがある。読者はそれと同時に、人間がいかに関現を歪めたり隠したりする存在なのかを再確認するにいたる。以下に「語り」という視点で読むと面白い小説を挙げておく。

(1) エミリー・ブロンテ『嵐が丘 *Wuthering Heights*』（1847）

ネリーという使用人が語る二つの家族の物語。主人公キャシーとその娘にネリーは使用人として仕え、彼女らの運命と深く関わっているが、客観的な視点を保持しようとする。

(2) ジョセフ・コンラッド『闇の奥 *Heart of Darkness*』（1902）

イギリス帝国主義末期の話だが、アフリカにあるイギリスの貿易

会社の出張所に送られたとき、消息不明のクルツという象牙採取人に語り手マーローが会う。その体験を語るという設定だが、そのクルツ像は噂や先入観が影響している。

(3) カズオ・イシグロ『日の名残り *Remains of the Day*』(1989)

語り手はイギリスの大邸宅で働く初老の執事ステューブン。ともに働いたミス・ケトンが示してくれた愛情に応えることができなかった、という過去について感情を制御しながら語る。彼の執事としてのプライドが誠実な語りを阻んでいる。

#### 4. 小説の文化とイギリス経験主義

イギリスでは、人間の本性を見極めようとする試みは小説が誕生する18世紀以前から既に重要な課題であった。小説を書く・読むことによって人間の本性を語ったり、解釈したり、という文化が育つ土壌はそこにあったのだといえる。17世紀において、人間の本性を「利己的」で「攻撃的」である、と主張したトマス・ホッブスの思想は、のちにシャフツベリーやハチソンによって批判され、人間の本性は「利他的な仁愛」(benevolence)であると再解釈されている。知覚した物事を基盤に、ある事象を認識するという経験論を打ち立てたジョン・ロックは、客観的因果関係により人の理性を科学的に解明することは可能だと考えていた。しかし、人間が互いの本性を「客観的」に吟味することに懐疑的視点をむけたデイヴィッド・ヒュームや、(ドイツの)イマニュエル・カントの「主観が客観に従うのではなく逆に客観が主観に従う」という革命的な認識論によって、人間の本性を見定めようとする視点(point of view)も大きく変わった。それにより、小説における「語り」に対する認識もまた変化し、今日の文学批評では、たとえ『トム・ジョーンズ』のような全知の語り手(登場人物以外の存在)であっても、登場人物の心情や主観的な見解に触れずに物語を進めることはできない、と考えるようになっている。

小説やその語りというものはさまざまな主観について、読者の想像力を逞しくしてくれる。それが文化圏の異なる出版物であればなおさらである。

ハチソンやヒュームとともに人の「仁愛」を提唱していたアダム・スミスは、基本的に人間は人々の「信頼、尊敬、愛情」を欲し、常に自分が相手にどう写っているのかを気にする生き物であると述べている。『嵐が丘』も『日の名残り』も、語り手であるネリーやスティーブンという架空のイギリス人の経験的認識を反映する一方で、「人によく思われたい、信頼されたい」というより普遍的な「人間の本性」というテーマを描いているのかもしれない。スミスの言葉を借用するなら、「他人の眼」（想像力）は「自分自身の行為の道徳的適正を吟味することができる唯一の鏡」である（p.257）。それによって、他者の立場や認識を理解するだけでなく、自分の行いや言葉が他者にどのように理解されるかという真の対話能力も備わるというのだ。想像力を柔軟に働かせながら小説や思想などの書物を丹念に読み、性、階級、人種、民族、宗教、そして文化を超えて他者を認識しようとする試みは、異文化コミュニケーション、ひいては人間コミュニケーションに繋がるのではないかと思う。

## 参考文献

『イギリス文学小事典』（北星堂、1994）

デイヴィッド・ロッジ『小説の技巧』（1992） 柴田元幸、斉藤兆史訳（白水社、1999）

イアン・ワット『小説の勃興』（1957） 藤田永祐訳（南雲堂、1999）

## 本文で言及した哲学書

イマヌエル・カント『純粋理性批判』（1781） 篠田英雄訳（岩波文庫、1961-2）

アダム・スミス『道徳情操論』（1759） 米林富男訳（未来社、1996）

トマス・ホッブス『リヴァイアサン』（1651） 全4冊 水田洋訳（岩波文庫、1954）

ジョン・ロック『人間悟性論』（1690） 加藤卯一郎訳（一穂社、2005）

## Recent UK Cinema

John Williams

The nineteen nineties saw a resurgence of optimism in British cinema and the decade produced a series of uplifting films that were artistically and commercially successful, both within the UK and overseas. The best films of the decade depicted a society in positive flux, a softening of class divisions, a new embracing of ethnic and sexual minorities, the emergence of a cheeky, ironic youth culture and Britain's own answer to Quentin Tarantino, in Guy Ritchie.

The list of outstanding British films from the mid-nineties to the beginning of the new decade was quite astonishing: *Billy Eliot*, *The Full Monty*, *Trainspotting*, *Human Traffic*, *Lock, Stock and Two Smoking Barrels*, *East is East*, *Bend it Like Beckham*, just to name a few. The exuberant ending of *The Full Monty* and the symbolic transformation of the protagonist in *Billy Eliot* in particular perfectly captured the optimism and the transformative message of the New Labor government, and there was a feeling that the "ugly duckling" UK of the 70's and early eighties might just become a swan again.

This all changed after September 11<sup>th</sup> 2001 as the previously buoyant Labor government embarked on disastrous and morally hazy wars in Afghanistan and Iraq. These would eventually lead to another terrorist attack in the UK itself, to a complete undermining of public faith in the honesty of the government, a renewal of hostility to outsiders, and particularly British Asians (who had begun to be portrayed in a positive light in *East is East* and *Bend it Like Beckham*), a massive increase in public surveillance, and finally the return of the Conservative party to power. One of the first initiatives of the new Tory

government was to dismantle the UK Film Council, which, despite much criticism had obviously been responsible for many of the hit movies of the eighties.

Despite the overall negative trends a new generation of filmmakers emerged or matured in the decade after 2001 and their work, though not often commercially successful reflects or reflects on the “shrinking” of British optimism, the disappearance of safe public space and the underlying angst produced by protracted war and an official discourse of fear. The films are less “ideological” than the kitchen sink films of the sixties and the films of Ken Loach, but they are also “political” in a new kind of way, commenting on the dissolution of community and identity in a globalized, atomized, commercialized Britain.

First and foremost amongst the new talents (though he had been active in the eighties too) was Shane Meadows, a Nottingham based director, who deliberately avoids stepping beyond the boundaries of his own home town in almost all of his films. In this contained world, working with non-professional actors, Meadows’ work has always been about young men in a violent, drab working class and middle class world, but his films have recently began to reflect much more on general tendencies in British society, without ever losing their focus and rootedness in the world he knows. Perhaps his most accomplished work to date, *This is England*, is both a dismantling of “nostalgia” and a savage attack on nationalism and war, in the guise of a coming of age story about a gawky young boy who joins a gang of skinheads on the fringes of the racist National Front party, after his father is killed in the Falklands War.

Although the film is set in the nineteen eighties and could quite easily have even been made in the eighties, *This is England* is both lyrical and subversive in many ways. The largely sympathetic portrayal of the

skinhead gang (in the sense that we understand that they are choosing this ideology because they have no place in the world they inhabit), the lyrical interludes, the gentle use of music and humor, make this a film not just about a certain time and place, but a much more timeless piece of cinema. But most strikingly the film resonates beyond its small, specific place and time, when set in the context of the ongoing wars in Afghanistan and Iraq. *This is England* begins and ends with grainy footage of British soldiers piling up dead bodies in the bleak landscape of the Falklands, and its closing image is of the central character, the boy, hurling the flag of St. George into the sea.

Andrea Arnold is another director who restricts her gaze to specific locales, both in her debut feature *Red Road*, set on a bleak council estate, in the new “Surveillance Britain” and in *Fish Tank* her second feature. In *Fish Tank*, Mia, a young working class girl, begins a dangerous relationship with her mother’s new boyfriend, which leads her ultimately to leave home and set off with a group of “travelers” for Wales. Arnold has been likened to Ken Loach, and it is true that her work has the same rootedness in working class reality, but unlike Loach her films do not seem to be structured around any ideological critique. Politics is highly personalized and solutions to social problems also come in little moments of personal revolt and decision. It is also interesting that the characters take flight, to Spain in Lynne Ramsey’s *Morvern Caller*, and to Wales in *Fish Tank*.

Social space on screen has changed too. Where previously many British films were set in the work place, the home and the pub, the new British films often find their characters in “limbo spaces” and “no man’s lands” – waste grounds, cul de sacs, marshlands and other in-between spaces. It is as if the stable space of the nation had suddenly dissolved and the characters have been thrown back into a world that is insecure, dangerous and lacking in social rules. When the heroine



of *Fish Tank* breaks into her lover's house it is only to urinate on his carpet, before abducting his daughter and nearly drowning her in a nearby marshland. Arnold restrains her heroine, and the murder does not happen, but there is a gnawing, underlying sense that it could have happened and that what permits the moral emptiness of the film is the moral emptiness of the society in general.

Pavel Paweloski's characters also inhabit limbo spaces, and they also manage to snatch a personal redemption from their worlds through acts of generosity or spontaneous rebellion. Both in *The Last Resort*, set in a refugee centre in Brighton and in *My Summer of Love*, Pawelowski depicts characters at odds with savage absurdity of their social rootlessness and the breakdown of social order. Again, as in the works of Lynne Ramsey and Andrea Arnold, the characters are able to escape or change their worlds, but only in a personal way.

The above films and filmmakers all fall into the category of "art-house" and many of them were funded by New Cinema Fund, the section of the UK film council set up to promote new voices and new talents, with the participation of Regional Film Funds, but also often with some European component in the funding. As a general trend these films had strong regional settings, multi-cultural elements and an interest in outsider characters. Although all these films appear to be "apolitical," even the seemingly political *This is England*, it is rather that their critique of contemporary UK society has moved beyond the "ideological" positions of directors like Ken Loach and approach a kind of personal politics of opposition, embodied in the defiant siding with misfits and outsiders that acts as a mirror on the emptiness of official space and official discourse.

In style and tone these films seem much more like the early works of Milos Forman, and they also seem linked also to the works of European "critical filmmakers" such as the Dardenne Brothers, Laurent

Cantent, Lucas Moodyson and too Korean and Japanese filmmakers such as Hirokazu Koreeda and Lee Chang-Dong.

But intelligent and disturbing insights into the effects of war, mass-surveillance, and mass-consumption were not confined to art-house film. Horror films made a come back after 2001 and the new batch of horror films had the same political sub-texts as the American horror films that were spawned by the Vietnam War. Danny Boyle's *28 Days Later* is a Zombie movie that both pays homage to Romero's originals, but also adds a specific critique of the military, who want to control the Zombies and use them for their own purposes. The eerie menace of the early Zombies is speeded up in Boyle's film, so that the Zombies actually attack at a run. The speeded-up Zombies could easily be read as a metaphor for the accelerated menace of the new post 9.11 world of dread, but the protective military are as much of a menace as the Zombies themselves. The central characters do not know who to trust at all in this strange new world.

In *Eden Lake*, feral youths attack a middle-class couple in a wasteland forest that is slated to be developed into a gated community. The initial mild taunting escalates slowly and realistically into torture, humiliation, mutilation and murder, captured on cell phones. The reference to events in Guantanamo Bay is obvious and deliberate. When the woman survives and stumbles into a garden party in the nearby town, she finds that the children's parents are as out of control as their kids. *Eden Lake*, though apparently a very simple horror movie, captures the double-angst of the Zeitgeist, the widening gap between the classes and the knock-on effects of a prolonged and seemingly absurd war. The closing image of the film shows the main antagonist, the murderous leader of the gang, staring at himself in a mirror, wearing shades. The monster is no longer "out there," but at home in the suburban bathroom.

Even the Period or “Heritage” films of the decade seemed to become infected by the general sense of uncertainty and disillusionment. In *Atonement* the only way that the film offers the audience to pick up the broken fragments of the war (in this case the Second World War) is through an obvious lie. The film begins with a sense of hope and expectation, but defies our expectations by unraveling all of the possible and probable happy outcomes and revealing that the only happy ending given to us is actually a lie. This mistrust of narrative and of the dominant narrative that surrounds all British wars (that sacrifice is necessary and redemptive) reflects the mistrust of government and public discourse after it was revealed that the government had misled and misinformed the public about the reasons for going to war, by “sexing up” a report about Weapons of Mass Destruction that never appeared.

In conclusion, the UK cinema of the first decade of the 21<sup>st</sup> century appeared to be as vibrant as that of the previous decade, despite its generally downbeat tone and lack of ideological vision. However, the future of UK cinema is now far from clear, as the UK Film Council has been abolished, and there is much uncertainty about the body that will replace it. Regional film funds are also being cut, and the European funding that was often the last slice of the financing cake for UK films is also shrinking. Digital screens have also not necessarily helped independent filmmakers as there are still many economic systems in place such as the “Digital Print Fee” that make it hard for the smaller films to get broader distribution. Sadly too, UK audiences are not flocking to see the new films. The list of top ten box office films for most years since 2001 consisted of the usual Hollywood Blockbuster fare.

## References:

The Full Monty, dir. Peter Cattaneo (1997)  
Billy Elliot, dir. Stephen Daldry (2000)  
Trainspotting, dir. Danny Boyle (1996)  
Human Traffic, dir. Justin Kerrigan (1999)  
Lock, Stock and Two Smoking Barrels, dir. Guy Ritchie (1998)  
This is England, dir. Shane Meadows (2006)  
Morvern Callar, dir. Lynne Ramsey (2002)  
Red Road, dir. Andrea Arnold (2006)  
Fish Tank, dir. Andrea Arnold (2009)  
Last Resort, dir. Pawel Pawkowski (2000)  
My Summer of Love, dir. Pawel Pawkowski (2004)  
28 Days Later, dir. Danny Boyle (2002)  
Eden Lake, dir. James Watkins (2008)  
Atonement, dir. Joe Wright (2007)

## II. 英語文化圈

### Australian Studies

Michael G. Jacques

#### (1) Introduction

The systematic study of Australian culture and society has started only relatively recently. In the last four decades Australian Studies has boomed, inside and outside Australia. It has different emphases in anglophone and non-anglophone countries and different institutional bases. It has also grown and changed over this period, becoming increasingly involved in post colonial and postmodern kinds of pluralism. There is still a lively debate about what Australian Studies (or studies) is, which approaches are most productive, and what material should be taught. At one time, history and literature dominated the discussions about Australia. It has been widely assumed that to understand people's current behaviour entails examining the history of how they have behaved in the past. Similarly, to see if people have anything distinctive to say, one must study their literature. Australian Studies has particularly strong connections with university departments of English, History and Social Sciences; it has offered them interdisciplinary outreach. Many Australian Studies courses are cross-disciplinary in approach and attempt to analyze significant foci of cultural change, such as those involved in the Mabo decision, the move to a republic, multiculturalism, feminization of the work place, Australia in the context of its Asia-Pacific setting, definitions of the nation and national identity, globalization and national identity, women and national identity. These are some of the key issues around which researchers in the field of Australian Studies

have pursued the question of national identity—which is, in other terms, the question of the nature of Australian society and culture. Australian Studies explores and analyses changing models as well as static national images. Recently, attention to the transnational forces that are influencing and shaping the nation is leading to a transnational Australian studies.

## (2) Defining Australia—a cross-disciplinary approach

There is a problem in defining Australia and what it means to be an Australian. Focusing on how Australia and its people have been talked about, one must consider some key concepts in both the Humanities (for example, history, literary studies) and the Social Sciences (for example, anthropology, sociology): concepts such as nation, nationalism, race, gender and myth. This knowledge will be helpful in analyzing issues and debates in Australian Studies. The question: How can we define Australia? gives rise to a series of related questions, including:

Does ‘Australia’ mean ‘the nation’?; Where does the idea of ‘a nation’ come from? (history of ideas); How can ‘Australia’ be differentiated from other nations—both the ‘parent’ societies of Europe, and other regions of European settlement like Canada or New Zealand? (history, economics and comparative studies); Where do Australian social and cultural institutions come from, and do they function in ways unique to Australia? (political science, sociology, literary and media studies); Is Australia best understood in terms of what is unique to the country? (geography, environmental studies); Can Australia be understood in terms of the myths and images generated there? Is there an ‘Australian legend’? (history of ideas, history, literary studies); Who are the ‘Australian’ people? (histories of indigenous peoples,

immigration, settlement, the debate on multiculturalism); In what ways is contemporary Australian society like and unlike societies of similar countries? (sociology, social studies, economics).<sup>1</sup>

Attempts to answer these questions draw attention to the practical applications of the methods of history, political science, literary studies, sociology, geography and other disciplines. It also highlights the central concerns that generated these disciplines in the first place: How are societies formed? How are they maintained? How do they evolve? How are institutions developed? Rather than focusing on Australia in isolation, "Australian studies is best conceived as a mode of regional, transnational or global studies...having Australia take its place, naturally, in the frameworks of comparative and cross-disciplinary understanding."<sup>2</sup> How does the Australian experience provide new insights and understandings for key contemporary international debates around multiculturalism, citizenship, globalization and national identity; reconciliation with indigenous people; history debates and national identity; global warming and environmental issues including the use of natural resources; nuclear technology and clean nuclear energy generation, the safe storage of nuclear waste materials; Australia in Asia to 'Asia in Australia'; implications of the Australia-U.S.A. alliance.

### (3) Images and 'national identity'

As a 'new'—settler and immigrant—society in a land first occupied by another culture, Australia will arguably have an extreme case of 'identity crisis'. Although the source of images of national identity will often be found in the realm of myth and legend rather than in fact, such images have real effects and consequences in government policy, in culture, and in the day-to-day lives of the nation's

citizens. It is therefore necessary to understand and question how these images came about, who circulates these images and for what reasons. Images of national identity are ‘inventions’ and often have little to do with reality. National identity is not something fixed in time and place. Rather it is something that is made in the process of questing for it. There are no right or true answers to such questions as ‘What is the real Australia?’, nor any single or final answer to the question of what it means to be an ‘Australian’. But there are processes of cultural production through which versions of Australia are arrived at, and academic inquiry should alert us to these. As Richard White suggests: “When we look at ideas about national identity, we need to ask, not whether they are true or false, but what their function is, whose creation they are, and whose interests they serve.”<sup>3</sup> We also need to ask who is included and who excluded by the familiar images of national identity? Where do the images come from—who produces them? How have they changed over time? Are there different, even contradictory images present together? What groups identify with what images?

#### (4) Concluding Remarks

Paradoxically, the uncertainty about identity (who we are) is a strength. The ‘identity crisis’ of ‘Australians’ will continue—especially the debate about it. It is in the nature of ‘new’ societies such as Australia to demand a degree of self-conscious attention to national, institutional and cultural formation not common in ‘traditional’ societies. Settler societies like Australia are forced to make choices about issues crucial to the nature of culture and society: how to relate to indigenous peoples and a ‘strange’ environment; what to retain, reject or adapt from parent cultures—the experience of a long colonial period of British economic, social, cultural and political influence.<sup>4</sup> This



problem-oriented approach in pursuing Australian Studies should produce not only knowledge about Australia, but also an appreciation of some of the academic concerns and key concepts in both the Humanities and the Social Sciences.

The recent reframing of Australian studies involves a deep paradigm shift toward a boundary-crossing knowledge approach which results in a transnational Australian studies. This approach does not deny the role and place of the nation/nation's structures but rather "opens up the ways in which it is constituted by the transnational forces that transect it and shape both its internal structures and external boundaries."<sup>5</sup>

## ENDNOTES

1. J. Walter (ed.), *Australian Studies - A Survey (1989)*, p.16
2. D. Carter, From nations to networks: Australian Studies as 'anti-area studies', *Crossings*, Vol.10.2, 2005, p.4
3. R. White, *Inventing Australia (1981)*, VIII
4. Walter, op.cit.p.17
5. Carter, op.cit.p.7

## AUSTRALIA: RESOURCES FOR RESEARCH

### Reference and General Interest

- P. Grimshaw, M. Lake, A. McGrath & M. Quartly 2006, *Creating a Nation 1788-2007*, Network Books, Perth
- M. Lyons & P. Russell (eds.), 2005, *Australia's History - themes & debates*, UNSW Press, Sydney
- S. Macintyre 2004, *A Concise History of Australia, 2nd edn*, CUP, Cambridge

- D. Day 2001, *Claiming a Continent: A New History of Australia*, 3rd edn, HarperCollins, Sydney
- J. Jupp (ed.) 2001, *The Australian People*, 2nd edn, CUP Cambridge
- J. Jupp (ed.) 2009, *The Encyclopedia of Religion in Australia*, CUP Cambridge
- S. Kleinert & M. Neale (eds.) 2000, *The Oxford Companion to Aboriginal Art and Culture*, OUP, Melbourne
- P. Pierce 2009, *The Cambridge History of Australian Literature*, CUP, Cambridge
- E. Webby (ed.) 2000, *The Cambridge Companion to Australian Literature*, CUP, Cambridge
- B. Moore 2008, *Speaking Our Language: The Story of Australian English*, OUP, Oxford

#### Issues in Australian Studies

- D. Carter 2006, *Dispossession, Dreams and Diversity*, Pearson Education Australia, Sydney
- A. Moran 2005, *Australia - Nation, Belonging and Globalization*, Routledge, New York
- D. Carter, K. Darian-Smith & G. Worby (eds.) 2004, *Thinking Australian Studies - teaching across cultures*, University of Queensland Press, St. Lucia
- A. Jamrozik 2004, *The Chains of Colonial Inheritance*, UNSW Press, Sydney

#### Essay Collections: Australian Studies

- C. Bullbeck & D. Carter (eds.) 2000, *Exploring Australia*, Griffith University, Nathan, Queensland
- R. Nile (ed.) 2000, *The Australian Legend and its Discontents*, University of Queensland Press, St. Lucia
- D. Day (ed.) 1998, *Australian Identities*, Australian Scholarly Publishing, Melbourne
- W. Hudson & G. Bolton (eds.) 1997, *Creating Australia*, Allen & Unwin, Sydney

- G. Stokes (ed.) 1997, *The Politics of Identity in Australia*, CUP, Cambridge  
R. Nile (ed.) 1994, *Australian Civilisation*, OUP, Oxford  
G. Whitlock & D. Carter (eds.) 1992, *Images of Australia: An Introductory Reader in Australian Studies*, University of Queensland Press, St. Lucia

Academic Journals: Sophia Library Fl. 1

The Australian Journal of Anthropology

The Australian Journal of International Affairs

The Australian Journal of Politics and History

Journal of Australian Studies

Meanjin (literature, politics, indigenous studies etc.)

Japanese Studies: bulletin of the Japanese Studies Association of Australia

For a wider variety of journals and other sources see:

[http://www.sophia.ac.jp/J/lib.nsf/Content/search\\_top](http://www.sophia.ac.jp/J/lib.nsf/Content/search_top)

Magazines: Sophia Library Fl. 1

Australian Book Review

The Bulletin (out of print but back issues are available)

Newspapers: Sophia Library Fl. 1

The Australian

The Sydney Morning Herald

The Best Collection of Reference Materials in Japan

Otemon Gakuin University, Osaka-Australian Library

[http://www.oullib.otemon.ac.jp/aus/aus\\_index.html](http://www.oullib.otemon.ac.jp/aus/aus_index.html)

\* For useful lists of Australian Studies related websites, please refer to:

D. Carter 2006, *Dispossession, Dreams and Diversity*, pp.436-438

M. Grattan (ed.) 2000, *Essays on Australian Reconciliation*, pp.315-318

\* Video resources for Australian Studies: Sophia Library Fl. 1 - AV section

## Indian Studies

Francis Britto

### 1. Introduction

India has existed as an independent country since 1947 and as a democratic republic since 1950, but until recently there has hardly been any significant news about India's progress or prosperity in the mass media. On the rare occasions when India made it to the news, it appeared as a country of chronic poverty, abounding in sacred cows, begging urchins, and naked sadhus. Other 'interesting bits' of news about India often concerned caste discrimination, widow-burning, religious violence, and nuclear tests.

During the past four or five years, however, there has been a complete turn around (see Luce, 2006). Nowadays news about India's prospering economy and India's potential to become a global superpower appears frequently in the media around the world. The current rate of India's economic growth is said to be about 9%, surpassing that of many other developing countries and edging closer to China's. India is in the news also because of its recent admission to the exclusive nuclear club, signaled by the nuclear deal it worked out with the United States in 2006. It is said that this Indo-US agreement will enable India to meet its energy needs with nuclear resources. India's space explorations, call centers, IT skills, medical know-how, and competence in English too have made it a country of importance.

Given such drastic turn of events, the once ignored India suddenly finds itself the object of international scrutiny. Whether India will indeed become a superpower is a moot question, but at least for

now there is no denying that it is one of the most-watched countries. There has, therefore, never been a more appropriate time than now to do Indian Studies.

## 2. India in a nutshell

Although shown in maps as one country, India is actually a federation of 35 near-autonomous administrative units bound by the Constitution of India. Many of these units are called states. Each state is like a country, with its own government, official language, culture, and customs. India hosts more than 1,500 languages, almost all the major religions of the world, and a variety of racial/ethnic groups (see Britto, 1989). Its history spans more than 5,000 years, beginning with the Indus Valley Civilization, and passing through the glorious periods of Aryan and Islamic civilizations and the ignominious periods of colonization and exploitation by foreign powers (see Basham, 1967; Keay, 2000; Sen, 2005). Indians may be white, dark, black, brown, or yellow; they may eat with hand or a fork; they may sleep in palaces or on sidewalks; they may own international corporations or beg on the street; they may be Nobel laureates or illiterates.

India, in brief, is a miniature of the world with as much diversity as there is among humans of different nations. If Japan is unique because of its homogeneity, India is unique because of its heterogeneity. Whether it is a matter of race, religion, culture, philosophy, language, or way of life, India is so varied that it would be presumptuous to generalize. As Professor Wolpert (1991:1) says,

. . . nothing is 'obviously true' of India as a whole. Every generalization [about India] . . . could be disproved with evidence to the contrary from India itself. Nor is anything 'Indian' ever quite as simple as it seems. Each reality is but a facet of India's infinity of experience, a thread drawn from the seamless sari of her history, a glimpse behind the many veils of her maya-world of illusion.

To the Japanese, who feel proud to say that they all speak the same language, belong to the same race, practice the same religions, and possess similar physical features, India may strike as a country whose complexity is beyond comprehension and credibility.

India has a wealth of artistic and architectural treasures such as the Ajanta cave paintings, the Taj Mahal, and the Rameshwaram temple with 1000 pillars. It has had a reputation since ancient times for its tasty spices, precious metals, exquisite jewelry, fantastic fables, and philosophical ponderings (see Basham, 1967). India is credited with the discovery of zero, the concept that has made modern mathematics, science, and computer technology possible. The so-called Arabic numerals, chess (shogi), and backgammon too are said to have originated in India. In Japan and the West, currently there is great interest in Indian Yoga, Indian ways of meditation, Bollywood movies, traditional Indian dances, and Indian music.

India faces many problems related to poverty, communal violence, illiteracy, and discrimination (see Varma, 2006), but it has remained a democratic country, advancing forward slowly and steadily. With its consistent economic growth for the past several years, India is looking forward to a brighter future and a more assertive global role.

### 3. India and Japan

India's link with Japan goes back to at least the 5<sup>th</sup> century AD, when Buddhism, the Indian-born religion, entered Japan. With the spread of Buddhism, Sanskrit, Indian gods, Indian religious practices, Indian techniques of meditation, and Indian philosophical concepts have seeped into Japan. Until recently, though, India's contact with Japan was, apart from the Buddhist connection, mostly superficial since India was economically a closed country. With the upturn of the Indian economy and India's current open-door policy, however, Japan and India have become more intimate allies.

In December 2006, the Indian Prime Minister Manmohan Singh visited Japan and held several high level talks with the Japanese Prime Minister Shinzo Abe and other government officials. It was a great occasion for India and Japan to deepen their friendship and resolve to work closely together. The *Joint Statement towards Japan-India Strategic and Global Partnership*, issued by the two Prime Ministers on December 15, 2006, mentions numerous steps that the two countries will take in order to realize their vision of global partnership (see Abe & Singh, 2006).

For example, with a view to boosting Japanese studies in India, the accord states, "The Governments of Japan and India will work together to promote Japanese language studies in India, with a target of 30,000 learners at different levels by the year 2010." The two leaders designate the year 2007 as the "Japan-India Tourism Exchange Year" and encourage the concerned Ministries of each country to carry out promotional activities for tourism exchanges. As regards financial investments, the document asserts: "The Japanese side welcomes Indian investments in Japan. The two sides will coordinate to facilitate



their location and activities in the country. Recognising the competitive advantage of India in software development and IT-enabled services, the two sides will also work together to facilitate the functioning of Indian companies in this field in Japan.”

Another exciting proposal that the two leaders have made is “to explore the idea of re-development of Nalanda as a major centre of learning with the establishment of an international university on the basis of regional cooperation.” Nalanda, near Patna, India, is well-known for its outstanding residential university that flourished between the 5<sup>th</sup> and 12<sup>th</sup> centuries. Nalanda University was famous for Buddhist learning, but it accommodated other religions such as Hinduism and Jainism as well, making it a center of ecumenism and religious harmony. In this age of religious clashes in different parts of the world, re-developing Nalanda could contribute greatly to world peace. The *Joint Statement* also deals with numerous other proposals related to cooperation in civil aviation, establishment of sister cities, economic partnership, and disaster management.

In this climate of deepening friendship between the two countries, studying about India may be of national importance to the Japanese just as studying about Japan is of national importance to the Indians.

#### 4. India and the DES curriculum

As a student of DES (the Department of English Studies), you may be aware that you can take Asian Studies, Linguistics, International Relations, British Studies, or any of a variety of other academic fields as your area of minor specialization. The study of India fits nicely into this DES curriculum as it relates to several of the

specializations offered.

First, being an Asian country and second in population only to the other Asian giant, China, India is a country of importance to all those who wish to specialize in International Relations or Asian Studies. Given its current economic growth and increasing population, India is projected to overtake several 'advanced' countries as an economic superpower and even China in population. Neither Asian Studies nor International Relations can afford to ignore India.

Second, India is one of the most sought-after regions for linguistic studies, since it contains more than a thousand languages and countless dialects. If your area of specialization is 'language and communication' or 'linguistics,' you will find that studying about India is very helpful for understanding various issues in these fields. In particular, if you are interested in sociolinguistics, intercultural communication, language planning, or bilingualism, India is the place to investigate since it offers abundant data related to these issues (see Britto 1989; 1990).

Third, no other country has as many non-native speakers of English as India. According to Braj Kachru (2005, p.15), who bases his estimate on an *India Today* survey, there are "333 million Indians who possess varying degrees of bilingual competence in Indian English." India produces a large number of English periodicals, journals, newspapers, and books (cf. Britto 1990; 2003); and Indian writers, such as R. K. Narayan, Salman Rushdie, Vikram Seth, Arundhati Roy, and Mulk Raj Anand, have won literary awards and plaudits for their English writing. English is spoken in most parts of India, and Indian English is heading towards linguistic autonomy. For students of English, therefore, Indian English can be a significant area of interest.

Japan, like most other Asian countries, is interested in improving

the English education of its citizens and has been pouring much more money into English education than India. It is worth investigating why English education is more successful in India than in Japan and whether India can offer any hints for improving the standard of English in Japan.

Currently English educators are concerned about the role of English as a Global or International language and the many questions it raises. For example, are English learners like the Indians and the Japanese to be taught a pure 'native' variety of English or an International variety of English (containing features of American, British, and Australian Englishes), or their own local brand of English, such as Indian English or Japanese English? In this discussion again, Indian scholars like Braj Kachru play a leading role (see Kachru, 1983; 2005). So if you are interested in the future of English in Japan or in the world, you may find studying about Indian English quite useful.

## 5. Beginning Indian Studies

Given the complexity of India, you may begin Indian studies by getting a broad view of India's history and culture, and then focusing on specific issues that may interest you. To get a broad view, you may read a book like Wolpert's *India* (1991). It's a short book, but it has chapters dealing with India's ancient and modern history, its indigenous religions such as Hinduism, Buddhism, and Jainism, its encounters with foreign religions such as Islam, its socio-economic make-up, its arts and sciences, its politics and foreign policy. Another book you may read by way of introduction is Mahatma Gandhi's *Autobiography* (1957). This book is not only entertaining, with numerous anecdotes of Gandhi's foibles, but also illuminating and challenging. Gandhi

essentially sees his life as his “experiments with truth.” He feels convinced of many principles, such as nonviolence, but finds others who are equally convinced of what he believes to be false. (Isn’t this the experience of most of us?) Given this dilemma, Gandhi tries to find ways of standing for his convictions while acknowledging the rights of others to hold their convictions. In searching for a solution, Gandhi probes deep into his own Hindu religion and Christianity, the religion of his oppressors. Gandhi’s autobiography will introduce to you various Indian customs and cultural assumptions. Since Gandhi himself won’t want anybody to accept his ideas naively, try reading his biography critically. Another book that you must acquire is Basham’s *The Wonder that was India* (1967). This is a rather difficult and long book, but you’ll find it an irreplaceable reference. Written objectively by a foreigner, this book will give you a thorough introduction to Indian culture, civilization, history, languages, religions, literature, sciences, and arts. If you like to begin with a hilarious book, try *Holy Cow*, written by an Australian journalist called Sara MacDonald (2003), about her adventures in India.

## 6. Research Topics

Although you could explore deeply any of the numerous topics related to India, as a Japanese, you might like to consider the following ones: Creation myths in the Indian puranas and Japanese legends—The Indian roots of Japanese Buddhism—The origin and evolution of Mahayana Buddhism—Hindu elements in Mahayana Buddhism—Buddhist values in ancient Tamil epics—How Hinduism absorbed Buddhism—Cultural similarities between Indians and Japanese—Is Tamil the root of Japanese?—How have India and Japan coped with

foreigners and foreign influences?—Industrialization Indian-style and Japanese-style—Japanese feudal system and the Indian caste system—Indian influences on Japanese culture (curry rice, Japanese chess (shogi), Zen, Religious rites, use of Sanskrit) and vice versa—Indian English and Japanese English—English education in India and Japan—The sense of honor and shame in India and Japan—The role of India in Japanese War trials—Indo—Japanese relations since India's independence—Subash Chandra Bose and his encounters with Japan—Indian attitudes toward Japan, and Japanese attitudes toward India—Images of India in Japanese literature (e.g., Endo Shusaku's *Fukai Kawa*), and images of Japan in Indian literature—Japanese contributions to India (e.g., in rice production, technological knowhow)—Indian gurus (e.g., Rajneesh, Mahesh Yogi, Sai Baba, Amma) and their influences in Japan—Japanese and Indian views about nuclear energy and nuclear proliferation—Japanese attitudes to Indian nuclear tests—Is India's brain drain Japan's brain gain?—Indian IT workers in Japan—Indian Call Centers and Japanese companies—Japanese businesses in India—Japanese cultural values in Japanese factories in India.

If you would like to concentrate on some topics specifically Indian, you might consider the following: The origin and development of the Gandhara art—The Wisdom literature of India—Indo-Pakistani relations—Indian resilience in the face of crises—Gandhi's agrarian vs. Nehru's industrial philosophies—Indira Gandhi as a politician—Indian integrity and separatist movements—Roots of Indian poverty—Movies in India—Images of India in non-Indian movies and TV programs (e.g., *Gandhi*, *A Passage to India*, *The City of Joy*, *The Jewel in the Crown*, *Fukai Kawa*)—Images of India in Indian movies and TV

programs (e.g., *Salaam Bombay*, *Mississippi Masala*, *Water*, *Mutthu*, *Bombay*, *Pathar Panchali*)—Images of India in English or Japanese novels (e.g., *Freedom at Midnight*, *A Suitable Boy*, *The Raj Quartet*, *Fukai Kawa*)—The future of India—Can India become an economic superpower?—Software production in India—Indian economic liberalization and consequences—Political stability of India—Role of the mass media in Indian politics—What holds India together?—Indian English—Can Indian English become autonomous?—English writers of India—India as a land of spirituality—Indian gurus and masters (e.g., Sai Baba, Rajneesh (Osho), Maharishi Mahesh Yogi, Bal Yogi, Krishnamurthi, Aurobindo, Ramakrishna, Vivekananda, Ramana Maharishi, Tony de Mello, Vinoba Bhave)—Atheism and agnosticism in India—The status of Indian women—Child labor in India—Family planning in India—Caste in contemporary India—Voluntarism in India—Indian taboos and superstitions—Indian prejudices and biases—Indian customs and practices—Indians overseas (e.g., in Australia, New Zealand, Canada, U.S.A., U.K., Africa, Singapore, Fiji, Malaysia).

Obviously, the above topics are merely to pique your curiosity. You can think of many others, especially by browsing through the extensive *Bibliography* and *Internet Resources* I have listed (see 8 & 9).

## 7. Basic facts about India

(Unless stated otherwise, the list is based on 2001 data)

*Capital*: New Delhi

*Exports*: Farm products, textile goods, leather goods, gems, jewelry, software services and technology, engineering goods, chemicals, etc.

*Full name:* Republic of India (Parliamentary form of government with bi-cameral legislature. A union of 28 states and 7 centrally administered union territories.)

*GNI per capita:* US \$1340

*International dialing code:* +91 \* *Internet domain:* .in

*Life Expectancy:* 66.8 years [Male : 65.7 yrs, Female : 67.9 yrs]

*Literacy:* 74.0 per cent [Male 82%; Female 65%]

*Major languages:* English, Tamil, Telugu, Hindi, and about 18 other official languages

*Major religions:* Hinduism (80.4%), Islam (13.4%), Christianity (2.34%), Sikhism (1.87%), Buddhism (0.76%), Jainism (0.4%), Zoroastrianism, Judaism, Bahaism, and other religions.

*Money:* Indian Rupee = ₹1.77 or US\$0.02 as of July 2011

*National Animal:* Tiger \* *National Fruit:* Mango \* *National Flower:* Lotus

*Population:* About 1.2 billion [Rural 70% & Urban 30%]

## 8. Bibliography

The following is a list of India-related books in Sophia University Central Library. For your convenience the call number of each book is also given so that you may get the book fast. This list is slightly old. To find a recently acquired book, use a Sophia University Library Search tool like OPAC <<http://www.sophia.ac.jp/jpn/top/research/>>.

### 8.1 Reference and General Interest

Chopra, P.N., and Prabha Chopra. *Encyclopaedia of India*. Delhi: Agam Prakashan, 1988. [Stacks DS:405:C47:1988:v.1 and v.2]

*Classical Dictionary of India*, A. New Delhi: Oriental Books Reprint Co., 1986. [Ref. DS:405:G3:1986]

- Crooke, William. *Things Indian: being discursive notes on various subjects connected with India*. Delhi: Oriental Books Reprint Corp., 1972. [Stacks DS:405:C94:1972]
- India, A reference annual*. New Delhi: Publications Division, Ministry of Information and Broadcasting, 1953-[Ref and Stacks. DS:405: I64:1988~93]
- India: A short cultural history*. (2nd rev. ed.) New York: F. A. Praeger, 1952. [Stacks DS:421:R35:1952]
- Nakamura, Hajime. *Ways of thinking of Eastern peoples: India, China, Tibet, Japan*. (Rev. trans. ed. by Philip P. Wiener.) Honolulu: East-West Center Press, 1964. [Ichigaya DS:12:N3513:1964]
- Nehru, Jawaharlal. *The discovery of India*. Calcutta: Signet Press, [1946?] [Stacks DS:436:A1:N4:1946 (田中文庫)]
- Rizvi, S.A.A. *The wonder that was India, volume II: a survey of the history and culture of the Indian sub-continent from the coming of the Muslims to the British Conquest, 1200-1700*. London: Sidgwick & Jackson, 1987. [Gakubu DS:425:R59:1987:v.2]
- Robinson, Francis, ed. *The Cambridge encyclopedia of India, Pakistan, Bangladesh, Sri Lanka, Nepal, Bhutan, and the Maldives*. New York: Cambridge University Press, 1989. [Ref: DS:334.9:C36:1989]
- Wisdom of China and India, The*. New York: Modern Library, 1955. [Ichigaya PJ:409:L5:1955]
- Wolpert, Stanley. *India*. Berkeley: University of California Press, 1991. [Ichigaya DS:436:W65:1965; 1965 Edition]
- Yutang, Lin, ed. *The wisdom of India*. New York: Carlton House, 1942. [Stacks PK:2978:E5:W573:1942]



## 8.2 History

- Hoernle, A. F., and Hubert A. Stark. *A history of India from the pre-historic period to modern times*. Delhi: Sri Satguru Publications, 1986. [Gakubu DS:436:H63:1986]
- Mahajan, V. D. *History of modern India: 1919–1982*. New Delhi: S. Chand & Co., 1983. [Stacks DS:480.45:M225:1983:v. 1; DS:480.45:M225:1983:v. 2]
- Sachau, Edward C., ed. *Alberuni's India: an account of the religion, philosophy, literature, geography, chronology, astronomy, customs, laws and astrology of India about A. D.1030*. Delhi: Low Price Publications, 1910. [Stacks DS:425:B57:1910]
- Sarkar, Himansu Bhusan. *Indian influences on the literature of Java and Bali*. New York: AMS Press, 1981. [Stacks PL:5170.5:S2:1981]
- Sastri, K.A. Nilakanta, and G. Srinivasachari. *Advanced history of India*. Bombay: Allied Publishers, 1970. [Ichigaya DS:436:N49:1970]
- Wolpert, Stanley. *A new history of India*. (4th ed.) New York: Oxford University Press, 1993. [Stacks DS:436:W66:1993]

## 8.3 Religions

- Aiyappan, A., and P.R. Srinivasan. *Story of Buddhism: with special reference to South India*. Madras: Govt. of Madras, Dept. of Information and Publicity, 1960. [Stacks BQ:336:A598:1960]
- Fuller, C. J. *The camphor flame: popular Hinduism and society in India*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1992. [Stacks BL:1150:F85:1992]
- Gerth, Hans H., and Don Martindale, eds. *The religion of India: the sociology of Hinduism and Buddhism*. Glencoe, Ill.: Free Press, 1967. [Ichigaya BL:2001:W443:1967]

- Hardy, Friedhelm. *The religious culture of India: power, love, and wisdom*. Cambridge [England] ; New York, NY, USA: Cambridge University Press, 1994. [Stacks BL:2001.2:H37:1994]
- Kingbury, F., and G.E. Phillips. *Hymns of the Tamil Saivite saints*. Calcutta: Association Press, 1921. [Ichigaya PL:4758.9:K5:1921]
- Martin, E. Osborn. *The gods of India, their history, character & worship*. (Rev. and enl. ed.) Delhi: Indological Book House, 1988. [Stacks BL:1216:M35:1988]
- Oddie, Geoffrey A. *Hindu and Christian in South-East India*. (London studies on South Asia, no. 6) London: Curzon Press, 1991. [Stacks BL:2016:T36:O33:1991]
- Sastri, K. A. Nilakanta. *Development of religion in South India*. Bombay: Orient Longman, 1963. [Ichigaya BL:2001.2:N5:1963]
- Singh, Khushwant. *A history of the Sikhs*. Delhi: Oxford University Press, 1991. [Stacks DS:485:P3:K48:1991:v.1]
- Titus, Murray, T. *Indian Islam: a religious history of Islam in India*. (2nd ed.) New Delhi: Oriental Books Reprint, 1979. [Stacks BP:63:I4:T5:1979]
- Troll, Christian W. *Islam in the Indian subcontinent: Muslims in secular India*. Tokyo: Institute of Asian Cultures, Sophia University, 1986. [Stacks BP:63:I4:T766:1986; Ichigaya BP:63:I4:T766:1986]

#### 8.4 India and the East

- Murthy, P. A. Narasimha. *India and Japan: dimensions of their relations: historical and political*. New Delhi: ABC Pub. House, 1986. [Stacks DS:450:J3:N37:1986]
- Roland, Alan. *In search of self in India and Japan: toward a cross-cultural psychology*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1988. [Stacks and Ichigaya BF:697:R637:1988]

- Roling, B.V.A., and C.F. Ruter, eds. *The Tokyo judgment: the International Military Tribunal for the Far East (I.M.T.F.E.), 29 April 1946-12 November 1948*. Amsterdam: APA-University Press Amsterdam, 1977-1978. [Ichigaya JX:5438.6:I55:1977:v.1 and v.2]
- Rosen, George. *Contrasting styles of industrial reform: China and India in the 1980s*. Chicago: University of Chicago Press, 1992. [Stacks and Ichigaya HD:3616:C63:R67:1992]
- Saunders, E. Dale. *Buddhism in Japan, with an outline of its origins in India*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1964. [Ichigaya BQ:676:S28:1964]

### 8.5 Language and Culture

- Art of India and Southeast Asia*. New York: H. N. Abrams, 1970. [Ichigaya N:7301:M83:1970]
- Art and architecture of India, The: Buddhist, Hindu, Jain*. (3rd ed. rev.) Harmondsworth: Penguin, 1967. [Ichigaya N:7301:R68:1967]
- Beck, Brenda E. F., et al., eds. *Folktales of India*. Chicago: University of Chicago Press, 1987. [Stacks GR:305:F65:1987; Ichigaya GR:305:F65:1987]
- Goetz, Hermann. *India: five thousand years of Indian art*. (2nd ed.) London: Methuen, 1964. [Ichigaya N:7301:G6:1964]
- Gupta, Jyotirindra Das. *Language conflict and national development: group politics and national language policy in India*. Berkeley: University of California Press, 1970. [Ichigaya JQ:220:L3:D35:1970]
- Irschick, Eugene F. *Politics and social conflict in South India: the non-Brahman movement and Tamil separatism, 1916-1929*. Berkeley: University of California Press, 1969. [Ichigaya DS:484:I7:1969]
- Jesudasan, C., and Hephzibah Jesudasan. *A history of Tamil literature*. Calcutta: Y.M.C.A. Pub. House, 1966. [Ichigaya PL:4758:J4:1966]

- Kachru, Braj, B. *The Indianization of English: the English language in India*. New York: Oxford, 1983. [Stacks PE:3502:I6:K32]
- Khubchandani, Lachman M. *Plural languages, plural cultures: communication, identity, and sociopolitical change in contemporary India*. Honolulu: Published for the East-West Center by University of Hawaii Press, 1983. [Stacks (pbk.) P:40.45:I4:K5:1983]
- Pattanayak, Debi Prasanna, ed. *Multilingualism in India*. Philadelphia: Multilingual Matters, 1990. [Stacks P:115.5:I4:M85:1990]
- Ramanaiah, J. *Temples of South India: a study of Hindu, Jain and Buddhist monuments of the Deccan*. New Delhi: Concept Pub. Co., 1989. [Stacks NA:6007:K26:R36:1989]
- Thaper, B. K. *Recent archaeological discoveries in India*. Tokyo: Centre for East Asian Cultural Studies, Unesco, 1985. [Stacks DS:418:T48:1985; Ichigaya DS:418:T48:1985]
- Zvelebil, Kamil V. *Tamil Literature*. Wiesbaden: Brill, 1975. [Stacks PL:4758:Z93:1975]

## 8.6 Society

- Biswas, A., and S. P. Agrawal, eds. *Development of education in India: a historical survey of educational documents before and after independence*. New Delhi: Concept Pub. Co., 1986, 1985. [Stacks LA:1151:D425:1986]
- Bose, Nirmal Kumar. *Culture and society in India*. Bombay: Asia Publishing House, 1967. [Stacks and Ichigaya DS:421:B718:1967b]
- Crossette, Barbara. *India: facing the twenty-first century*. Bloomington: Indiana University Press, 1993. [Stacks DS:480.853:C76:1993]
- D' Cruz, Edward. *India: the quest for nationhood*. Bombay: Lalvani Pub. House, 1967. [Ichigaya DS:436:D29:1967]

- Galanter, Marc. *Competing equalities: law and the backward classes in India*. Berkeley: University of California Press, 1984. [Stacks KNS:513.3:G27:1984]
- Ghurye, G. S. *Caste, class, and occupation*. [4th ed.] Bombay: Popular Book Depot, 1961. [Ichigaya DS:422:C3:G5:1961]
- India: new dimensions of industrial growth*. Oxford: Blackwell for United Nations Industrial Development Organization, 1990. [Stacks HC:433:I526:1990]
- Kumar, Ashok. ed. *Womenpower: status of women in India*. New Delhi: Gian Pub. House, 1991. [Stacks HQ:1240.5:I4:W662:1991]
- Kumari, Ranjana. *Brides are not for burning: dowry victims in India*. London: Sangam Books, 1989. [Stacks HQ:1017:R36:1989]
- Kuppuram, G. *India through the ages: history, art, culture, and religion*. Delhi: Sundeeprakashan, 1988. [Stacks DS:436:K87:1988:v.1, v.2]
- Liddle, Joanna, and Rama Joshi. *Daughters of independence: gender, caste and class in India*. London: Zed, 1986. [Stacks HQ:1742:L53]
- Paul, Madan C. *Dowry and position of women in India: a study of Delhi metropolis*. New Delhi: Inter-India Publications, 1986, 1985. [Stacks HQ:1017:P38:1986]
- Sharma, Brijendra Nath. *Festivals of India*. New Delhi: Abhinav Publications, 1978. [Gakubu GT:4876:A2:S5:1978]
- Subramanian, C. R. *India and the computer: a study of planned development*. New York: Oxford University Press, 1992. [Stacks HD:9696:C63:I48:1992]
- Stern, Robert W. *Changing India: bourgeois revolution on the subcontinent*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993. [Stacks DS:463:S73:1993]

Tharu, Susie, and K. Lalita. *Women in India: 600 B.C. to the present*. New York: Feminist Press at CUNY, 1991. [Stacks PK:2978:E5:W57:1991:v.1 and v. 2.]

Upadhyay, H.C. *Status of women in India*. New Delhi: Anmol Publications, 1991. [Stacks HQ:1742:U63:1991:v.1 and v.2]

### 8.7 Prominent Indians

Balse, Mayah. *Mystics and men of miracles in India*. Portland: The HaPi Press, 1976. [Gakubu BF:1434:I4:B34:1976]

Gandhi, Mohandas K. *An autobiography: The story of my experiments with Truth*. Boston: Beacon Press, 1957. [Stacks DS:481:G3:A34813:1948]

Gupte, Pranay. *Mother India: a political biography of Indira Gandhi*. New York: Scribner's, 1992. [Stacks DS:481:G23:G86:1992]

Herold, A. Ferdinan. *The life of Buddha: according to the legends of ancient India*. (trans. by Paul C. Blum) Tokyo: C.E. Tuttle, 1954. [Ichigaya BL:1470:H4:1954]

Nehru, Jawaharlal. *Jawaharlal Nehru: an autobiography with musings on recent events in India*. London: Bodley Head, 1989 (1st ed. in 1936). [Stacks DS:481:N35:A3:1989]

Peare, Catherine Owens. *Mahatma Gandhi, father of nonviolence*. New York: Hawthorn Books, 1969. [Stacks DS:481:G3:P42:1969]

### 9. Internet Resources

Modern online search tools like Google can haul for you millions of Websites dealing with India. The following, therefore, are only a selection to get you started. Be always sure to check with your teacher for the teacher's own homepage or Moodle with related resources.

Besides the Webpages listed here, there are numerous Mailing Lists, Discussion Forums, Newsgroups, Podcast sites, RSS sites, and Video sites related to India. If you are interested in such things, contact your teacher or find them using your favorite search tool.

*All the following pages were retrieved on August 6, 2011.*

*All the newspapers of India links* <http://www.indiapress.org/>

*Ancient Indus (Valley) Civilization, The* <http://www.harappa.com/har/har0.html>

*Brittonia: Francis Britto's Webpages for his students* <http://pweb.cc.sophia.ac.jp/britto/> (Usually has a page dealing with India or Indian Society, containing a number of links useful for students. Also consult the course Moodle for additional resources.)

*Constitution of India* <http://indiacode.nic.in/coiweb/welcome.html>

*Embassy of India in Japan* <http://www.embassyofindiajapan.org/>

*Feminism in India* <http://www.cddc.vt.edu/feminism/indi.html>

*India Brand Equity Foundation* <http://www.ibef.org/home.aspx>  
(Information on Indian Economy)

*India Census information* <http://www.censusindia.net/>

*India Fairs Festivals* <http://www.india-tourism.net/Fairs-Festivals.htm>

*India General FAQ* <http://www.mapsofindia.com/india-faqs.html>

*India Timeline* <http://www.kamat.com/kalranga/timeline/timeline.htm>  
(Excellent Timeline, with links to related sources.)

*India Virtual Library* <http://www.vl-site.org/india/index.html> (Portal for various pieces of info about India. Tradition and History, Travel and Tourism, Modern Media, Politics, Social Issues, etc.)

*Indian Express* <http://www.indianexpress.com/> (A famous newspaper of India)

*Indian Ministry of Tourism* <http://www.tourisminindia.com/>

*Indian Movie World* [http://news.bbc.co.uk/cbbcnews/hi/find\\_out/guides/2003/bollywood/](http://news.bbc.co.uk/cbbcnews/hi/find_out/guides/2003/bollywood/) (BBC's Introduction to Bollywood, the Indian Movie World)

*Indian Movies at UpperStall* <http://www.upperstall.com/> (All about Indian movies, actors, etc.)

*Indian Topics in New York Times* <http://topics.nytimes.com/top/news/international/countriesandterritories/india/index.htm>

*India's Largest Portal on Education* <http://www.vidyapatha.in/> (Includes information about Indian Educational Institutions and Indian Scientists)

*Internet Indian History Sourcebook* <http://www.fordham.edu/halsall/india/indiasbook.html> (Outstanding list of resources on History, Indian Religions, Culture, and Art)

*Languages and Scripts of India* <http://www.cs.colostate.edu/~malaiya/scripts.html>

*List of Indian Bloggers* <http://indianbloggers.blogspot.com/>

*List of Indian Weblogs, A* <http://www.kamat.org/community/> and <http://www.kamat.org/kamat/content.asp?BlogID=101>

*Nupam's Webpage For The Indian Coins* <http://www.nupam.com>

*Sophia University Moodle* <http://nakama.cc.sophia.ac.jp/login/index.php>

*Times of India, The.* <http://timesofindia.indiatimes.com/> (A leading Indian newspaper.)

*Women of India FAQ* <http://www.kamat.com/kalranga/women/faq.htm>

*Yoga Basics* <http://www.yogabasics.com/>

## References

Abe, Shinzo, & Singh, Manmohan. (2005, December 15). *Joint Statement: Towards Japan-India Strategic and Global Partnership.*



- Retrieved August 6, 2011, from <http://www.in.emb-japan.go.jp/PDF/joint0612.pdf> or <http://www.kantei.go.jp/foreign/abespeech/2006/12/15joint.pdf>
- Basham, A. L. (1967). *The Wonder that was India*. Delhi: Fontana Books in Association with Rupa and Co.
- Britto, Francis. (1989). *Indo no tayousei* 'Indian heterogeneity.' *Sophia*, 38 (1), 150~160.
- Britto, Francis. (1990). *Indo no Eigo* 'English in India.' In: N. Honna (Ed.), *Ajia no Eigo* 'English in Asia'. Tokyo: Kuroshio Shuppan. pp.213-236.
- Britto, Francis. (2003). The Survival of English in India. *The Journal of Sophia Asian Studies*, 21, 15-27.
- Gandhi, Mohandas K.(1957). *An autobiography: The story of my experiments with Truth*. Boston: Beacon Press.
- Kachru, Braj.(1983). *The Indianization of English: The English language in India*. Delhi: Oxford University Press.
- Kachru, Braj. (2005). *Asian Englishes: Beyond the Canon*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Keay, John. (2000). *India: A History*. New York: Grove Press.
- Luce, Edward. (2006). *In Spite of the Gods: The Strange Rise of Modern India*. London: Little Brown.
- MacDonald, Sara. (2003). *Holy Cow! An Indian Adventure*. New York: Broadway Books.
- Sen, Amartya. (2005). *The Argumentative Indian: Writings on Indian History, Culture and Identity*. London : Allen Lane.
- Varma, Pavan K. (2006). *Being Indian: Inside the Real India*. London: Arrow. (London: William Heinemann, 2005).
- Wolpert, Stanley. (1991). *India*. Los Angeles: University of California Press.

## あとがき

この本は2007年に出版された「新・地域研究のすすめ：英語圏」の改定版です。この5年の間に退官した先生もいらっしゃいますし、今回新しい内容を投稿した先生もいらっしゃいます。現状をお伝えするために改定版を出すことになりました。目次をご覧になればおわかりのように、英語学科にはさまざまな分野で研究をしている方々がいます。どんなことが研究対象になるのか、この本ではこれから勉強を始める方にそれらを紹介することを目的としています。何かに興味を持って追及していくきっかけを与えることになれば大変嬉しく思います。

たとえば、私のゼミには、言語音声の研究をしたい学生が集まってきます。その人たちは、「真剣に」研究テーマと方法について何か月も悩み、労を惜しまず「本気で」データ収集や実験を行い、ゼミ論や卒論を書いています。「卒業したら何をするのか」、ときくと、「企業への就職活動をしています」、とか、「教師になるべく活動しています」、とかいう研究内容とは無関係の答えがよく返ってきます。それでいいのです。またそれがいいのです。たとえ将来言語音声の研究で生計を立てることがなかったとしても、研究のプロセスを通じて、「正しい結論」を出せる人になって欲しいと願っています。「正しい結論」というのは「正しい選択」とは違います。「正しい結論」とは、調べられるだけ調べ分析し、考えられるだけ論理的に考えた結果、わかったことと、わからなかったことを分けて整理することです。わからないことを認識することにより、それについてさらによく調べたり、考え始めることができます。

自分で調べてみないまま、観念的な思考を植え付けられ、排他主義に陥る、一世界の遠くで起きている紛争などについて見聞きするとき、事実を知らないことが危険なことだとわかりながら、マスコミなどでこういった空のまま押し進められる議論を聞くことがなんと多いことでしょう。その聞いた情報や意見をそのまま人にも伝えていいのでしょうか？もう一度考えてみてください。今年は現代が幾種類もの大きな危機に直面していることを思い知らされる出来事がいくつも起きました。英語学科で送る日々が、事実を知り、よく考え、それを伝えられる人になれるように役に立っていると信じます。

2011年夏、改定版編集担当 篠原茂子

## 新・地域研究のすすめ

英語圏編 改訂版

---

2011 年 11 月 30 日 第1刷発行

編 集 上智大学外国語学部英語学科

発 行 者 上智大学外国語学部

〒 102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

印 刷 株式会社 プリントボーイ

---

© 2011. Printed in Japan